索ヲ容易ニスル見出ニ有之候或ハ御參考ノ一助ト gram No. 16 トアルハ彼方發十六號ノ電信ニ對スル回答 トイフ義ニシテ折目ノ一格ニ「コツピー」云々トアルハ搜 セシ寫ノ式ヲ模造シ呈御一閱候右原文中冐頭ニ Your tele-**ト存候ニ付差出候** ノ電信寫機第五十三號ニ添置候得共尚茲ニ小官親シク接手 モ可相成

右申進候敬具

明治十九年十二月三日

特命全權公使 河 瀬

外務大臣伯井上馨殿

1 二六七附屬書五來電參照

(Copy)

十九年十一月十八日英外務卿發在本邦英公使へノ訓電

EARL OF IDDESLEIGH TO SIR F. PLUNKETT. tel. No. 14 (Cypher)

Consular jurisdiction nor insist on permanence of Your telegram No. Government. We do 16. You may not desire revival reassure Japa-Nov. 18. 1886. of

> of French Minister inadmissible. Government on the above points. It should be made clear in Convention, that existing duties. that such judges shall be continued for a term, if Treaty rights will not revive at expiration of Conthe native judges should not prove equal to their foreign judges. But we shoud like some undertaking This could be done by exchange of notes. are awaiting opinion We think claim German

對 交

ニ七〇 明治上军一是一首 鮫鳥駐佛公使宛井上外務卿ヨリ

條約改正交渉方針ニ關スル訓令ノ件

在巴里全權公使鮫島尙信へ訓條案

(本文省略)

註 十二年十一月十九日森駐英公使宛訓令同文ナ 三文書参照

明治十二年二月三 目 鮫鳥駐佛公使宛井上外務卿ヨリ

條約改正交渉ニ關スル件

在佛鮫島公使へ內信案

同氏トモ御會話我國ノ近況且近來條約改正ニ付テ政府方向 過日森公使へ托シ置候一封此書御披見ノ頃ハ最早御落掌且 通今便貴兄へノ内訓狀トタリーフノ略目トヲ進呈仕候尤モ スル處モ其大略ヲ御承知相成候事ト存候右呈書中申進置候 内訓狀ノ儀ハ外務卿其他へ御視示不被成方可然只今後於常

實ニ從來各國派出領事ヨリ製造價ノ報告モナキ故困難ヲ極 スヘク只當時苦ム所ハ製造所ノ價ト保險料運送賃手敷料等 分チ或ハ百斤又ハ壹斤ニ付何程ト區別セルタリーフヲ差出 六時迄諸氏ノ勉勵ニテ多分本月二十日頃迄ニハ精密ナルス 左樣御承知有之度候當節ハ實ニ午前九時ョリ午後五時或ハ 收税ノ高點ヨリ無税ノ部迄ノ歩合ヲ相定シモノニ御座候間 來稅則ノ制限未夕各國政府へ判然不中出候故其部類ヲ別チ 地公然談判ラ開キ候時ハ右ノ大意ト手順ニテ相運ヒ候覺悟 約中附錄ニ致度他ノ港則水先規則等ノ如キハ時日ノ都合ニ **丼ニ税關規則等併セ添差出可申候右稅關規則ハ航海貿易條** ノ外手間取申候右税目ト航海ト貿易トラ会結セシ條約草案 ョレハ或ハ半價又ハ三分ノ一等ニテ更ニ引當ニ不相成故殊 メ候且運上所へ從來外人デクラールドシタル元價ハ市價ニ ペシフヰツク、ヂユチー、トアドバリユームモ充分ニ之ヲ 又ハ場合ノ模様ニョリテ變換スル事アル故附錄トシ云バウ 御座候故其都合ニテ御地政府へモ御申立有之度候第一從

中一 彼等ヨリモ各政府へ報告ラナサシメ具早ク中サハ彼政府望 約シ置候樣於當地各公使へ咄ス節ハ必兩說ヲ申出シ上ニテ 奉存候間承諾ノ都合ヲ直ニ御電報被下度候就テハ森氏トモ 觸ヲ生ズベシト御見込ニ有之候ハヾ決シテ御主張無之方ト クニテ佛國政府承諾スレハ好都合ニ御座候自然六ケ敷キ憾 ストモ他ノ政府ノ望ニ任セント云一ノ奇ナル體ニ依ルカ只 箇條ニ挿入スルトモ又前段ニ條約ト同力ヲ有スル別約 則トシ其布告ニ因テ十ケ年或ハ十二ケ年間變換セサル事 會話有之候ハ、同氏ノ意見ヲモ御承知可有之ニ付テハ同氏 申上置候通リノ ム處ニ任スト云位ノ事ニ候間其邊御含ミ被下度候 イクヲールヲ含有スル航海貿易條約ニテタリーフヲ右條約 ンド致度無之附錄ニセザル分タリト候又條約體裁ハ先便ニ ノ意見乃チタリー 揭示スルトモ敢テ異存無之候兩條ノ內只森氏ノ說ノ如 次第二有之就テハ當方ノ見込又森氏ニモ フヲ條約調印前我政府ヨリ布告シ之ヲ定 アナ 御 粗 ヺ

ネラールタリーフ如キ體ニシテ右三割以内ヲ自由ニ高下スモ可ナリ依テ只三割迄ヲマクシミユームト相定メ置所謂ゼ六品位ナレハ右拾萬圓ノ額以下ニ當ル諸品ハ實ニ雜品ト申輸入諸品ノ中壹ケ年輸入ノ價高拾萬圓以上ノ品物ハ僅三拾

題トハ存シ不申候三ケ月入牢五百圓罰金ノ分ハ十日ノ入牢 貳拾圓ノ罰金ニテモ不承知ハ不申只聊ニテモツライヤル、 受シテ彼ノコー 政ニ属スル地方ノ諸規則等ノ立法丈ハ公使等ョ 通リノ次第故隨分難題トハ心得居候得共終ニ不被行時ハ行 被下度候只此制限ノ上ニ出テサル事ヲ其地外務省へ知ヲス 毒ニ候得共只森氏ノ出立ヲ爲急候故不得止次第不惡御諒察 則ニ對シヲフエンシープニテ其種類ヲ列スレ 充分相試》度覺悟二御座候尤先便申上候小刑ト ユル事又將來裁判權ヲ漸ヲ以テ取歸ヘスノ順序ヲ開ク事故 アンド、パニシメントヲ掌握スレハ實際彼等ノ自儘ヲ押サ テ之ヲ裁判シ或ハ罰スト云點ニ歸シ可申候此點タル左迄難 ル迄ニ不過モノニ御座候内訓狀中裁判事件ハ卽前便申述候 候得共先ツ其槪略ヲ御申入御試ミ置被下度候只此度ノタリ 今後精密ナルタリーフ差出セシ時佛政府へ御申立 御座候則別紙御廻ニ及候間御一覽被下度候尤モ此邊ノ儀 上野ノ説ニ因レハ英政府於テモ格別異論有之間敷哉ノ由 ーフハ實ニ粗ナル者故御地外務省へ御持參相成候モ御氣 ヲ得 ノ目的ヲ以テ於當地公使等へ中出ス積リニ御座候 トニ於テ彼ノ裁判官我設置シタル規則 ハ先ポリ ハ則地方規 リ異論ヲ不 ノ方可然 スト 因 1

掛合吳候樣申入候積ニ御座候最早粗ホ見込丈ハ相立居候故 條約體裁ノ大意及裁判ノ制限等モ明示シ夫々各本國政府へ 通ノモノ)ヲ各公使等へ相渡シ而シテ稅則ノ大略ヲ相示シ 前例シタル如キ規則類ヲ條約中ニ揭示シテ可然事ト存候 致候實ニ此重大ナル事件ヲ取行フニハ通信第一ニ候間御地 公使へ可差遣前一便前貴方へ御落掌ノ都合ニ相運ヒ候樣可 漸々調整次第書付テモ可相渡覺悟ニ有之候尤モ右書類各國 今兩三日ヲ經候ハヾ先ツ粗テルタリーフ(則此度差出セル 在テ起ルカランチン其他衞生上或ハ道路修繕又ハレイル シメント ヨリ必ス時々御報告是祈候 シュ ミナルニ無之又シビル ノ制限ヲ不好候ハ、則スモールヲフエンシ ーチング等ノ諸規則ニ付キタル事ニテ全體ノク イロツト、ニユウスペー モ當分此儘ニ致シ置可申候又パ ーパッツレ ŗ ーブ 叉時 1 = ゥ

佛露獨墺ノ間頻ニ紛紜アルノ風跗多ク露ヨリ佛國へ密使ヲ下度候先ハ天津地方氷結中ハ差シタル事件モ有之間敷候未夕何タル通信モ無之尤モ新聞上ニハ種々ノ説モ有之中候支那事件モ先日送達致候書類中最後我ヨリ差遣候返簡後ハ

ニ付テハ大ニ駈引スル政略要用御座候事御聞込有之候ハハ直ニ御電報被下度候實ハ淸國トノ葛藤送リアライアンスナシタリ獨ハ墺ニ結盟シタリ云々慥ナル

首 でで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是祈候頓 とで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是祈候頓 とで被下の第一等勳章奉呈相成其他何レモ相變リ候事無之先御 とで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是派候頓 とで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是派候頓 とで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是派候頓 とで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是派候頓 とで被下度候追々寒氣ノ候ニ赴キ時下折角御保護是派候頓 といるでは、だい、ゼーヌ公着京ニテ延

明治十二年十二月三日

井上 醪

追テ (以下省略)鮫島 尚 信閣下

書同文ナリ 書同文ナリ

二七二 明治士年二月二十日 鮫鳥駐佛公使宛

改正輸入稅率案送付ノ件

鮫島公使別信案 第二十五號

差進候輸入稅率謬誤不少候ニ付更ニ改正ヲ加へ候分三部不 取敢此便ヲ以及遞送候也 本月十五日別紙甲號電信以テ申進候通貿易并ニ航海條約等 ノタリフハ當月末迄ニ差出候積ニ候且又先般内達書ニ添 **ク**収調不相濟候間追テ本條約案ト併テ差進候樣可致尤精

十二年十二月

ル故乙號ノ貴間ニ對シ答電不差立候間左樣御承知可有 追テ本月十六日別紙乙號貴君ヨリノ電信接手候然 通電信差立置候間右ニテ甲號電信ノ大意御了解セラル 十五日相發候當方ヨリノ電信ニ關シ同十八日 別紙丙號 ルニ

註 別紙電信甲乙丙號等見當ラズ

二七三 明治士二二月十 -<u>i-</u> Ħ 鮫井 以島駐佛公使宛 力上外務卿ョリ

條約改正交渉ニ關スル

(本文省略 鮫島公使へ内信案

同日附森公使宛内信一七〇文書同文ナ

譲ヲ申出候者モ有之間敷候得共歐洲大陸諸國ニ於テハ開國 外國公使等ノ如キハ我國ノ情態ヲ熟知致居候故强テ開國ノ 非ラテハ元ョリ實施スヘカラサル事ニ有之候即今我國在留 報酬無之テハ此特典ヲ得ル能ハストノ旨更ニ結約致候後ニ 談判ノ際開國 トノ見込モ可有之候得共其時機到來致候迄此決心ナクテハ 共只其決意ヲ要シ候迄ニ有之候右事件實施ノ點 勢モ有之候間今日直ニ實施スヘカラサルハ勿論ノ義ニ候得 不中テハ自ラ我論鋒ヲ挫キ充分我論旨ヲ主張スル事難相成 談判致候節彼ヨリ發議スルハ顯然ニ有之其際決然返答出來 ヲ承諾スル事ヲ難スルノ辭柄ト致候國モ有之ニ付今後公然 ヲ以最要ノ件トシ之ヲ望ムノ情アルニ依リ此事ヲ以我請求 右ハ現存條約 ヲ許シ候テモ可然却テ治外法權ヲ破ルノ一助共可相成候尤 ハ寧ロ諸外國一同我法律ニ服スルヲ待テ開國スルニ如 之ヲ認識 スル 彼二 在ルヲ然ルヲ之ヲ轉シテ我ニ歸シ開國セ N ノ最優待國ノ例ニ做フノ條款ヲ改正シ相當ノ ノ義ハ彼カ城壘ト為リ彼ヨリ 事能ハス我ヲシテ開國セシメサル所以 八人數二限リ内地二於テ居住商買スル 若干ノ外國人アリ其國政府ニテ公然 二七五、二七六 、發論アル ヨリ論スレ カス ŀ

> 二七四 明治十三年四月一日 井鮫鳥駐 務佛 卿公 IJ

條件附內地開放論ニ付請訓ノ件

第八號

得ヘキトノ見込ヲ以及建議候譯ニハ無之我國ヲ開カス外人我法律ニ服從スル事ヲ望ムヘク且之ヲ實地ニ施行スル事ヲ カルヘク或ハ某ノ國人不殘我法律ニ從フ事ヲ欲セサルトモシトノ事ヲ肯諾スル國アラハ其國人ニ限リ開國スルモ妨ナ 座候若シ又我國內何地タルヲ論セス全ク我法律ニ服從スヘ 答致候テモ不苦旨兼テ御指令伺置度心得ニテ申出候義ニ御 サルハ決テ我政府ノ好ム所ニ無之歐米各國同樣外國人我法 ノ 之右ハ如何ノ御見込ニ候哉抑右ノ義申出候モ今日外國人ノ 其國政府ニ於テ之ヲ許諾スル時ハ其臣民ニ限リ我 條約重修一件ニ付外國臣民ノ我國法律ニ ヘシトノ義昨年來屢々中進候次第モ有之處何等ノ :ニ服從スル時ハ何時ニテモ國ヲ開クヘシトノ主意辯明決 者ノ如ク外國ニテハ想像スル者不少ニ付右開國ヲ肯諾 内地ニ住居商買スルヲ許サ、ルハ頑固ノ舊慣ニテ拒絕ス セン事 (國ヲ開 御答令無 ラ欲 セ

段申進候敬具 結局全體ノ談判上我ニ不利有之候間前文ノ通我法律ニ服從 國ヲ開クヘシトノ旨臨機決答致候義銀テ御内許有之度候此 セント欲シ其國政府ニテ之ヲ許諾スル時ハ其臣民ニ限リ 曲 ナリトセラルル如キ姿ニ相成一步ヲ譲リ候場合ニ到

明治十三年四月一日

特命金權公使 鮫 島

外務卿井上馨殿

二七五 明治二年青二二日 鮫井 鳥上 駐外 佛公使 宛り

條約改正關係書類取扱方ニ就キ内訓ノ件

(本文省略

誈 同日附森公使宛内信一八一文書殆ント同文ナ

二七六 明治主語月十六日 井上外務卿宛一

佛國政府ト内交渉開始ノ件

上外務卿時代

對佛交涉

別信 第十號

情ラ懷キ居候次第吐露致シ候尚委細へ後便可申進候情ラ懷キ居候次第吐露致シ候尚委細へ後便可申進候無之尤諸大國ニ離レ獨立決行ノ處置へ難致候得共他國政府ニテモ可成同意ノ場合ニ運候樣折ヲ以周旋可致積ニ有之トノ旨返答有之且談話ノ際同政府ハ我政府要求ノ主義異存の一つ。

心得ニ有之候何レ其模樣ハ追テ詳細御報知可申進候後外務卿ニ面會內訓狀ノ主旨ニ基キ半公ノ談判ヲ始メ候令ノ到達ヲ待居候テハ追々時日遷延ニ有成候間旁本日午看上候處外務卿ノ多忙モ近日稍落付タル樣子ニ有之且訓一 佛政府ヘノ談判ハ公然タル訓令相達シ候迄差控ヘ可申

右之件《申進候敬具

明治十三年四月十六日

特命全權公使 鮫 島 尚 信

外務卿井上馨殿

ヲ用ユル事 施スル所ノ約定税則或ハ其他ノ税則ニテモ最低額ノ税則 施スル所ノ約定税則或ハ其他ノ税則ニテモ最低額ノ税則 帰國へ輸入スル日本物品ニ課スヘキ税則ハ同國ニテ實

右之趣一應申進置候敬具

明治十三年四月三十日

井上外務卿時代 **對佛交渉** こ七八

二七七 明治士三四月二十日 飲島駐佛公使ョリ

佛國政府ト談判ノ經過報告ノ件

六月十五日

々ノ要領左ニ略陳致侫ニ面接シ兼テ御降附ノ內達書ニ基キ半公ノ談判相開キ候件に面接シ兼テ御降附ノ內達書ニ基キ半公ノ談判相開キ候件條約重修事件ニ付先便申進置候通り去ル十六日當國外務卿

使ノ關涉ナク獨リ日本政府ニテ專制布告スル事一 日本在留佛國人民ニ施行スヘキ行政上ソ諸規則ハ佛公

處置スルノ區域ヲ立其權理ヲ施行スル事 若シ此諸規則ヲ違犯スル佛國人アル時ハ日本官吏之ヲ

施スル事ー・新條約ハ期限ヲ立七ケ年或ハ十ケ年ヲ以テ期限トシ實ー・新條約ハ期限ヲ立七ケ年或ハ十ケ年ヲ以テ期限トシ實

特命全權公使 鮫 島 尚 信

外務卿井上馨殿

二罷在候此段申添候也
コリノ訓令ナリトシ改テ公然委曲ノ談判ニ取懸り可申積有之何レ詳細ノケ條ハ追テ公然タル訓令拜受致候上閣下有之何レ詳細ノケ條ハ追テ公然タル訓令拜受致候上閣下

二七八 明治主 兵月三十日 鮫島駐佛公使宛

定約稅及普通稅併用ノ新方針ニ付訓令ノ件

鮫島公使別信案 第十六號

リニテハ迚モ好結果ヲ得難ク被考候ヨリ改テ我政府ノ定議至リ同公使ヨリ申出ノ事情等彼是勘辨致候ニ最前ノ考案通日本皇帝ヨリ之ヲ布告シ其期限內變更セサル事ハ別ニ約書日本皇帝ヨリ之ヲ布告シ其期限內變更セサル事ハ別ニ約書日本皇帝ヨリ之ヲ布告シ其期限內變更セサル事ハ別ニ約書日本皇帝ヨリ之ヲ不告シ其期限內變更セサル事ハ別ニ約書日本皇帝ヨリ之ヲの告の表別ニの法の表別に対している。

註 1前掲二七七文書ナルニ付参照

二七九 明治三年月十五日 辨上外務卿宛

新任公使ニ對スル佛國政府ノ訓令其他ニ關シ內報ノ

問合候處同局長申聞候ニハ「日本政府提出ノ改正案ニ付外リ内話モ有之候事故兩三日前外務省政務局長へ内々其模様タル事項ハ同人へ全權付與ノ都合ニ執可計旨過日外務卿ョロケツト義彌今便ヨリ赴任致候就テハ條約重修一件ニ關シロケツト義彌今便ヨリ赴任致候就テハ條約重修一件ニ關シロケツト義彌今便ヨリ赴任致候就テハ條約重修一件ニ關シロケット義職

旋可致決心ニ罷在候」トノ事ニ有之候然ルニ自分へ付與ノ ス 眞ニ日本ヲ愛好シ此上モナキ厚意ヲ抱キ被居候間本國ニ對 判ニ時日ヲ費シ結局ニハ致リ兼可申ト存候佛國新外務卿 ノ上ハ日本政府ノ爲メニ盡力勉强シ彼我ノ協議可相纒様周 ヲ與ヘ候樣充分盡力可被致事更ニ疑ナク於拙者モ勿論赴任 ŀ 國ヨリ外國へ御請求ノケ條ヲ御申出相成候時ハ外國へ報復 者此度御提出ノ草案ニテハ到底談判結牧ノ見込無御座候貴 東京着任ノ上自分見込ヲ報告可致様トノ事ニ有之候愚考ニ 政府ヨリノ訓條ハ漠然タルモノニテ且拙者ノ權限甚タ少ク 更ニロケットヲ餞別ノ爲メタ食ニ招キ懇親ノ情ヲ以吃度ナ 令ヲ與ヘタルノミニ有之」トノ事ニテ詳細ノ事情不明ニ付 ツトへハ日本到着ノ上自己ノ意見ヲ具シ報告可致様トノ訓 旨ニ有之依テ尚又商務局長へ内問致候處同人ノ咄ニ「ロ 國政府 ク訓令ノ次第致內間候處同人中聞候ニハ「今般赴任ニ付我 ル同人職掌上ノ義務ニ差響カサルタケハ日本ノ爲メ便益 シテ御讓與可被成事柄ヲモ併テ御開陳無之テハ無効ノ談 ョリ日本在留公使へ充分ノ訓令附與致候事難相 次第ヲ他ニ漏泄スル事ヲ嫌ヒ之ヲ正言セサル ノ意見及問合置候へ共未タ 何ノ返答モ無之候間 ハ外交 广ト *>*\ ヶ

充分ノ 權力ヲモ與ヘ可申積ニ有之候」トノ事ニ付更ニ 小 御座候尤同人ヨリ來報有之候上其模様ニ寄尚又明細ノ訓令 何レヨリモ回答無之依テ不得止右ノ訓令ノミ付與致候事 事件ニ付頗ル混雜シ多用ニ有之候爲メ末タ條約草案ニ關シ テ相考候意見ヲ詳細報告可致樣訓令ヲ與置候右ハ近日東方 成候哉」トノ旨ヲ尋ネ候處同卿ヨリ「同人赴任ノ上賞地ニ 注意勉强可致様トノ訓令ヲ付與致候」トノ趣ニ付倘又小生 同人東京着ノ上ハ速ニ談判相始 ヨリ「我條約重修ノ義ニ關シテハ如何樣ノ訓令ヲ御付與相 = シテハ充分ノ實意ヲ以兩國ノ裨益ニ相成候樣周旋盡力スル 中述候ニハ「今般差遣致候新公使へハ日佛兩國外交上ニ 尋候處外務卿 ハ元ヨリ中迄モ無之殊ニ日本ハ東洋諸國開化進步ノ率先者 「ロケット氏赴任相成候共我外務卿ト談判ヲ開 付同國ノ意向ハ可成伸暢發達セシムヘキ樣贊助ノ へ面語 通習 取調出來不申且各國政府ノ意見及問合置候へ共未夕 ラ シ コナレ 意見モ ロケツト ハ同 商 有之間敷樣存候其邊ハ如何ニ候哉」ト相 公使ノ言詞モ確信難致ニ付尚又昨日 へ付與ノ訓令ノ事押テ相尋候處同卿被 で権へ元 メ可申候 ョリ同人へ付與致候 へ共只條約ノ カレステ 方法 外務 == ハ 1) = =

> 事ト 甚夕面倒ニ有之最初結約ノ節議院ノ允諾ヲ得ヘキ者ヤ否 如何程全權委任ノ義ヲ佛政府ノミヘ相迫リ候共到底無効 此旨不惡御推察被下度候」トノ趣返答有之候依テ卽今假令 候義ハ貴國ニ對シ御氣ノ毒ナカラ容易ニ難取計事情有之候 異議アル時ハ實施スル事不相成故我政府ヨリ全權ヲ委任致 熟考致候上條約ヲ取結ヒ尤條約調印ノ者タリトモ議院 院ノ允諾ヲ經サレ 御存ノ通佛國ニテ ヲ決定シ且記名調印スルニ全權ハ未タ付與スル事不相叶 テ當日ハ終リ置候 相考其內英獨等ノ見込モ相分リ可中ニ付先ツ右之談判 ハ外國トノ條約書類ハ議院ノ議ニ附シ バ結局ニ至ラサル者ニ付外國ニ比スレ ピニテ ヺ

府二反 其意向ニ浸潤シ終ニ我カ爲メ不宜一人ト可 友ニ有之様子ニ付同人東京着ノ際バロワー **掲記致候程ノ人物ニ候處不幸ニシテロケツト** 勤致居候事モ有之ニ付東洋人ヲ遇スルノ悪弊ニハ多少相慣 ロケットョリハ充分日本ノ爲メ周旋盡力可致積ニ有之ト 居へク殊ニ現今在東京佛代理公使バロワー儀ハ兎角我政 旨申居候へ共其言詞ノ通全ク信用ハ難致候數年北京ニ在 背ノ情アリテ常ニ外務省へノ報告中我國ノ惡評 相 ノ 說 ŀ 成哉モ難計候 ラ問 ハ年 來ノ 牛多少 シノミ 信

義難事ニ付同人到着ノ際御交際上別テ御注意被降同人ヲシ 得共右様ノ人物ニ相成候ヤ否ハ大ニ我ョ テ支那人ニ接シタル舊弊ヲ我國ニテ再出セシメス又バロワ 有之最初一度我ニ背クノ意ヲ生セシメハ再ヒ我良友ト致候 ニ希望仕候 ノ悪意ヲ將來ニ繼續セシメサル樣ノ御仕向ニ相成候樣偏 コリノ待遇方ニ 關係

成候後去ル七月八日付ヲ以同人ヨリ英外務省へ報告致候書 ノ大略内々致承知候ニ付御含迄申上候即如左 先般在東京英代理公使ケネデーへ條約草案書類御渡相

笨書類差出候右ハ可成速ニ閣下へ差進度存候ニ付明日發 井上外務卿ヨリ閣下可差進様トノ趣ヲ以被相渡候條約草 不被致事ト存居候處此度ノ草案ニテ甚失望致候將又稅權 及陳述候次第モ有之同君ニハ最早此權理請求ノ義ハ着手 一月中前外務卿ソルスブリー侯へ内報致置候通井上君へ ヲ超へ過高ニ相成居候云々 義ハ井上君ヨリ前以拙者へ內話被致候處トハ大分程度 無之候得共一應入念通讀致候處裁判權ノ義ニ付テハ當 郵便ラ以遞送致候故於拙者ハ右書類ヲ篤ト檢閱致候時

今日迄ノ模様ハ先ツ右ノ通ニ御座候尚今後ノ事情ハ追々可

中進候敬具

明治十三年十月十五日

鮫 尙 信

Ŀ.

外

務

卿 殿

二八〇

明治古星月二八日

井上外務卿

宛時 代理 公使

我提案ニ對スル佛國政府ノ態度內報ノ

機密信 第四號

見合且他各國政府ト共ニ内議ヲ盡シ候上ナラテハ實際ノ著 手二不及見込ナリトノ返答有之候然ルニ新任公使ロケツト 付同人ヨリノ報告到着前ハ何様ノ事柄タリトモ先ツ決議相 使赴任ノ上質地ノ事情ヲ親視シ其意見ヲ具シ報告可致筈ニ 鮫島氏ヨリ巳ニ内信ヲ以被申進候通於佛政府ハ東京在留公 之哉過般內々佛外務省政務局長並商務局長迄及偵問候處故 條約重修事件ニ付故鮫島公使逝去後佛政府ノ模様如 早速外務省商務局長ニ面會シ(本件ハ即今專ラ同人ノ手中 ニ付同人ョリ報告ノ次第モ可有之哉ト想察シ其模様探偵旁 義東京安著已ニ閣下ニモ御接見相成候趣新聞紙ニテ見受候 何可有

充分ノ全權委任相成候樣執計吳度旨申入候處商務局長ョ 答言大略如左 ハヾ其見込如何有之候哉致承知度且可成急速ロケツト ハナリ)我政府ヨリ請求ノ件 々佛政府ニテ取調相 IJ 濟 \sim

果ニ到リ候様取計度トノ望意ヲ抱キ居候へ共即今ノ勢ニ 來於我政府ハ貴國ノ爲ヌ充分ノ友情ヲ存シ何卒都合能結 説明書モ有之參照ノ上貴政府御請求ノ主意ハ致了解候元 成哉ト存候右稿本ノ義ニ付テハ曾テパロワーヨリ差越候 處乍殘念右ノ稿本ニ從ヒ之ヲ基礎トシ及御談判候事難相 存候貴政府ヨリ御差出ノ稿本ヲ熟讀シ其件々ヲ沈思致候 白模様ニ有之候段吐露セサルヲ得サルハ實ニ殘念ノ至 何計愉快ニ可有之ト存候へ共拙者ノ職務上今日ノ處不面 拙者希望スル所ニシテ如此談判出來候場合ニ到候ハヾ如 商務局長云巳ニ是迄モ御面晤ノ節ニ致陳述候通貴政府 ケットへ充分ノ全權委任ノ見込ハ未夕相立策候先當分ノ テハ於拙者何樣ノ事項タリトモ決定難致我政府ニテモ 見込ミ回答トラ待チ暫ク着手ノ義見合セ候積ニ御座候到 御請求相成候條件ヲ悉ク承諾ノ御返答ニ及度ハ元 ロケットヨリノ報告到着ト各國政府へ曾テ及問合置候 3 IJ 3 п _

> 日遷延ノ虞アリ之カ為メ談判都合能捗取好結局ニ到ル事 ヲ變セラレサル間ハ乍御氣之毒種々ノ異議差起リ 底拙者一己ノ愚考ニテハ今般御提出ノ條約書體裁ニテ如 無覺束哉ト存候云 スノ請求ヲ維持セラレ於日本商議スヘシトノ御意見 兎角時

佛政府ニテ右様見込居候義 付只今强テ充分ノ全權委任ノ義請求致候共其効有之間敷ロ 候哉ニモ被相察候最早不遠ロケツトヨリノ報告到着可致ニ ノ談ニテ留置候 ケツトヨリノ報告到着致候上談判致候方可然ト相考先ツ右 ハ自ラ他政府ノ意見ニ左袒致居

拒ノ意味ニ有之候尤何レ 内達有之候然ルニ此書類ハ極密ナル 英外務省ヨリアダムスへ下付相成同人見込可申出様トノ 回答ヲ日本政府へ與ヘントノ見込有之右機密回文ノ草案 度英政府ヨリ覺書ヲ各國政府ニ廻シ其同意ヲ要シ同一ノ 處兩三日前アダムスヨリマルシヤルへ極密ノ内話ニ「此 爲サントスルヤ 他言スル事不相叶候へ共其大意ハ日本政府 我政府ヨリ提出ノ約案ニ付歐洲諸國連合同一ノ ノ勢有之樣子過日略ホ傳承致候事有之候 添削スヘキモノニ付 ヲ以當分ノ內其詳細 巳ニ自分ョ ノ請求ヲ抗 回答ヲ

佛政府 覺書ニ關シ佛政府ノ見込詳細探偵ヲ遂ケ可申進候今日迄 之候就テハ此覺書出來ノ上ハ各國政府へ回送可相成ニ付 事情 へ候共日本ノ爲メニハ不宜書付ニ有之候トノ趣內話 右書中改正ヲ要スル件々申立置候到底多少ノ改正 一應御含迄致內陳度如此二御座候敬具 へ到達候ハ、其機ヲ怠ラス早速右覺書ノ主意竝右 有 ヲ

明治十四年一月廿八日

時代理 鈴 木

外務卿井上馨殿

三署名(自署又ハ代筆)ノミナルモ稀ニハ私印ヲ押2此ノ時代ノ公信ニハ公使又ハ代理公使ノ官印ナク單 1明治十三年十二月四日鮫島公使任地ニ於テ薨去 捺シタルモノアリ

明治古學言学 五日 井鈴 上木 外駐 IJ

我提案ニ對スル各國ノ態度內報ノ件

第七號

答覺書出來シピニ内閣ノ同意ヲモ經タル後當地在留同國大 過便中進置候我條約重修事件ニ付英國外務省ニテ取調ノ回

穏ナラサルニ依り東洋一國ニ關スル事件ノ爲メ歐洲中ニ近 國ハ何レノ方向ニ決スヘキャ未夕確ト不相分候得共多分英 出候都 政府ノ意見如何タル事ハ於各國承知不致樣子ニ候へ共到底 情アルヲ発レサル姿ニ有之候只露國ノミハ全ク孤立ニテ同 接セル强國ノ親情ヲ損シ候様ノ事有之テハ卽チ自國ノ不利 獨ノ見込ニ協同可致哉ノ模樣有之候今日ノ勢ニテハ歐洲中 ス サルノ方法ヲ施シ候様子ニ有之獨逸ハ卽今專決獨行ニ及ハ 日 同政府ノ獨行ハ大陸諮國ヲ誘ヒ其意想ヲ一變シ之ニ同意セ = ヲ論述シ他各國ヲシテ其理由ニ服シ以テ我請求ニ應セシメ シテ諸外國ニ許與スヘキ事無之甚不相當ノ事也」ト 致居候へ共極密ニ屬スルヲ以未タ委敷不相分大意ハ 使へ本日致到達候樣子就テハ近日中歐洲 底意アル國ナキニ非サレトモ奈何セン大陸連立ノ國勢安 付大抵英獨兩國ノ政略ニ左袒シ斷然獨行ニ及ヒカ 英國ト協議ノ上同様ノ處置ニ出ツヘキ見込ニ相聞へ候佛 互相ノ主義ニ非ス日本ヨリ過多ノ事項ヲ要需シ其報酬 本政府ヨリ提出アリシ條約草案ニ依レハ日本政府ノ請求 テ我國ニ對シ特ニ友情ヲ抱キ都合能相運候樣周旋セント 二可相 成ト察シ候右覺書中記載ノ事柄過日 各國政府 タキ内 ノ旨趣 人之差 1

倚り過キタリトノ評判有之同人所行ハ英外務省中ニテ滿足 候様可相成哉ノ内話有之候ケネデー義ハ餘リ日本贔屓ニ片 答ヲ日 不致人々モ有之由ニ候 東京ニ派遣シ召還相成候蘭公使事件ヲ更ニ實地ニ就キ取調 三可 於テ英政府ヨリ差出シタル覺書ノ主義ニ根基シ同旨趣 有之哉トノ說ヲ承リ候蘭政府ヨリ特ニ海軍士官一名ヲ ル 本政府へ贈り候日ヲ待チ其上ニテ歸任致スヘキ內意 ノ勢力無之候パー ル覺書ノ主義ニ根基シ同旨趣ノ回クス義ハ當分滯英シ歐洲各國政府

破り候様精々盡力可致候殊ニ佛政府ノ義ハ充分周旋シ我國 即今一般ノ形況致承知候分先ツ右ノ通ニ有之歐洲各國連合 同一ノ意向ニ出候義ハ我不利ト相成候ニ付願クハ此政略ヲ 爲メ信友タル ノ趣一應御含迄內陳イタシ候敬具 シタル各國政府 ノ覺書ハ入手相叶候ハ、早速寫取差進メ可申且右 ノ質行ヲ顯ハサシメ候樣致度希望罷在候英 ノ見込ヲモ偵問ノ 上追々可 車 -進候得

治十四年二月 Ŧī.

外務卿井 上馨殿

時代 理 鈴 木 貫

井上外務卿時代

對佛交涉

明治十四年三月四日 **非上外務**卿 **炉**宛 中代理公使

英國政府ノ廻狀ニ關スル件

附屬書 英國政府ョリ條約改正ノ義ニ付佛國政府 會ノ件 十四年三月二日發鈴木代理公使來電 \sim M

機密信 第八號

以申進候段御詳知ノ事ト存候右書中所言ニ據レハ「於英國 到底日本ヨリ 外國人ノ權理ニ關スル程度過大ニシテ而其報酬 廢棄スル事ハ之ヲ肯スル能ハス日 叶候乍去內々其大意ヲ承リ候ニ付不取敢別紙寫ノ通電信ヲ ヲ以百方遂探偵候ヘ共頗ル秘密ニ取扱居候故未タ入手不相 照會ノ義ハ去月廿六日當府在留英大使ョリ其本國政府下命 先便申進候我條約重修ノ件ニ關シ英政府 許與スヘキ事ハ發言アラス互相ノ主義ニ背キ甚不相當也 條約改正ノ義ハ承諾セリト雖モ今日現存ノ諸約款ヲ悉皆 通佛外務卿へ及照會候樣子傳承候故右書類致一覽度望意 ス云 々 旨ヲ論述シ且各國政府於テモ英國ニ 提出アリシ草案ハ商議ノ本ト為シ得べキ者ニ 本政府ヨリ請求ノ事項ハ ヨリ我締盟各國 同意 トシテ外國 シ日 木

致候様可相成ト存候在日本佛官員ヨリ外人ノ裁判ハ米タ日 存候へ共自分一已ノ想像ニテハ多分英國ヨリノ相談ニ協同 立候尤各國政府ノ意向ラモ承リ候上ナラテハ決議不致事ト 國ヨリノ照會落手已來未夕日數モ無之ニ付何分ノ見込不相 速外務省中ノ模様承リ合候處商務局長ノ内話ニ據レハ「英 本政府へ附托スへカラサル質狀アリトノ旨曾テ報告モ有之 事項ハ御氣ノ毒ナカラ承諾難致ト存候」トノ趣申居候 付税額增加ノ義ハ別段異議有之間敷候得共裁判權ニ關係 赴任可致内意ニ有之トノ趣致傳承候 ハ尚ホ滯英シ各政府ヨリノ回答ヲ待チ其模様ニ依リ又々 前文ノ通英政府ヨリ各國へ照會有之候ニ付ヘークス義 ハ此照會二付如何ノ見込ニ有之候哉致承知度早 一ノ回答ヲ以テセン事ヲ慫慂ノ主意ニ有之候就

右御含迄一應申進候尚今後ノ模様ハ近々可申進候敬具

明治十四年三月四日

臨時代理 鈴 木 貫

外務卿

十四年三月二日發鈴木公使代理來信

同公使答言ノ模様早々御内報被降度候 哉否ハ難相分唯英政府ノ方ノミ確實ニ致承知候若シ貴地ニ 置候様子ニテ入手不相叶殘念ニ存候尤他國政府へ致通知候 旨ナルハ顯然ニ候へ共書中記載ノ件々確知シ辯解及度存意 テ佛公使へ御談判ノ節右邊ノ義御問試ノ都合ニ相成候ハ ニテ間接直接ノ手段ヲ以偵問ヲ盡シ候得共極テ秘密ニ附 通知候赴ニ御座候就テハ右書翰ハ我政府ニ對シ不友情ノ主 政府ヨリ右ノ一書外二通ノ書翰添英政府參考ノ爲ヌ密ニ及 文ヲ以佛政府へ致報告候趣ハ其頃傳聞致居候處去月下旬佛 - 付閣下ト對話ノ始末幷同人實地ノ意見四十葉餘ノ長 . 1 2

子ニ御座候 此節多事取込中ニ付暫ク遲延可致ト 候處於佛政府ハ其大意ハ異議無之候得共回答ノ書翰 過般英政府ヨリ照會ノ回答催促兩回マテ佛政府へ申來 ノ旨一應及返答候様 シ

右御考量迄申進候敬具

明治十四年五月六日

外務卿井

上馨殿

臨時代理 木 貫

并上外務卿時代 對佛交涉 二八四

(英國政府ヨリ條約改正ノ義ニ付佛國政府へ照會ノ件

Minister Inouye

Tokio

a whole, circular implies rejection of our proposals. Powers to join together to express this. disposed to revise but will not abrogate, and asks large limitation of foreigner's right, but offers no reciprocal concessions. Powers arguing that Japanese Government claims circular on treaty revision to France and the other British Government sent last week confidential It says that, England feels Taken as

The English Minister S to remain at home for

the present.

Souzouke(sic)

March 2nd 1881.

二人三 明治十四年五月六日 **井上外務卿** 宛時代理公使

佛國代理公使ノ報告書ニ關スル件

機密信 第十二號

曾テ我國在留佛代理公使バロワー ョリ昨年七月中新條約案

二八四 明治十四年六月三日 **井上外務卿宛** 鈴木駐佛臨時代理公使

佛國政府ノ回答督促ノ件

機密信 第十四號

及兼候過日英國ヨリノ提出案ニ關シ我政府ノ意見ハ未夕紙 相成加之他諸國ニ關係ノ事件ニ付我一國ニテ決定難致各國 務卿多用中ノ趣ニ付)彼政府ノ模様相尋候處同人,答ニ 候」トノ挨拶ニ付尚此上ノ周旋ヲ以我政府ノ望意早々承諾 到存候追々遲滯相成御氣ノ毒ニ 中殊ニ獨逸和蘭英國等へ内談ヲ盡シタル後ナラテハ御答ニ 國ノ損害ニ關スル事務ニ至テハ平生ノ友情ヲ以取計候事難 外務省中擔任ノ者へ催促督責ヲ加居候へ共兎角佛政府多用 卜存居候此段一應申進置候敬具 相成候様度希望ストノ旨中述相別レ候又其内催促 モ未夕返答ニ不及候何レ不遠貴政府へ御答申進候都合ニ可 上ノ回答ニ及ハス蘭ヨリ同國ニ於テ會議ヲ開カントノ相談 トノ解柄ニテ時日遷延相成候ニ付過日外務大輔ニ面晤へ外 條約重修一件速ニ結局ノ場合ニ捗取候樣取計吳度旨屢々當 「於我政府ハ元ヨリ日本ニ對シ充分ノ友情ヲ抱居候ヘ共兩 候 へ 共今暫御猶豫被下度 可

明治十四年六月三日

臨時代理 鈴 木 貫

外務卿井上馨殿

一八五 明治古军汽子二日 并上外務卿宛

條約重修會議歐地開催意見ニ關スル件

機密信 第二十號

ニテ談判相開キ候方大ニ利益有之様相考候譯ハ十一年及十二年中機密第四號五號ヲ以被申進候通リ大陸中外國入ョリ內報候次第傳聞仕候右ハ故鮫島公使ヨリモ曾テ兩公使ヨリ段々中立我政府ニモ御同意ニ可相成模様在東京條約改正ノ件ハ歐地ニ於テ御談判相成候方可然旨在我佛獨

第一在我外商等私意ヲ主張シ公使ノ議論ヲ動カス等ノ弊

ナク

ル事 川間敷

旁以テ歐地ニ於テ會議御開ノ方速カニ結局ノ場合ニ可至ト第三我ヨリ彼政府ノ議ヲ左右スル間接ノ手段モ不尠

ニ御內示被降度希候ニー御內示被降度希候問御熟考有之候樣致シ度右廟議御決定ノ上ハ可成速カ

様致度存候
リモ被申立置候通ニ御座候得共他ノ政府ニテハ或ハ之ヲ異リモ被申立置候通ニ御座候得共他ノ政府ニテハ或ハ之ヲ異明モ被申立置候通ニ御座候得共他ノ政府ニテハ或ハ之ヲ異佛政府ニ於テハ自國ニテ開議致度旨銀テ申居故鮫島公使ョ

致候尙此上追々事情探り可申進候敬具

基が内密ヲ主トシ候趣ニテ兎角各政府間往復ノ模様料知難

相聞候種々探偵ヲ盡候得共一體本件ニ付テハ獨逸政府ヨリ
相聞候種々探偵ヲ盡候得共一體本件ニ付テハ獨逸政府ヨリ
相関に種々探偵ヲ盡候得共一體本件ニ付テハ獨逸政府ヨリ

明治十四年七月廿二日

臨時代理 鈴 木 貫

外務卿井上馨殿

註 1寺島外務卿時代一卷三七三參照

二八六 明治古學十一年 非日駐佛公使司

我條約案拒否ノ對策ニ關スル件

附屬書 十四年十一月五日發井田公使來電

吸密信 三十一號

ニ申進候タシ森公使ト面談ノ末歐洲近況ニ付見込相添御參考ノ爲左タシ森公使ト面談ノ末歐洲近況ニ付見込相添御參考ノ爲左我條約重修ニ付拙者着巴以來見聞探偵ノ次第且過日渡英イ

キ政略ヲ熟考スルニ二策アリ英政府ヨリ我提出ノ條約案ヲ斥却セシニ付當今我ヨリ施ベ

毎日 お除約案ヲ飽迄維持シ我ヨリ勸ル東京豫議會同ヲ

至ラント豫期シ東京豫議會同ヲ許諾スル事第11 該會同ニ付談判ノケ條ハ彼我互相ノ承諾ヲ得ルニ

ヲ取ルニ利アリト存候當地及英國ニテ見聞イタシ候實景ニ由リ勘考スレハ第二策

二好辭柄ヲ造與スルニナリ夫ニョリ彼或ハ改正ヲ辭スルモ東京會議ヲ中出シ候事ユへ我浩シ該會議ヲ拒斥セハ却テ彼改正ヲ好ズ事ヲ左右シ遷延セントスルハ彼ノ情實ナレト抑今度ノ改正ハ我ニ增益アリテ彼ニ損失アルハ明了ニ候故

亦計ガタシ

ナルヘシ でスルモノニ輕重ヲ比較セハ我ニ得ル處ノ利益ハ必一層大ノ利益ハ假令最初希望ノ點ニ十分達セズトモ我ヨリ彼ニ讓足サルガ如シト雖モ退テ之ヲ考レハ今度ノ改正ニ付得ル處東京會議ノ時ニ當リ得失ヲ槪計スレハ我請求ヲ滿足スルニ

旦改正ノ局ヲ結フニ御注目有之度候アレハ斷然東京會議ヲ承諾シ僅々ノ進步ニ止ルトモ先以一方は八澤故今度我請求ヲ十分達ル能ズトモ到底得益ハ我ニ

政府ノ處置ヲ質問シ頗ル政府中混雜ニテ不日内閣一變スベ日ヨリ兩議院會議ヲ開キチユニス國へ出兵ノ事ニ付議員等乙政府ノ意見ニ同意ノ姿ニテ格別變リ候義ナク尤去月廿八佛政府見込ハ今便前以申進候程ノ事無之候同政府ハ兎角獨

キ模様ニ候

東京會議ニ付各國ヨリ我ニ許同スル若干又彼ヨリ我ニ要求 無之シテ開議判談ノ上各公使ヨリ本國政府へ上申致候事乎 スル條件等承知致度油斷ナク探偵イタシ居候得共何分豫知 ト祭ラレ候尚追々探偵ノ模様次便可申進候 イタシ難ク歐洲諸國ニ於テモ或ハ右ニ付確乎タル定議ハ未

右ニ付去ル五日別紙寫ノ通リ電信差立候付御落手ト

明治十四年十一月十一日

特命全權公使 井 田 讓

外務卿井上馨殿

十四年十一月五日發井田公使來電

Gaimukio

desirous of suggesting that you do nothing at all judging from the present European situation I am and wait for expression intentions foreign Powers I have seen Mori and found that he has advised withdraw draft of treaty revision.1 But

之度切二致希望候 ナル影響ヲ及ホシ甚不都合ノ事ニ有之候間交際上ノ事件希 整ハス我政府ハ在外使臣ヲ信用セス國家ノ利害ニ参與セシ へ訓令ヲ下シ國家ノ爲メ飽迄奔走セシムル樣篤ト御注意有 クハ諸外國ト同一ノ方法ヲ採リ在外使臣ニ充分ノ信用ヲ與 メサルノ觀察ヲ與ウヘキ場合ニ當リ從テ事務ノ進捗ニモ大 忍ノ心ヲ懷カシムルノミナラス外人ニ對テハ我交際ノ組織 | 未夕知ラサルノ事ヲ外國政府カ其使臣ノ報告ニ依テ我 モ先中ニ問知致ス様ノ事有之候テハ啻ニ我使臣ニ慙愧難(マトン)

各國政府ニ我ノ意見ヲ述へ我ヲ利スヘキ様ニ奔走勉力スル 大關係アル條約ノケ條ヲ我ト共ニ確定スル者ハ在東京外國 政府ノ意見ヲ問ハサルヲ得サル事ト相考候然レ 柄ニ付使臣ノ考如何ヲ尋ネ且ツ使臣ヨリ其本國政府へ電報 重修ノケ條ヲ討議スルモ其權限ヲ超過スルケ條ハ逐一本國 ヲ與ヘサル趣ニ有之候左スレハ東京ニ於テ會議相開キ候末 ハ今日最緊要ノ事ニシテ即チ鄙官等在外使臣ノ急務ト信候 ノ使臣ニ非スシテ各國ノ政府ニ有之事ト存候此場合ニ於テ 外務省二於テ外國使臣ト要件ヲ談判ノ後ニ 今般條約重修ニ付各國政府ハ其使臣ニ充分ノ全權委任 ハ談判ノ事 ハ我國益々

November 1881

註 1同年九月九日附森公使來信1111三文書參照

二八七 明治古军一年六日 井井 上田 卿公 宛使

條約重修事務取扱方ノ件

考ニ渉リ候得ハ我今日ノ景況ニ於テ愈緊要ノ事ト致確信候 被下度候 外交上ノ關係ハ大小トナク在外便臣へ御通知相成義甚肝要 ニ付重復ヲ顧ミス敷件左ニ致縷陳候希クハ閣下篤ト ニ付機密信第三十四號ヲ以テ旣ニ愚見ヲ致略陳候得共仍熟 御思考

位置卑ク遙カニ他ニ劣リ居ルノ感覺ヲ不起者ハ有之間敷存 候此際若シ我政府ヨリ在外使臣ニ精細報告スル事ナク我使 ハ閣下モ素ヨリ御悉知通ノ事ニ有之我在外ノ使臣ニシテ其 在外使臣ノ位置ハ他國使臣ノ位置ニ劣リ其威光ノ薄弱ナル 自然威光モ備リ居旁事務ノ捗取モ速ニ有之候得共我國外交 萬端整頓致居ルノミナラス使臣多クハ老練博識ノ人ニシ ノ組織ハ未夕完全ニ無之老練熟達ノ者モ僅少ニ有之從テ我 一 諸外國交際ノ組織ハ本省ト其使臣トノ告知等ニ至ル迄 ァ

任國政府へ辯駁可致樣御示令被下度候 我爲メニ不利ヲ可生カ又ハ困難ヲ可來カノ怖レ有之時ハ直 チニ電報ヲ以談話ノ結果ヲ在外使臣ニ知ラシメ事ニ由 下御悉知通ノ事ニ有之候若シ彼ヨリ其本國ニ通知スル主意 通知スヘキ主意ヲ略述スル事外交上ノ恒例ニ有之候義ハ閣 又ハ書翰ヲ以テ通知スヘキ大略ヲ問ヘハ使臣ハ之レニ應 テ シ

國ノ景況ヲモ裁斷スル事ニ有之候得ハ彼ノ報告中ニ我ニ不 視セシムル義ニ付此點ニモ能々御注意被下度候 本省通知且ツ示令モ無之候テハ彼ノ誤謬ヲ咎ムヘキ證據ナ 利ノ事柄アリ又ハ事實ニ違居ル義ト想像致ス事有之候テモ ク我權理ノ抂屈ヲ暢伸セシムルノ路モ相絕へ空ク誤謬ヲ信 諸國政府ハ其使臣ノ報告ヲ信認シ夫レニ依テ使臣在留

之レニ訓令ヲ與ヘテ事ヲ爲サシメ公務ノ精勢ヲ詳カニ通知 サル義ハ明瞭ノ事ニ有之候希クハ在外便臣ヲ充分ニ信用 在外使臣カ自ラ邦家ノ爲メヲ慮リ其職ニ鞅掌スル如クナラ 篤ト御注意御實行被成度懇願ノ至ニ候 シ邦家ノ爲メニ飽迄奔走セシメ遣外使臣ノ名實被竝行候 一、外國使臣ハ如何程我ニ厚意懇親ノ色ヲ現ハシ候テモ我 シ

右件々ハ甚要用ト相考候ニ付閣下 ノ御參考迄ニ不取敢致開

陳候敬具

明治十四年十二月十六日

上外務卿宛ノモノナリ 上外務卿宛ノモノナリ 不信ニハ後信者受信者名共ニ記載無之モ井田公使發井

二八八 明治古年三百三 井上外務卿宛

條約改正ニ對スル歐洲諸國ノ態度ニ關スル件

候義ハ右談話中ノ語氣ニ充分現ハレ居候

一 拙者着任以來公使館ノ公書類致通覽候處鈴木書記官以下ノ勉强ニテ大ヒニ整頓致シ居仕合ニ候右公書ヲ大別スル下ノ勉强ニテ大ヒニ整頓致シ居仕合ニ候右公書ヲ大別スル下ノ勉强ニテ大ヒニ整頓致シ居仕合ニ候右公書ヲ大別スル下ノ勉强ニテ大ヒニ整頓致シ居仕合ニ候右公書ヲ大別スルドノ党ので、「マルシャル」ノ筆セシ行政經濟交際等ノ事柄ニテ拙者ニモ時々致參考候處大ヒニ要用ノ書類ニ有之候然レトモ今日我レニ直接ノ關係アル條約重修上ノ事柄ニ無之候故委細ハ我レニ直接ノ關係アル條約重修上ノ事柄ニ無之候故委細ハなニ関陳不致候

認メ鮫島等へ報告セシ者ニ有之拙者ニモ其大略ヲ譯述致サ人ト「マルシヤル」ト我重修事件ヲ談話ノ後一々其覺書ヲ一 其他專ラ條約重修ニ關係ノ英佛文書類有之是ハ諸國歐

ク不同意ノ話ハ不斷有之候樣子ニ相見得候語詞ハ少ク穩ニ相成タル趣ニ候得共我ヨリ提出ノ草案ニ全對スル過激ノ語氣モ相見得居候其後二三ケ月ヲ經テ談話ノ年ノ秋巴里及ヒ「ブルユクセル」ニ於テノ談話中ニハ我ニ以大ヒニ不平ヲ懷キ過日ノ懇親モ忽チ消滅ノ委ニ相成同歐人大ヒニ不平ヲ懷キ過日ノ懇親モ忽チ消滅ノ委ニ相成同

ハ可成り懇親ノ景況ニ立至り候處歐洲カ我ニ對スル厚意モ復夕漸々增加スル模様ニテ今日。 當年ノ初メニ條約重修ノ會議ヲ東京ニ可開ノ議起リ候

我ニ對スルノ實情ヲ熟考致候得ハ彼ョリ陳述ノ大意ハ左ノ議ノ為メニモ最モ有益ノ事ト相考へ右書類等ニ據リ歐洲カー 條約重修ノ義ニ付是近ノ情勢ヲ觀察スルハ今後東京會

趣ト祭セラレ候

- 宜シク此情實ヲ察セサル可ラス 朝ニシテ悉ク豹變スル能ハス日本條約ノ重修ハー朝ニシテ悉ク豹變スル能ハス日本條約ノ重修ハー
- 時俄カニ爲シ得ルト望ム可ラスルニハ東洋諸國中ニテ日本ヲ以テ第一先キニスヘルニハ東洋諸國中ニテ日本ヲ以テ第一先キニスヘ
- ヲ成ストモ行ハレ難シトスル溫和ノ重修ヲ承諾ス可シー時ニ過度ノ請求一、日本ハ條約重修期限ヲ短ク定メ今度ハ歐八モ相當

之間敷存候今回ノ重修ニハ溫和ノ請求ヲ爲シ時機ヲ失ハス考ニ供シ候飽迄我草案ヲ維持セント主張スル義ハ得策ニ有々相見得拙者ニモ是レ金ク歐洲ノ實情ト致信用候ニ付御參右四條ノ主意ハー年以來「マルシヤル」ョリノ報告ニモ屢

權理ヲ悉ク回復スル様致度希望候速ニ締結シ嗣後重修ノ期ヲ五ケ年位ニ定メ置キ漸ヲ以テ我

明治十四年十二月廿三日

二八九 明治士華 | 月二十二 | 井上外務卿宛

「ルイ」氏談話概要報告ノ件

附屬書 十五年七月四日ルイ氏談話概略

へ候ニ付別紙飜譯差上候間右得貴意候敬具氏ト過日談話致シ候趣申聞ケ聊カ御參考ニモ可相成義ト考顧問格「マルシヤル」ト政務副長亞細亞事務掛リ「ルイー」九月二日到

明治十五年七月廿一日

在他

特命全權公使 井 田 讓

外務卿井上馨殿

附屬書を表列す

非上外務卿時代 對佛交涉 二八九

(十五年七月四日ルイ氏談話概略)

副長亞細亞事務掛り「ルイー」氏ト外務省ニ於テ談話 本年七月四日我顧問格「マルシヤル」ト佛外務省政務

君ノ感覺如何ナルヤヲ聞ク事ヲ得バ余ニ於テ幸甚ナラ 余レ長ク西班牙ニ旅行此頃歸巴セリ相變ラス君 ヲ見テ余レ甚々悅ブ今日面會ノ序ニ東京會議上ニ付 プ健康 ナ

員ノ東京來翰ハ一讀シタレトモ、會議未夕捗取ラサルユ 其細目ヲ未タ知ラザレハ其方法ハ我レニ利アルベキヤ或 又會議ニテ明白ニ決定セシケ條モ未タ尠シ井上卿ガ發議 余レニハ未タ ハ不利アルベキャヲ知ラス開國ノ方法ニ付キ君ハ何カ委 へ其結局二付キ今日ヨリ豫メ見込ヲ付ケル事甚夕難シ、 知ル事アル シ開國ノ事ハ重要ノ問題ナレトモ如何シテ開國スルヤ 7 如何ナル感覺モナシ、九冊ノ會議錄ト

余レ全ク知ラス 余カ知り居ル 事. ハ 頗 ル 奮聞 ニ属ス日 水

願ヲ許諾ス **判權ヲ承諾スルニ至ル事有ル可シト」明言スル迄ニ至ラ** ニ向ヒ(僅カニ二三ケ月君ノ職位ニ居リシ人ト ヘラレタリ左レバ改正上ニ付キ君ガ現今ノ感覺ハ如 タリ、 ルニ從ヒ次第ニ見込ヲ變ラレ、遂ニハ「佛國ハ日本裁 シニ、何レモ最初ハ君ト同様ノ見込ナリシガ談議ヲ重 ノ機會英カリシト雖トモ)常ニ同一ノ論旨ヲ以テ談議 ヤヲ余レ聞キ得タリ、乍併余レ數年以來君ノ先役諸君 時ニ開國セント要求ストモ其事行ハレ難ク思考スト述 ヤラ知ンガ爲メナリ、君ハ日本政府ガ裁判權ノ回 ۲ ハ他ニアラス我カ改正上ニ付キ君等ノ感覺如 而シテ先役諸君モ一説ヲ起シ、佛人民日本法律 可 三居住セント自ラ望出ル者アラバ佛政府 シト 論スルニ至 ト今日公ケトナリ内々談話 リシ - ハ談議ス 何ナ 復ト

ヌ セ

シヤル 於テ其談話書類ノ跡形ヲモ見タル 事 ナナシ

公ノ談議ニシテ全ク相五ノ理論ニ過キザリ 勿論其跡形ナシ、 又跡形ノ在ル道理ナシ、是義ハ半私半 シ、公然之レ

并上外務卿時代

對佛交涉

二八九

説ヲ主張シタリ ヲ許サ、ルハ不當且ツ痴拙ナリト余レ自ラ信シテ常ニ其 本内地ノ法律ニ服從スルヲ許ルサヽルヤ、 ハサル事又諸國ガ其人民ノ利益ヲ計ント欲セバ何故ニ日 事ヲ談セシ時モ日本へ對スル諸國ノ法權區域ヲ廣ムル能 話サレタリ其頃余レ屢々爰ニ來リ君ノ先役諸君ト日本ノ 使鮫島君ヨリモ屢々聞キシ事アリ外入日本法權ニ 開國ヲ望ミ居レトモ諸各國ガ日 バ開國ノ事決テ成ル可ラストノ趣ヲ同君ハ常ニ余レニ シテ開國ヲ許ルサヽル事日 本政府ノ見込ナリト先公 不法律二服從 各國政府ガ之 從ハサ

ルイー

新舊移轉ノ時裁判權云々 佛國ハ斯ル點迄讓與スル能ハサル レニ通スルヲ得ベキヤ サルベシ、然レドモ井上君ガ東京會議へ通知セシ文中ニ ノ如キ約束ヲ以テ開國セント欲ストモ其義ハ現今行ハレ ノ語アリ、 べ 君其大略ノ意味ヲ我 シ、日本政府ガ斯

マルシヤル

改正ノ事ニ付キ余カ知り居ル事ハ既ニ君ニ述ベシ如 余レ其細目ヲ知ラサレバ君ニ之ヲ通スル能ハス然レ ク ŀ æ

辯駁スルヲ得ラレサリシ事余レニ於テ滿足ヲ覺エ 發議ヲ諸國政府カ拒絕スルハ甚タ條理 ナキ ヲ 辯解 人ト據ナク同一ノ論旨ヲ初ヨリ繰返シテ主張セサ 其內佛外務省官員屢々更改アリ 君ニ述ヘシ如シ、余レ日本公使館ニ使ル ニ非ス、而シテ諸氏ガ間々我論ヲ可視シタル事アルモ亦 ハ其他ハ悉ク日本法權ニ服從スルトモ少シモ苦シカラス タル時ニ限リ其裁判ヲ佛國裁判ニ控訴スベキ特權ヲ與ヘ 全ク余ト同説ニナリ、日本裁判所ガ佛人ニト死刑ヲ申渡 中現今在清公使タル「ブーレー」氏ハ三年餘五ニ辯論ノ末 ニ遂ニハ君ノ先役諸君モ我カ論ノ正當ナルヲ見認メ敢テ 余レニ常々話サレタリ、依テ余レハ常ニ此論ヲ主張セシ ヲ認可セシムルニ注意シ我裁判權ヲ回復シ開國セント 官員ニ我カ主意ヲ述ベキ機會アラバ我主意ノ正統ナル事 モ其訓令ヲ與ルヲ得ラレザリシ然レトモ同氏ハ佛政府 ヲ論議スベキ訓令ハ鮫島氏モ携へ居ラレザリシ故余 云ウ迄ニ至レリ、 他日我政府ヨリ此議ヲ發言スル時ノ爲メニス可シト シ 若シ君此事ヲ論 君ノ見ル如ク此談論ハ今日ニ スルヲ欲セバ君 シ故余レハ更改 ニ向テモ亦我カ シ 初マル ルヲ得 ジ置 ν 就

イー 如ク君ノ見込ヲモ亦變スルニ至ルヲ得ント余レハ希望ス 説ヲ主張セン、而シテ君ノ先役諸君ノ見込ヲ變ヘシメシ

ル

他日 亦君ニ談ス 國案細目ヲ入手スベ リ旅行八月 又夕君 7ニ歸巴ス プ親 べ シ ラ閉 シ ル筈ナリ、 ント 其細目 欲 ス、 歸巴ノ頃ニハ ラ見テ後チ我 余 ν *>*\ 休暇 ラ ハ井上君ノ開フ得テ明日ヨ カ感覺ヲモ

マルシヤル

求スベキハ至當ノ事ト君モ思考セラルベシ來日本ガ條約ヲ改正スルノ時外國裁判權ヲ廢棄セント請來日本ガ條約ヲ改正スルノ時外國裁判權ヲ廢棄セント請重大ノ問題ハ開國ノ日於テ外國裁判權ヲ廢棄スベキー事

イー

此義二付 權ヲ拋棄スベシト確信ス、 事上ト 律ヲ實施シ果シテ能ク適應スル テ同視セス、日本ニ對シテハ他ノ東洋諸國ニ對 ノ事ヲモ爲サント欲ス、佛國ト土國トノ關係ハ政同視セス、日本ニ對シテハ他ノ東洋諸國ニ對シ爲 裁判上トニ在り、 テハ 君余レニ辯解ス 日本ニ對シテハ政事上ノ關係ナ 余レ ル ハ日本ト他ノ東洋諸 ノ證ヲ得バ佛國ハ其裁判 ヲ要セス、余ハ 目 一本ノ新 國ヲ

> 裁判官ヲ要ス、日本ノ進歩ハ著ク速ナル故此點迄ニ 意セラルベシ、新律成就ヲ要シ、新律ノ施行ヲ要シ、 スルモ亦近キニアラント余レハ自信ス ヲ キ ベ ノ上へ民心ニ適應スルヲ要ス加之能ク其任ニ堪ユベキ 、要スルノミナラス尚其他ニ要スベキ者アル事ハ君 キニ至ラバ佛國ハ日本ニ對スル裁判權ヲ自ラ廢棄スベ テ安寧ヲ享ケラル、ノ時機旣ニ來リシト公言スルヲ得 事余レ疑ヲ容レス、 ノ實行ヲ見テ議院ガ佛民 **乍併此點迄ニ達スルニハ新律成就** 八日本裁判 = 主注 施

マルシヤル

日本ニ對スル方法ヲ佛國ハ依然保持スペキャバ、日本ノ爲メ甚々不都合不正ナル歐諸國連合一致シテ佛國ガ日本ニ對スル裁判權ヲ自ラ拋棄ス ル ノ 時機來ラ

ルイ

ヲ並行セシムルヲカムベシ余ハ日本政府ガ其内地ノ佛民迄達スルニハ尙數年ヲ要スベシ、夫レ迄ノ間相互ノ希望等ノ事ヲ今日ニ於テ談スルハ尙早シ、此事ヲ論スベキ點此裁判權ノ問題ハ他ト連合スベキ性質ヲ有セサル故余ガ

ン事ヲ恐ル
テ佛法權ノ下ニ體クヲ拒ミ相五希望ノ並行ヲ遂ケ難クセ

ルシヤル

遂ケ難クセン事ヲ恐ル、 ヘス、君カ旅行シテ歸巴スル ス、井田公使ハ會議ノ事ニ付キ君ノ感覺ヲ聽ント望ミ居 ヲ談議スベキ訓令ラ遺ル事アラン、其節ハマタ詳カニ ガ能ク知ル如シ、余レ思ウニ日本政府ハ井田 シ 復夕君ト委シク談論スル 談議セン、今日相互ノ會話ハ全ク公事ノ性 充分ノ好意ヲ以テ條約ヲ改正 ガ其裁判 君談話シテ余レニ之レヲ示サレシ事感謝 円權ヲ保持 日本ハ各國ニ利益アル譲與ヲ發 時機アラント 時分ニハ日本ノ セ ント言張り セント欲スル事 ・希望ス 相 訓令ヲ 公使二 Ŧ. 質 ノ希 ヲ帯 細目 ハ君 モ = 皇 得 ٤ 君 ヲ

二九〇 明治十五年七月 日 井上外務卿宛

アダムス氏談話ノ大要内報ノ件

別紙『アダムス』ノ談話等傳聞ニ付尙『マルシヤル』へモ附屬書 十五年七月 日アダムス氏談話要略

班上外務卿時代 對佛交涉 二九〇

結果ヲ得サリシ事ヲ佛政府へ報告シタルナルベシ成ヤト被問懸候由旁推考候得ハ「トリク1」ヨリモ會議ノ長へ同人面會ノ節東京會議ハ無結果ナリシ是ヨリ如何可被我會議ノ感覺如何ニ注意爲致居候處過日佛國外務省商務局

セサレトモ此一事迚モ或ハ其好結局ヲ見ル能ハサルベ東京會議ハ無効ナリシ、稅目ノ一事ニ就テモ未夕明瞭ンケツト」氏ハ左ノ趣ヲ「マルシヤル」へ談話セシ由 で開英公使館へモ東京會議錄凡テ到達ノ由ニテ「プラ

秘事ヲ我々耳朶ニ觸レシメタル其虞意ハ如何ノ點ニ有之哉 閣下御參考迄ノ事ト御承知被成下度候尤他人ノ機密 小生直々面談不致儀故十分見貫 含ノ上全ク御一覽ノ上御投火被成下度候アダムス氏ノ如斯 且ツ彼等ノ身上ニモ相及ヒ公事渫露スルノ儀故其邊篤ク御 **候儀故公使館往復書類へモ載セ不申寫ヲモ止メ置不申** 右ノ通聞込候丈ケ則私信ヲ以テ申上置候唯々入念ノ 一此アダムスノ言語ニ就キ有益ナル事モ 彼へ申含候條々 御示 シ 被成下度奉願 、キ候事不相叶 殘念奉存候萬 猶此機 二會 為申上 三屬 全ク シ

註 本信ニハ年月日モ後信者及受信者名モ記入サレ居ラズ

阿屬書

(十五年七月 日「アダムス」氏談話要略)

ヤル」ト密話セシ條々ノ要略ヲ左ニ記述ス現今在ベルヌ府英公使アダムス氏來巴ノ節顧問格「マル

タル書狀中ノ趣ハ卽チ左ノ如シ官(註 英書記官サトー氏ナルヘシ)ヨリ内々書キ送り條約改正豫議會ニ付キ其感覺如何ヲ在東京ノ或外國交際

大意) 大意) 大意)

保シ難ケレトモ多分ヴェド氏ノ代リニ清京ニ赴ク可シト説アリト或人余ニ告ケタリ其風俗確實ナルヤ否ハ素ヨリ英外務省中ニハ「パアクス」ハ日本ヨリ轉勤スルトノ風

ヲ用 欲スル數條アリ余ハ改正ラ仕遂ル目的莫ク日本へ赴任 各國ニ終了期限ヲ承諾セシムルニハ日本カ是迄主張セ ト云ウヘシ、余ト説ヲ同ウセサル者モアルヘケレト ス、一ノ調和ニ到ルニハ好時機ニ才智ヲ用ヒ相五ノ厚意 ニハカヲ與ヘタリ又歐政府厚意ノ氣向モ舊時ノ如ク ラ ヲ得ル事未タ期シ難シ其譯ハ是迄日本ノ外交政略巧ミナ レ若シ改正ヲ仕遂レハ交際官奉務中ニ一事ヲ仕成 ア ル意ハ毫モ無之壯年ニ非ス又獨立ニ生活スル丈ノ財産 がモ相 終了期限莫ク永久ニ持續ス可キ者ト論スルハ真ニ頑愚 如ク拾年前ヨリ日本ノ事ヲ論議セシ主意ニ違ハサ サカ為メニ友意アル者ニハ失望セシメ却テ敵意アル ル故何カ一事 來余ハ潛心熟考セシ末尚君ニヘマルシャ 其都合二到ルモ難計ト考居ルノミ此風聞ノ耳ニ入り 余ハ條約二終了期限アルモノトスル論者ナリ、 ル 事須要ナリ、日 立チ余カー身ノ為メニモ滿足ナル ナリ彼ノ後任ハ多分批者ナラント外務省中 (シ居ル由、余ハ果シテ可然トハ信セサレ ラ爲ス目的ナク歐地ヲ離レルヲ欲セス余 本ノ事ニ付キ余ノ考ハ君カ常ニ知 ヘシ併シ此 ル) 告 モシ徴 ケント モ ルナ ナルラ者 滿足 モ

可ラス就 程度トラ豫定シ置キ其度ニ達スル時ヲ以テ結了 限ヲ何年何月日ト空ニ豫定セス日本カ改良スヘキ條件ト 就服スヘキ理由ヲ詳記シテ余レニ示サレ度、余ハ終了期 理ノ勢モ亦甚タ大ナラス最强ノ者ハ シト ラス就テハ條約修了期限ノ事ヲ一ノ覺書ニ認メ歐人ヲヲ要ス併シ其道理ハ歐人ノ能ク了解スル道理ナラサル 本ハ强者ノ權力ヲ有セサル故ニセメテ道理 ヲ爲遂ルト自信セシ ス ヲ比較セサリ モ他ノ論旨ヲ主張セサル可ラス、日本ハ能 ッシ雷 如キモ權理ノ力ハ素ョリ ニ其權理ヲ主張スル 獨リ 强者ノ權力ナ 生ノ勢力ヲ假 期限 小ナリ ノミニ 7 1 道テ宮 IJ

ノ自由 是ニテ日本へ赴任スルヲ許ルスヤ否ヲ問ウ見込ナ 水一 案ハ現條約ノ終了期限ヲ定決スペキー事 ナ ガラ立 關スル余カ見込ハ終了期限ノ一事 モ (リベルテー、アド テ少クトモ其自由 スル迄二日本 地方行政ノ自由ヲ惣テ承諾セストモ多小ノ ント欲ス、 增稅 カ漸次ニ改良ラ可 ラ日本ニ ミニストラチ 事ハ 譲與セント欲ス余カ 困難莫ルヘク ニ非ス地方行政 加點 ーヴ)余ヵ目 ニ止ラス倘終 八何 v 1

> 對者故ニ日本へ讓與スヘキ事ニ付キ事々抵抗スル 欲ス余カ為メニ之ヲ作リ賜へ。「パークス」ハ 日本ノ 反 何レニセョ余レ在東京公使ヲ承諾スル シ得 省ノ目的ヲ豹變セシムルハ輕易ナラス然レトモ若シ我レ 工非 同人 日 地方行政自由(liberté administrative) / 問題 ル見込無キニ非ス 本へ可赴任ノ命令アラハ英外務省ノ目的ヲ多少變改 ス彼ハ充分ニ其目的ヲ遂ケタル故今ニ到テ英外務 カ敷年間日本ニ醸成セシ害物ラ掃除スルハ容易ノ 地方行政自由ノ件ペニ付テモ亦一ノ覺書ヲ見ント ナレハ之ヲ成遂ルニハ多少ノ障碍ナキニ非ス此制 ハ余カ見込ヲ外務 ヲ好メ

一過キサルナリ論東京迄往ク見込ナシ今日話ス事柄ハ素ョリ余ノ大主意論東京迄往ク見込ナシ今日話ス事柄ハ素ョリ余ノ大主意省ニ示シテ聽容許可セラレシ後ナルヘシ聽容ナケレハ勿何レニセョ余レ在東京公使ヲ承諸スルハ余カ見込ヲ外務

キ質シ同意ヲ得レハ東京ニ到ルヘシ治外法權ノ一事ハ條可ク承諾セシムルニ到ラハ東京へ赴任ノ前ニ巴里ト伯林可ク承諾セシムルニ到ラハ東京へ赴任ノ前ニ巴里ト伯林の水子の東政府ニ條約終了期限ト地方行政自由(リベルテ

余ノ目案ヲ實施スルニハ君ノ助言ヲ必要ナリト ルノ意ナシ余カ目案ノ大要右ノ如シ 限ノ來ル迄依然ト存シ置キ今度ノ改正 信ス 三付 丰

留スル 可ラス是迄日本ハ毫モ説解辨駁ニ力ヲ用ヒサリシ余カ歐此ノ目案ヲ行ハシムルニハ歐洲ニ説解スル事ヲ勉メサル 洲ト云ウハ歐洲各國政府ノ事ニシテ敵意ヲ懷テ東京ニ在 目案ハ極秘密ニシテ相互決テ他言ス可ラス 公使ヲ云ウニ非ス彼等ノ敵意ヲ知リナカラ同手段

當り其覺書ヲ相五ニ眞實ニ討議センコトヲ希望 ノ時ニハ必ス二件 ノ覺書ヲ見ン事ヲ欲ス ス 其 時

ヲ以テ改正ノ事ヲ討議スルハ無用タルヘシ

明治士奉一月六曾 拼拼 上田

コ ント氏談話ノ大要内報ノ件

-上候末猶又小生不在中別紙ノ如キ條々內聞及候旨書記生般マドリツト府ヨリ秘密私信ヲ以テ豫會議ノ始末御內報 中出候間不取敢再秘密私信ニテ内報及候仍而先便 十五年十一月十六日コント氏談話大要

> **縷々不能申陳大略拜啓如此御座候謹言** 候意味等ニ對シ御內答被成下候樣奉願候右ハ今朝歸巴ノ縣 今派出公使ヨリ豫會議ノ回答ヲ提シ併テ我政府要求スル處 如何ニモ殘念ノ至何卒可然好結果ヲ得度存奉候得共或ハ自 理由ヲ爲申出候様ニテハ如何哉彼是御熟考ノ上先便申上 全ク立到候ハ、誠ニ永 ト果シテ相照應シ大ニ痛心ノ至奉存候 クノ御苦配モ其効顯ノ在處ヲ不見 景況

十一月二十四日

井上外務卿殿

私信秘密

田

御承知被成下度候且アダムス氏ノ内話等ハ大ニ有所見筋ト 先便私信同樣是亦公使館簿書中不書載致候間 モ愚考罷在候間右邊ハ十分御內考有御座度此段追啓申上候 全クノ私信

(十五年十一月十六日コント氏談話ノ大略)

在東京外國交際官某ヨリ其一友人へ我東京會議へ無効ナ ト氏丼ニ佛外務省商務局長クラヴリ氏ヨリモ豫議會ハ我カ シト書送リタル事ト在巴英大使館ノ一等書記官プランケ ッ

改正ノ事ヲモ鄙官ノ目前ニテ談話致サレ候ニ付其大略ヲ記 シ閣下ノ参考ニ供ス ント氏公使館へ參ラレ四方山ノ話ノ末「マルシヤル」ト シ趣等ハ豫テ傅聞致居リタル處本月十六日佛人トニー、 二到ラサリ シト顧問格 ∡ ____ N シヤ ル 一へ曾 テ語

マルシヤル 東京會議ニ付君 4ノ感覺ハ如何

ント 會議ハ毫モ結局ヲ生セサリシ、是ヨリ後チ數年ノ 間條約改正ヲ埋葬シタリ、萬事再ヒ初メサル可ラス、余 ニ面會余ノ見込ヲ述ヘ置キシ處出發後ニ彼レ我カ主意ヲハ「パアクス」氏ニ甚タ不滿足ノ事アリ日不出發前同氏 テ自家ノ説ト爲シ論述セラレシ一事ナリ 面會余ノ見込ヲ述へ置キシ處出發後ニ彼レ

ノ事柄ヨリ商議ヲ初メタリ 本人ハ最初ニ簡易ノ事柄ヨリ商議スル ヲ爲 サス却テ混

會議中シイボルト氏ハ余輩ニ多ク質問 シヤル 余輩ハ質問ノ意味ヲ善ク解スル能ハサ (暫ラク 君ハ「トリクリ」氏ヲ如何ニ思ハル 狐疑シテ)余ハ「トリク ヲ掛ケラ ノー」氏に付 リシ ν N 7 夕 ν ሖ

ス ハス彼ハ日本ニ對シ嚴酷ナリシ、日本政府 ヨリ佛政府ニ勸メサル事 だけり パノ發議ヲ 余 ハ愚 何事

z

スル事 ル ルヤ シヤ ハ各國政府ニ於テ承諾スヘキ N 他ノ事柄ハ今ナリ ニ差置キ海關稅ノミヲ増 ヤ否君ニ ハ如 何 思 加

ント 出來サレハナリ、君等モ 非ス一己ノ私事ニ 利益モ與ヘス獨リ日本一國ノ為メニ稅則ヲ增ス事ハ決テ 則ノ事ニ付テハ彼我同意ヲ得ルニ至リシ故條約 ノ仕事ナリ リ其時モ余ハ否ト答へタリ、 ハ差置キ税則ノ改正丈ケヲ好マルルヤ」ト問ハレ 否決シテ承諾ス可ラス曾 非ス商事其他ノ仕事ト 知ル如ク交際ハ精神上ノ事 如何トナレハ歐洲ニハーノ ロア上野氏 カ余ニ 同 シク交際モ 向 ラ シ事ア 他ノ點 デ =

モ同説ナルヤ クス」 氏在京ノ間 シャル 或人ョ ハリ 改正か 3正スル事能 ポカー友人ニア 能 ルハメ ٠, 夕 ル書中ニ ノ趣 ラ書 コパア 七 IJ

ント スルヲ得ヘシト信ス、 善ク相談ヲ爲サハ余ハ「パアクス」ノ在勤中ト雖モ改正 ー ビ ン 否余ハ同 ガ | 其他爲ス可カ| 説ニ非 乍併日本ハ米人ノミニ ス、否、 ラサル事ヲ主張ス 若シ日本政府カ歐政府 ハ米國人 相 談七

氽 カ 何 ハーマ カ事ヲ決スルニ方テハ、イ ルシ 7 ル」氏へ尚内々話サ ツモ終末ノ顧問 ント 欲スル事多 ナ

マルシ 旣三屢問 タシ 事今日初メナリ、大山へモ キタレトモ會議ニ列セシ佛人ヨリ其感覺ヲ聞悦テ承ルヘシ、會議ノ結局ニ付英人ノ感覺 余卜 同 時一 一君ノ細話 ラ開 カ Ł クハ

ント へ送リシ公信ノ寫ヲモ シ、 明日 午後大 内 に々讀聞カス 111 氏ト 共 = 一來ラレい ヘシ 余カ外務省

、ルシャル 日不居住ハ君ノ意ニ適セシャ

ル 氏初メ其他ヨリモ懇遇ヲ受タリ、今日外務卿デユクント 余ハ日本へ二年居リシ二年ハ常ニ二年也併シ ル ルハ當日病氣外出ヲ得サリシ故鄙官ノミ「コント」氏翌十七日「マルシャル」ト同伴ノ積ナリシ處マルシヤ ヲ ト面 尋問シ左ノ趣ヲ談話セ 會ノ筈ナレハ最早時間無シ叉明日談話スヘシ J) v 1 倉

7 ·レトモ昨日御話ノ事ヲ尚委ク聞クヲ得ハ幸甚ルシヤル」ハ今日病氣ニ付共ニ來ルヲ得サリ パ幸甚ナッ得サリシ

> 務卿 君ニ讀聞カス可シ此公信中ニ述タル如ク會議ノ好結 到ラサル事ハ余モ豫見シ居タリ へ送リシ余ノ公信控ラ御覽ニハ入レ難ケレト 昨日ハ外務卿ト 面晤スル ヲ得サリシ、 東京 モ 3 內 IJ = 25

'n 其他ノ好氣持モ行ハレス會議 懇親厚意ノ色アレトモ「パアクス」氏ハ嚴シキ反對論議ノ景況ヲ述へ終リニハ米獨其他ノ公使等日本へ對シ 條々ヲ簡短ニ撮鉄シ彼我互ニ叮嘩懇親ノ色ヲ表スル會ト述テ公信ノ控ヲ讀聞セタリ其初メニハ我ヨリ簽議ノ 像ス英公使ガ嚴ク反對論ヲ起ス可シト ヲ近々起サント ノ見込ヲ語リシニ賛成セラレタリ 閣下 へ確言シ得ル事ト スル模様ナリ此頃同氏ト面會ノ際自家 -信スル ハ結局ヲ生セサル 等ノ事 同氏嚴シク抵抗セハ デー有之 有之シ 25 今日 ヘク想 3

大山君ハ 無効テリシト思ハルルヤ 昨日モ會議ハ無効ナリ シ · }-話 サ ν Ħ 1) 實二 全ク

コント 然り全ク終リシ是ョリ

大山 ベキ事ト思フ然ルニ君ノ云ヘル 余ハ日本發議ニ同意或ハ不同意ヲ各國政府ト 然リ全ク終リシ是ヨリ何モ可爲事ナシ 如ク會議全ク無効ナリ 答っ シ

ŀ ÷ 各國政 府 ∄ 1) 舠 = 返答モ為サト N 事ト考ヘラ N `

大山 思ハル、ヤ ント カ ラ返答ハ為サ、ル バ日本ノ發議ニ同意或ハ不同意ヲ答ルニ過キ 他事ヲ差措キ稅則而已ヲ增 日本政府 ノ後議ハ廻文ニ認メナキ故歐政府 ベシ日本公使ヨリ歐外務卿 加 スル事モ甚タ六カ で意見 サル シ べ ヺ IJ 朗 É ク シ

本ニハ未タ堪能ノ裁判官ナキ故日本法律ニ歐人ヲ從ハシシ外人へ內地ニ於テ自由營業セシムルモ日本ノ爲ナリ日ノ景況ヲ觀タリ日本ニハ商工等大事業ヲ起スベキ資金無リ歐米人ノ爲ヌニ非ス、日本在留中余レ親シク善ク日本リ歐米人ノ爲ヌニ非ス、日本在留中余レ親シク善ク日本 等凡テ増税ハ日本ノ為ナリ タリ、鄭重禮儀 ニハ如何ナル益ヲ與ヘラル、ヤ、又開國 ニアル余ノ言詞ハ金ク不同 地 シ F へ往カン 列レ往テ商事ヲ爲ス故開國 勿論ナリ 日本ハ内地ヲ開カサルトハ言ヒ居 っ會議中ニ 1 ノ言詞ハ用ヒタレトモ會議錄第拾三號中 欲ス N 此 増税ノ到益ヲ取ル代リニ歐洲意ヲ含メリ税則増加、倉庫稅 増税ノ到益ヲ収ル ケ條ニ付テハ不同意ヲ述 其筋 ジア許 1 可ヲ受ケ商人等 モ日本ノ為 殆ン レトモ歐人ニ 1 同 メナ 25

> スベキモ利益モ目的モ無キ事君ノ知ル如ナリ改正ハ日本ノ為ナル故外國ハ是非ト ・モ改正セ \mathcal{V} ŀ

大山 ニ於テスルヲ好シト思ハル、ヤ 度ノ會議ヲ無結果ト假定シテ更ニ次回會議ス然レトモ條約ハ到底改正セサル可ラス、君ノ ナシ會議好結果ヲ得 ハ君ノ談話ヲ聞キニ來リシ故君ニ對シテ論議 サリシト聞クハ甚夕遺憾 君ノ言フ如 ルニ 25 テ IJ 歐地 ク今 ス

コント 「マルシャル」ニモ此事 者ニ相談セズ彼ノ米人等ヲ顧問ニセラル、以上ハ共同承 地二於テモセヨ、日本二於テモセ 丰 諾ニ到ル事甚ダ難カルベシ「ボ - 然ラバ在東京外國交際官中モ五ニ人物ナレトモ同人へハー言ノ相談モ アソナ アヲ委ク 3 相談スベキ適當ノ ĺ 無 リシ ドーハ 趣 博識 ナリ P ス好

コント 大山 否別ニ不和アルニ非ズ 不和 ナ ル

大山 20 有體 ニ話シ賜 リシ > 厚意ヲ謝 ス 亦近 百面 會 ス べ

タリ、 べ 若シヤ今日談話 ハ日本在留中 Ĵ Ŧ 事 E 本人ニ ヲ 君ガ郵送 向 送スル モ ニ見込ヲ述居 敢 デ怪 ム者

明治十五年十一月二十四日

書記生 大 山 綱 介

井田公使閣下

一九二 明治大等月十八日 非上外務卿宛

佛國政府ノ對英回答ニ關スル件

機密 第三十三號 書坊

氏探偵ノ大要ニ有之候 に探偵ノ大要ニ有之候 大探偵候處修好局議ハ通商新條約ヲ無期ニテ締結スル英政府ノ發案ニ反シ決シテ認諾ス可ラサルモノト做シ其意ヲ政府ノ發案ニ反シ決シテ認諾ス可ラサルモノト做シ其意ヲ 以テ英政府ニ回答ス可キ趣尤通商局ノ議ハ未タ分明ナラサルトモ多分同意スルナル可クトノ事ニ有之右「マルシヤル」 以テ英政府ニ回答スのキ趣尤通商局ノ議ハ来タ分明ナラサルトモ多分同意スルナル可クトノ事ニ有之右「マルシヤル」

明治十六年五月十八日

駐佛全權公使 蜂須賀茂韶

外務卿井上馨殿

2次號文書附屬書中「ポリテカル・デパート註 1棚外註ニ「本書見へズ」トアリ

×

ン

۱ ا

石中進候也

明治十六年六月十五日

駐佛全權公使 蜂須賀茂 羽

外務卿井上馨殿

ハ六月六日トアリ ハ本月六日ノ誤ナランカ「談話筆記」ニ

2附屬書二來電ナルニ付參照

門用

(十六年六月六日蜂須賀公使佛外務卿談話筆記譯文)

ラクール」氏ト談話筆記譯。千八百八十二年六月六日蜂須賀公使ト「シヤルメル、

ヲ送越スヘシト待居レリ東京問題ニ付テハ我レノ大ニ注ノコトニ關シ拙者ヨリ報告ヲ爲シタレハ我政府ヨリ訓令公使 格別緊要ノ新報ヲ得ス然シ東京事件其他佛國ト安南公使 格別緊要ノ新報ヲ得ス然シ東京事件其他佛國ト安南

シ ヤルメルラクー 比德保府ニ在ル清國公使氏トノ談話ヲ御閱讀ナリタル可 シ思フニ右ハ事質ナルヘシ且ツ曾氏ノ言ノ i 氏 閣下 ハアジャン ス バ ウ ワ1 如 ク清政府ハ x 1 Ħ 今

目スル所ナリ

井上外務卿時代 對佛交涉 二九三

九一八

- アルニ顧ミ修好局トハ今日政務局ノコトナリ

二九三 明治工兵月十五日 非上外務卿宛

佛外務卿ノ内話ニ關スル件

Ⅲ 十六年六月十二日發蜂須賀公使來電Ⅲ 十六年六月六日蜂須賀公使外務卿談話筆

記

不月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ捧呈ノ儀依本月八日當國勳章御受領謝禮ノ御親書大統領へ持三日到

國ニ向テハ佛國ト日本トノ其利害ヲ同フセリ (命な) かり清政府ノ要望ハ法外ニシテ且其實ニ過ク思フニ清動サシムルニ至ラサランコトヲ希望ス然シナカラ御承知開戰ノ意ハ勿ルヘシ拙者ハ清政府カ我ヲシテ公然干戈ヲ

府へ報告ヲ爲ス積ナリ 一次外ナル事ハ閣下ト御同説ナリ此件ニ關シテハ又我政公使 アジヤンスハウワスノ筆記ハ實ニ閱讀セリ淸國要望

ヤ題ハ勿リシカ何ニカ通商條約改正ニ關係シタル事ハ無キシヤルメルラクール氏 佛日兩國間ニ何ニカ差掛リタル問

スル所ナリ (水り差掛りタル問題ハ雪ニ目今兩國間ニ差迫リタル公使 然り差掛りタル問題ハ雪ニ目今兩國間ニ差迫リタル公使 然り差掛りタル問題ハ雪ニ目今兩國間ニ差迫リタル公使 然り差掛りタル問題ハ雪ニ目今兩國間ニ差迫リタル

シク之ヲ忘却シタリ拙者ハ間ヲ得次第之ヲ勘考スヘシサル、事ヲ得ヘキヤ拙者ハ嘗テ之ヲ承知シ居タルカ今少シヤルメルラクール氏 提出案ノ脈々ト紛議ノ點ヲ今示メ

下ニ謝スモ又拙者ニ取リテモ深ク感佩セサルヲ得サルナリ拙者閣公使、閣下ノ懇切ナル言辭信實ナル趣意ハ我政府ニ取リテ

II.

註 1「アジャンス・アヴァス」ノコトナリ

(右原文)

Conversation du Ministre Hachisuka avec M. Challemel—Lacourt le 6 juin 1883.

Mr. Challemel-Lacourt: Avez-vous reçu quelques nouvelles du Japon concernant la Corée ou la Chine, et les sentiments qui animent ces pays, ce grand pays?

Mr. Hachisuka: Je n'ai pas reçu des nouvelles specialement intéressantes. Mais comme j'ai fait des rapports au sujet de Tonkin, sur ce qui se passe entre la France et l'Annam, j'espère que mon Gouvernement m'enverra les instructions. Nous regardons les questions de Tonkin avec un grand intérêt.

Mr. Challemel-Lacourt: J'imagine que vous avez lu la conversation de l'Agence Havas avec le Marquis de Tseng, Ministre de Chine qui est maintenant à St Petersbourg. Je crois qu'il y a de la verité, et que le Gouvernement Chinois n'a [pas, comme l'a dit M. de Tseng, l'intention belliqueuse. J'espère qu'il ne nous obligera pas de prendre ouvertement des mesures rigoureuses. Mais le Gouvernement Chinois a les prétentions excessives et exagérées que vous savez je pense que l'intérêt de la France et du Japon vis-a-vis de la Chine est commun.

Mr. Hachisuka: J'ai lu, en effet, la note de l'Agence Havas, et je pense avec Votre Excellence que les prétentions de la Chine sont exagères. J'ai l'inten-

tion de faire aussi des rapports à ce sujet.

Puissances. avec un vif désir d'obtenir le consentement des les propositions pour la révision, et il les a faites mon Gouvernment a fait à la conference de Tokio qui sont urgentes pour nous, mais les révisions de non seulement les questions des traités de commerce, Mr. Hachisuka: Oui, les questions pendantes sont, Aussitôt qu'il me sera possible, je les étudierai. et la bienveillance pour arriver au prompt résultat aura la bonté d'étudier nos propositions avec l'équité chose du renouvellement des traités de commerce? tions pendantes entre la France et le Japon, quelque les savais autrefois, mais je les ai un peu oubliés. Challemel-Lacourt: points de vos propositions et les difficultés? nos traités. Comme Votre Excellence le sait, Challemel-Lacourt: n'y-t-il pas quelques ques-J'espère que le Gouvernement Français Pourriez-vous m'indiquer

père que Votre Excellence voudra bien les étudier avec l'amitié et la bonne volonté.

Mr. Challemel-Lacourt: Oui, je les etudierai, aussitôt qu'il me sera possible, avec l'intention d'être favorable pour le Japon et favorable pour la France. En agissant ainsi, si je pourrai rendre plus solide l'amitié des deux pays, j'en serai très heureux.

Mr. Hachisuka: Je suis très touché pour Mon Gouvernement et pour moi des bienveillantes expressions et cordiales intentions de Votre Excellence, je vous en remercie.

附書書二

(清佛間紛爭ト條約改正ニ關スル件)

Gaimkio,

French Minister for Foreign Affairs has expressed to me his opinion that France and Japan have now a great common interest as regards Chinese pretentions and evidently wishes to know our dispositions as to Tonkin. Also asked what points as to treaty revision we principally desire to settle speedily. Will you authorize me to reply as follows: first,

Mr. Hachisuka: J'aurai l'honneur d'entretenir Votre

Excellence

propositions qu'il a soumises aux Puissances.

J'es-

Mon Gouvernement attends la réponse

de, ces questions un autre

jour, plus

全權公使 蜂

須

賀

茂

韶

ask that results of Tokio conference on commercial tions must be left to subsequent settlement we good neighbour to China and very desirous of peace, Japan being sincerely the friend of France and a at once with the addition of termination clause points including tariff should be carried into effect factory arrangement. will use all her influence towards amicable satis-Secondly, even if other ques-

附屬書

十六年六月廿一日附マルシャル報告書

Paris, 21 June 1883

外務卿井上馨殿

Hachisuka

12 juin, 1883

二九四 明治士美育子二日 井上外務卿宛蜂須賀駐佛公使ョリ

送附ノ件 佛國政府ノ對英回答ニ關スル「マルシヤル」氏報告

sible, the nature of that Circular should be discov-

ered in Paris.

the subject of revision and he asked that,

if pos-

May, Marshall wrote a report of it to

Mr. Inouye.

As that Circular proposed to the Powers

privately communicated to Marshall, and, on 11

On 6 May the substance of that Circular was

was evident that such a proposal made revision render the revised treaties unlimited in duration, it simply increase the tariff and, simultaneously, Legation in Paris that the English Government had

On the 4 May Mr. Mori informed the Japanese

the French Foreign Office on Revi-Report of Private negotiations with

just sent out a Circular to the Treaty Powers on

第三十七號 附屬書 十六年六月二十一日附マルシャル氏報告書

ハ伊藤参議森公使等へ打合置候通ニ相運候右ニ關スルマル

條約改正一件ニ付當外務省ヨリ英政府ノ廻文ニ對スル回答 シャル氏報告書及御送附候

明治十六年六月二十二日

assume, in any way, an official form. fluences and with the aid of a variety of persons. energy, with a wide extention discussion. He was, however, carried on the utmost forward as an entirely non-official and confidential of action So it went

ing Mr. Ito at Berlin. He examined the details of so far, had been indicated, by Marshall, to the introduce certain modifications into the plan which, the negotiation and recommended Mr. Hachisuka to French Foreign Office. May Mr. Mori came to Paris, after meet-

drawn up and was communicated the same day to Mr. Ito, at Moscow. In consequence, the following programme was

Conference on commercial points (including tariff) questions, should be that the results of the Tokio bility thereon. be carried into effect with the addition of termina-The immediate solution, independent of all other

additional suggestions should be put forward. Furthermore, it is much to be desired that two

That the principle of terminability be recog-

impossible, for Japan would never accept an unlimit-

liberal and more just solution. Marshall instantly began to employ private infuence in the hope of leading France to reject the Circular, against the suggestions contained in the English duty of the agents of Japan in Europe to struggle English scheme and to put before Europe a more Consequently, it seemed clear that it was the and, without waiting for instructions,

declared to be terminable in every point. the revised treaties should, on the contrary, be make a counterproposal, and to claim that, in the Marshall begged the French Foreign Office to of the English plan of unlimited duration,

immediately informed of the action which had been ference, the claims put forward by Japan at the Tokio Conother than to generally carry into effect, if possible, He fully approved it, but, as he had no instructions confidentially commenced at the Mr. Hachisuka reached Paris on 14 May and was it was that the negotiation could not Foreign Office.

nised as applying to all the other elements of the treaties.

2. That the question of administrative control over foreigners be examined, in order to decide what modifications can be at once introduced in that direction.

This programme was privately communicated by Marshall to the French Foreign Office.

The influences set to work then were so various and so powerful, and the arguments set forth were so convincing that the Political Department very soon accepted the programme. But the Commercial Department (which has the practical management of the revision) was less willing to agree; one of the sub-directors, indeed, declared that he was absolutely opposed to it. He argued that, in principle, France could not take the lead in such a question, and that, in practice, terminability was an unrealixable impossibility.

But, though this sub-director and some other functionaries who shared his views, were able to cause obstruction and delay, they were not strong

enough to prevent the final adoption of the programme.

On 20 June, after a long struggle and much anxiety, Marshall had the satisfaction of being informed by the Political and Commercial Directors, one after the other, that France adopts the programme privately communicated by Marshall, that the reply of France to the English Circular will be at once prepared on the basis of that programme, and that France will use her best influence with the Treaty Powers to induce them to accept that programme.

Furthermore, the Commercial Director promised to send Marshall a copy of the French answer to the English Circular as soon as it is signed by the Minister, and to at once instruct the French Minister at Brussells to acquaint the Belgian Government with the decision of France, so as to facilitate the similar negotiation which will be commenced at Brussells next week.

France will ask Japan to suppress the export duties on silk.

The principle of the action of France being thus settled it only remains to be seen what words she will employ in order to carry it into effect.

二九五 明治大年月二二 非上外務卿宛 財治大年月二二日 蜂須賀駐佛公使ョリ

有期通商條約締結方佛政府ニ於テ承諾ノ件

附屬書 十六年六月二十一日簽蜂須賀公使來電

右申進候也書(マルシヤル筆記英文の分)にて御承知被下度候書(マルシヤル筆記英文の分)にて御承知被下度候別紙寫の通昨夜發電いたし置候委細の儀は今便差出候報告

明治十六年六月二十二日

駐佛特命全權公使 蜂 須 賀 茂 韶

外務卿井上馨殿

哬屬書

十六年六月二十一日發蜂須賀公使來電 Envoyé le 21 juin 1883 par la Russie.

I am quite satisfied to inform you that I find in return to Paris from Vienna that after several

并上外務卿時代 對佛交涉

二九五、二九六

parts is to be regarded as terminable. proposal, immediate treaty revision of commercial weeks of confidential negotiation France ultimately telegram from Vienna. need instructions for which I asked in my to treaty revision being decided such, I no longer result there. ceed to Brussells to endeavour to obtain some tion that the entire treaty without distinction of immediate modifications therein and with a declaraministrative questions in order to introduce some has agreed to propose, in opposition to English of our treaty with the examination of ad-The action of France with respect I now pro-

Hachisuka

二九六 明治士芸モ月十四日 蜂須賀駐佛公使宛

期限附條約締結方ニ關スル佛國政府ノ內約ニ關スル

17

附屬書一 十六年六月二十日簽峰須賀公使宛往電

1 十六年六月三十日遊蜂須賀公使宛往電

三 十六年七月十四日發須賀公使來電

機密

蜂須賀公使機密信案

屬邦主義ニ關シ目下日佛兩國間其利害ヲ同スル 西ノ一國ト公然連合ノ擧動有之候テハ淸國ノ憤焰ヲシテ一 令屬邦主義ニ至テハ同一理ニセヨ)遼遠ノ東京事件ニ付泰 平和ヲ保全スルニ苦慮致候折柄今又我ニ平素關係ナキ(假 清政府ノ我ヲ嫌悪怨望スル日一日ヨリ甚シク爲メニ東洋ノ 政略ニ外ナラズト推察致候然ルニ目下日清ノ關係ハ貴官 關シ日佛兩國連合シ清政府ノ屬邦説ヲ排斥セント欲スル 國政府一面ニ於テハ我希望ニ協同シ他ノ一面ハ東京事件 題ニ付我政府ノ特ニ希望スル要點致承知度申出候趣右ハ佛 電報ニ據ルニ佛國外務卿ノ意見ニテハ支那政府ノ主張スル 露都發電信別紙自一號至五號寫ノ通致接閱候就中第四號 層旺盛ナラシメ火ヲ積薪ニ移スノ虞ナキ能ハス彼ヲ思ヒ此 東京事件二付五月二十七日六月九日同十日 ヲ慮ルトキハ此際輕易ニ佛國ノ政略ニ同意シ東京事件ニ就 キ陽ニ清國ニ抗抵ノ形迹ヲ露ワシ難ク因テ同月二十日別紙 御承知ノ通嚮キニ琉球事件アリ後ニ朝鮮ノ騒擾アリ爾來 東京事件ニ關スル意向致承知度趣且同時ニ條約改正ノ論 同十四日十八 ニ付我政府 = =

> 可成日佛共同事ヲ擧候儀ニ付我政府ヲコンミツトセサ 付此意程好夕佛政府へ御申入相成度候 成シ速ニ平和ノ結局ニ至リ候様本便ヲ用ヒ候ハ勿論ノ儀 望不致候得共陰ニ淸國ノ屬邦主義ヲ排斥シ佛國ノ論旨ヲ賛 六號寫ノ通リ答電ニ及候儀ニ有之候間右ノ旨趣御體認ノ上 御注意相成度候尤我政府公然連合ノ儀ハ右ノ次第ニ付希 ル様

覺書又ハ在日本公使ヘノ訓令ニテモ付與相成候テ稍々公然 ノ承認ヲ取リ置候様致度候間卽チ別紙八號ノ通發電ニ及候 ルヘク候得共御承知ノ通リ佛國内閣之更迭モ屢次ノ儀ニ付 親シク外務卿ヨリ御聽取相成候儀ニ付固ヨリ信據スルニ足 付シ實施候樣致度將又佛國政府ノ決意ハ旣ニ御電報ノ如ク 出テ候儀ト存候不堪欣喜候但タ佛國政府意見ノ如ク一般ノ 儀ニ有之候 ヲ至難ト爲シ候哉ト致過慮候間先以通商條約ノミへ期限ヲ 條約裁判稅則ヲ併セテ有期ノケ條ヲ加へ改正ヲ遂候ハ素ヨ ニ滿足ニ存候右ハ全ク貴官並ニマルシャル氏從來ノ盡力ニ 一、條約改正事件ニ付佛政府ノ決意御電報 (七號) 我政府ノ希望スル所ニ有之候得共各政府ニ於テハ或ハ之 ノ趣

將叉改正事件 二就テハ森公使ヨリモ英政府ノ意向報道有之

得ノ爲メニ申差進候間右之旨趣ヲ以テ御盡力相成度候 勸說シ我目的ヲ達候樣致度候別紙青木並ニ森ヘノ秘信 此段申進候也 於テモ斯諸使臣協同御盡力相成候儀ハ從來希望致候儀ニ付 今後共各自其意見ヲ融通シ同一ノ手段ヲ以テ各任國政府 且貴官ニモ森公使ト御會合相成諸事御打合相成候趣拙官ニ ==

received.

You may assure French Minister for

(追進省略)

十六年七月十四日起草同日發信

- 註 1 五月二十七日一號、六月九日二號、同十日三號及十 八日五號露都發電信ニ相當スルモノ見當ラス
- 2 六月十四日露都發四號電報ハ十二日巴里發 | 九三附 **風書二電報ナリ**
- 3 九五附屬書電報ナリ 七號電報六月二十一日露都發ハ同二十一日巴里發一
- 青木及森公使宛秘信寫ハ見當ラザルモニ三九文書森 公使宛往信參照

附屬書一

六號 十六年六月二十日發蜂須賀公使宛往電

Japanese Minister

Petersburg.

Jo

Hachisuka.

Your telegram of 14 instant duly

附屬書二 would gladly render such friendly liminary conference. the proposed Tariff annexed and with well defined first of all to conclude its commercial part with outrageous affairs at Tonkin and can not help deepnment feels negotiation with jurisdiction question may be left to subsequent termination clause as we had proposed at the prewith China. lies in its power to stay possible breach of ly sympathising with the French Government and Foreign Affairs that His Imperial Majesty's Gover-八號 十六年六月三十日發蜂須賀公使宛往電 greatly As to the treaty revision we desire concerned about the recent All other subjects good offices as Yoshida connected peace

found your telegram of 23 instant highly satisfac-Circular, is determined to act To Hachisuka. Just returned from Saikio and If you feel certain that French Government you should try in opposition to the to obtain from the English said

to ensure the fulfillment of their determination. Chargé d'Affaires here. These steps are very nemunication to this Department through the French time, try to induce them to make the same comwriting or in exchange of notes and at the same government that determination in some of this important matter. Use your best personal efforts to secure the success to complete the formality and especially form of

Inouye

十六年七月十四日發蜂須賀公使來電 Envoyé le 14 juillet 1883 par la Russie

Gaimukio

nounced in my telegram of 21 June. That answer accepts termination thereof would be fixed at some future proposes to insert a clause by which the date of time and proposes also that a similar clause of I sent you yesterday mail Copy of French answer English Circular in realization of decision animmediate treaty revision of tariff, and

> they were included in the arrangement made in of the treaty, especially those of jurisdiction. It does not mention administrative question though claims suppression of export duties on silk. termination be adopted as regards all the articles I will inquire why they are omitted.

cribed to me as not being unfavorable. be sent to London next week. Both notes are deson our treaty revision. Germany have communicated to The note of Belgium Belgium note

entirely confidential. Chargé d'Affaires in Japan, for the proposal is now communicate her proposal to you through It would be difficult for me to ask France to French

Hachisuka

二九七 明治去笔月十九日 伊藤参議宛マルシャル氏ヨ

歐洲事情報告ノ件

附屬書一 十六年七月七日附佛外務卿ョリ在英國代理 公使宛訓令

= 同 六日マルシャル氏と白耳義外務大輔ラ

Ξ 同 十三日マルシャル氏ト白耳義外務大輔ンベルモン男爵トノ對話書

同日マルシャル氏ト駐白佛公使トノ對話書

四

ノ幽話書

Brussels, 19 July 1883.

Dear Mr. Ito,

I enclose five documents, marked A to E.

- Þ lish Circular. Translation of the French answer to the Eng-
- ਸ਼ Conversation with Baron Lambermont 6 July.
- 0 Conversation with Baron Lambermont 13 July.
- Ď Minister in Brussels, 13 July. Conversation with Count de Montebello, French
- H Translation of letter from Mr. Clavery, Direc-Office 13 July. tor of Commercial Affairs, in the French Foreign

so far as it has been possible to obtain information cy the present condition of the revision negotiations, thereon from French and Belgian sources. These documents will place before your Excellen-

the Japanese Government is willing It results from these documents that, provided to accept the

> unless England refuses to admit it. terminability, in some shape, may be hoped for, expected with some certainty, and a declaration of the Powers, an early revision of the tariff may be proposals which may be finally laid before it by

appears language on 13 July) by suggestions with a someermont, ing communications made to me by Baron Lambstimulating the action of both Germany and Belgian. some small extent at all events, the effect all the more real because it seems to have had, to the service it has rendered to Japan is, however, is merged in a group of analogous propositions; the French proposal no longer stands by itself but If this be the truth the individual importance of what similar object from Berlin and from Brussels. we can judge from Baron Lambermont's guarded ting an example which has been followed and of Your Excellency will see, from the very interestto have been followed (so far, that is, as that the French proposal of terminability of set-

bility put forward (supposing that Germany and It may be that no one of the plans of termina-

information but they can influence the decisions in consequence of this, the Japanese Government negotiation is confidential, nothing can be said to until England has examined and also, that we shall have to wait for decisive news stead, to the principle of terminability. her present claim of permanence and consents, inin the end-provided always that England abandons and that some modified solution will be adopted Brussels since he got here, supplies an example of since Mr. Hachisuka arrived there, and here of Governments. What has been effected in Paris everything, nonofficially; not only can they collect can do nothing, officially, the Legations can do the circumstances, be made to her. Japan; no isolated communication could, under Belgian really make suggestions of terminability) and functions, and I indulge the hope that this what the Legations can do and of their real use will be thoroughly comprehended in Tokio, that Mr. be accepted by the other Powers as it stands of the Powers. Meanwhile, as the whole answered the But though, It seems,

Hachisuka will be energetically supported there, and that complete instructions will be sent to him at once on all the points be raised in his correspondence (most of those points are alluded to in the enclosed documents). The instructions would, of course, be used only confidentially by him in the present situation of the affair; but he should be authorized to act on them officially if the position changed and if official action became desirable.

It is necessary to foresee the possibility of changes in the position, and, at this great distance, your representatives should be thoroughly informed and instructed beforehand so that they may know how to proceed if new contingencies presents themselves. It is difficult, when modifications occur, to send sufficient details to Japan by telegraph; long reports are needed (as at the present moment) to explain exactly what is happening in Europe, and that difficulty constitutes an additional motive for employing much foresight in indicating to the Legations the conduct to be followed in all imaginable hypotheses.

fide decisions to its representative at Tokio; the will continue to largely affect the ends attained, sonal capacity and of personal means of action cabinet; and notning could serve more practically right of control is, thus far, reserved by every difficulties. No Government seems disposed to connegotiation to a source of weakness. and the absence of unity of work will always be pean Governments, even then the question of perdecide and sign. tentiary at once to Europe with full powers to the true in their efforts to influence the decisions of Eurotaken to utilise the Legations and to support them of coming events and that the greatest pains are But, ever supposing that the Legations are, hencemost interests of Japan than to send a plenipocarefully Europe is the true solution for these instructed in The transfer of the entire anticipation

Furthermore, experience is proving, conclusively, that results can be reached in Europe which are unattainable in Japan. The political atmosphere is different, feelings towards Japan are of another

character, views are higher and wider than those which prevail amongst the traders of Yokohama and which, unfortunately, react upon the foreign Ministers at Tokio.

I may add that private influences can be employed here and that they are often singularly useful, for these reasons, provided the means and arguments set to work are of a nature to influence Europeans, far greater effects can be produced here than in Japan.

alone, that plan will not be admitted in Japan. would be the advantages of negotiating in Europe prove its conditions, to which he is accredited, to do his atmost to imthem to push on the revision with the Governments exactly what Japan will accept, to urge each of instructions to your supply from Japan the most careful and detailed recommend the next best solution, which is the earnest entreaty that you will be pleased to therefore venture to I fear, however, that many and important as representatives, address to your Excellency and to consult frankly on to tell them

precise orders. pects of revision to a point which they have never ing on our personal responsibility and we have move with certainty? support from home now; otherwise, how can he does, so as to guide and assist them. and has not waited to be told to do it; he to his great credit, has seen the value of all this Japanese Government will finally admit, and how need to know what is the minimum which but we are at so advanced a stage now that we shall be constantly travelling Switzerland, Belgium, France and Spain, and we to discuss intentions and to obtain information in had the profound satisfaction of carrying the proscolleagues rapidly informed of all he learns and pressed forward everywhere and he keeps his every point with his colleagues. Mr. Hachisuka, reached before; but we can go no further without condition of success is to be able to seize opportunities as they arise, but if we have to write to are to deal with Of course we can and shall continue Thus far we have been actnew proposals. with that But he needs The object; first the has

Japan such time a new idea presents itself and have to wait months for each answer, we may wish opportunities which will not recur.

I will continue to write to Your Excellency, in conformity with your instructions, whenever I have anything of interest to say.

My wife and daughter join me in kindest regards, and I remain

Dear Mr. Ito

Your Excellency's very faithful servant
Fredrick Marshall.

日歸朝トアリ、サレバマルシャル氏報告ハ同参議馬耳日歸朝トアリ、サレバマルシャル氏報告ハ同参議馬耳塞出後後本邦宛ニ後送セラレタルモノナルベシ、伊藤塞出後後本邦宛ニ後送セラレタルモノナルベシ、伊藤

附屬畫一

Translation

The Minister for Foreign Affairs (of France) to Count d'Aunay, Chargé d'Affaires of France in London.

7 July 1883.

Sir,

delegates might refer to their Governments had to be adjourned in order that the foreign or part of the treaties at the expiration of a fixed contracting parties the faculty of denouncing all tions, and, furthermore, to attribute to each of the separate arrangements as regards commercial questo divide the negotiation and to conclude at once date the Mikado's Government put forward a claim sat till the month of July following, but at that national relations of Japan with the various States permanent conventions which regulate the intering the ameliorations to be introduced into the as you know, at Tokio with the object of considerlished between the States interested, the Conference went beyond the understanding previously estab-In the month of January 1882, a conference met, Europe and the United States of America. In consequence of these claims which

Thus far the British Government is the only one which has expressed its views on the subject. In

proposed jurisdiction would to apply are completed sion of a distinct arrangement for the settlement of Japanese Government as to the immediate conclu-Conference, and it admitted the claim to accept the project of tariff presented at the increase of import customs duties in Japan, and position to agree, under certain conditions, to an a copy, the Cabinet of London expressed the disa memorandum which was communicated to me by any modification of Article 23 of the Anglo-Japanese informed us that it was not disposed to consent to and translated. tuting Courts composed of ster for Foreign Affairs, with the Object of substipresented to the Conference by the Mikado's Mini-Government declared that, as regards the proposals tariff questions. Lord Lyons on 16 April last, and of which I annex treaty relative to the favoured nation clause, and to express an opinion until the laws which the Consular Tribunals, it would not be in a position that it could not admit the request of the Japanese Finally, the Cabinet of London But, at the same time the British foreign judges of the

Government to insert in the revised treaties a clause to the effect that these arrangements would cease to be applicable at a fixed future date. The British Government consented only to introduce into the Convention which it is desired to conclude, as regards the tariff, a stipulation which would fixt ten years as the duration of the new tariff, under the condition that any ulterior revision at the expiration of that period should be effected by common accord; but it has no intention to give up the permanent character of the treaties which exist between Great Britain and Japan.

In communicating these opinions to me Lord Lyons informed me that his Government would be glad to learn the views of the Government of the Republic on these different points, before addressing definitive instructions to its representative at Tokio.

As I promised the English Ambassador when I acknowledged the receipt of the annexed Memorandum; I have examined, conjointly with the Minister of Commerce, the questions mentioned by the

Cabinet of London. We have recognized that we could, on our part, consent to an augmentation of import duties in Japan and to the conclusion of separate arrangement for the settlement of tariff guestions, on the basis prepared in the Tokio Conference, but under the condition that the export duties on silk shall be suppressed and that there shall be certain improvements in details.

As regards the fixed limitation of the duration of this suggested arrangement, it appears to us, as it does to the British Government, that it cannot be admitted, and that it would be desirable for the moment, to fix only the date at which a new revision might be made by common accord between the interested parties. We think, however, that, on this point, it would be possible to give to Japan an entirely moral satisfaction by letting her perceive the possibility of recovering, at a more or less distant date, her liberty of action in Customs questions. With fixing for the present, as the Japanese Government asked in the Conference of 1882, the date at which the arrangement might be denounced,

we could willingly lend ourselves to the insertion of a clause by which that date might be fixed by common accord, at some future moment, which future moment, also, would not now be indicated.

In our opinion, a clause of the same nature would be equally acceptable as regards the other questions (especially those of jurisdiction) which from the object of our treaty of 1858.

I shall be much obliged to you to draw up a Note based on the preceding statement and to hand it to Lord Granville, referring to the English Memorandum and expressing a wish to be informed of the result of the examination of this communication by the British Government.

You will find herewith, for your private information, a confidential note on the question as a whole. &c.

Signed, Challemel Lacour

モノト思ハル ポム紫標記ノ文書見當ラザルモ本書翰之ニ相當スル

附屬書

B 十六年七月六日マルシャル氏と白耳義外務大輔ランベルモ

ン男僧トノ對話書

Brussels, 6 July 1883

Conversation between Marshall and Baron Lambermont, Secretary General of the Ministry of Foreign Affairs.

it is evident that we must wait for that opinion that Germany is preparing to express her opinion, acquainted with it. is adopted, the other Governments will be made that he is instructed to tell us that when a decision dopted yet. der consideration at Berlin, but no decision is acommunication has been made. you had reason to suppose had been sent out, I as regards the communication from Germany which of the French answer to the English Circular. Minister has not yet received from Paris the learn from the German Minister that no such Lambermont. You are aware that the French The German Minister adds, however, Consequently, as we now know The matter is untext

and that we cannot come to any final decision until it is before us. And I dare say that other Powers will have something to say also, and I fear that delay will occur.

Marshall. Have you any impression as to the probable nature of the opinion of Germany?

Lambermont. I have no distinct impression. And even if I had I shall prefer not to indicate it. Germany will speak for herself.

Marshall. Do you think, then, that we can do nothing at all when the French text reaches you, and that we must stand idle, for an indefinite time, until the German note, also, is in your hands?

Lambermont. Well, not quite that. There are points on which you might begin to enquire at once, so as to save time hereafter. The English Circular raises questions which will have to be dealt with, and I will mention some of them to you. England claims that foreigners shall have entire liberty of trade in and with Japan and that the Japanese Government shall cease to maintain monopolies or to support corporations or guilds whose

it has been abandoned as inpracticable, with respect to them and that other countries will that Belgium will support the views of England will be useful to cammunicate with the Japanese not think that Europe will grant it to Japan. It true, in several European treaties, but, of late years, clause. tion or interpretation of the favoured nations Japan to insert in the revised treaties any limitatraders. And she will object to the intention of object is to exclude foreigners from direct contact do the same. Government on these matters, with passports in the interior shall be granted to will also ask that greater facilities for travelling with producers and customers in Japan. Such interpretation was included, it for it is probable and I do

Marshall. I will report this to Mr. Hachisuka, and he will inform his Government. But let me say to you, so far as I am myself concerned, that I should employ all the influence I can exercise to prevent the Japanese Government from granting facilities to traders for travelling in the interior.

the foreigners with passports. the adoption of passports for the interior would be jects from accepting Japanese jurisdiction, if, for Governments have no right to prevent their subdoubt that I many arguments to submit to you, and I do not with you. I have a great deal to say about it and portunity of thoroughly discussing that question Tokio as a motive for claiming jurisdiction over at once utilised by the foreign representatives at beyond the present limits of the treaty ports, but cept Japanese jurisdiction as the condition of their jects as may desire to go into the interior to ac-European Governments to allow such of their subtheir own benefit and of their own free will, they solution for travelling in the interior is not to be bly ensue if such a scheme were applied. The true Grave difficulties about jurisdiction would inevita-Foreign jurisdiction cannot be extended that direction, but in the shall convince you that European I will take an opconsent of

As regards the interpretation of the favoured

terpretation in recent treaties and now applies the defining that interpretation is precisely to prevent nation clause I explain that the object sought by disposed to abandon the interpretaion, as unnecesaction, the Japanese Government might perhaps be judicial and personal rights were excluded from its to commercial advantages alone, and if political, of the clause were limited, in the Japanese treaties, commercial advantages alone. clause applies, exclusively, in clause without any restrictions it is because the Europe has abandoned the employment of that indifficulties on these very questions of travelling in the interior and personal rights in If the application those treaties, general.

Lambermont. We will discuss later the two points on which you have replied to me, when the Japanese Government has sent instructions upon them; but, as you have said nothing with reference to the first of the English claims—liberty of trade—I will make an observation thereon myself. M. Maeda has been a good deal in Belgium, and he

took no notice of M. Maeda's projects of monopoly unrealisable and that always ends by following its does this as Commissary of the Japanese Governefforts and he does express those ideas, and he possibility his ideas may be, he is making those intentions absolutely hostile Government, and that, in that quality, he professed fact that M. Maeda was, officially, an agent of his and did our best to help him as a pioneer of comments or of theorists to divert it from them, we natural channels, whatever be the efforts of Governby long experience, that dreams of this sort are copy of his pamphlet to that effect. lise that trade in Japanese hands; he gives me a ers from all direct trade with Japan and to monopinformed us that his object is to exclude foreignment for Commerce. however contrary to experience when I say that we saw in it a bad symptom, and I am attaching undue importance to his attitude But still we cannot shut our eyes to the However fruitless his efforts may Consequently, I do not think to the interests of and to practical As we know, be,

Maeda, you will, therefore, do well to urge M spect for M. Ito's explanations, we shall have to part of the subject as a whole, and, with supporting monopolies, in fostering opposition to has been made acquainted with the projects of M. as we do; although Belgium alone, so far as I know, point, all Europe will take the same general view commercial treaty. conditions which we must attach to the revised take them into account when we but still, I am obliged to recognise that they form sured me that I need attach no importance to them; in theory and unrealisable in practice; M. Ito as-Maeda's plans with mistrust, as being both unsound if it were free to follow its own desires. action which the Japanese Government might adopt particular hands, (as it is certain foreign branches of trade, and in trying ceedings of the Japanese Government itself that, coupling it with the direct and indirect prothese reasons I spoke to M. Ito that we view M. constantly doing) to drive we feel uneasiness Be convinced that, on this determine as to trade into all re-

Hachisuka to draw the attention of his Government to this question, for, assuredly, all Europe will agree in claiming that the trade of Japan shall be free.

suspect that that interpretation will not be advanshe has shown indifference to the subject and has will be regarded with some surprise, for, hitherto, of the Japanese treaties. This action of France decided to propose new conditions for the revision another direction to try to make friends with that France is not putting forward her plan of tageous to Japan, for it will provoke the feeling of difficulties between France a desire to favorably influence Japan in the event the part of France will be attributed, generally, to wrong in supposing that this sudden movement on seemed disinclined to move in it. the matter will not be regarded with the same right, but mainly because it suits her interests in terminability solely because she believes it to be I will now pass to another subject. Consequently, the initiative of France in and China; and I I think I am not France has

confidence as if it sprang, evidently and exclusively, from a sense of what is just towards Japan.

sure you, in all sincerity, that the action of France is manifest and I do not for an instant deny that considerations altogether independent of affairs in the revision has been mainly brought about by you positively that the decision of France as to in this matter is known to me, I am able to assure in part, but, as the entire negotiation with France circumstances, ing affairs of Europe. disposition of France to take a place in the outlyof the case, and, somewhat, from the growing from long discussion, from a careful examination we have profited by a good opportunity; but I as-China. That those affairs have had some influence has resulted, really, from totally different causes Marshall. It would be idle to pretend, under the that I do not admit your argument

Lambermont. I believe you. But others, who do not hear you, will, probably, remain convinced of the contrary, and I repeat that this sudden action of France will be viewed with some mistrust. You

places that Japan must be held fast, we feel that, in the opinion which seems to exist in certain Japan; of that I can assure you; but it is only an element and it will not decide an important element, of the subject as a whole, must not regard it as conclusive; it is an element, solution if you could get Italy to support you may say. I think you might assist in hastening a we must take account of all that our neighbours believe it to be in reality. proportioned to the somewhat superficial, and that our action will be deserves; but I say once more what I have many on the contrary, we must treat her as her progress attitude of Belgium will be most friendly towards And the German note will have much weight. The Europe. The English circular is also an element. times said to you, that we regard that progress as power and has important commercial dealings with languid interest about Japan; but as she is a great little more than she does. Italy shows only a you, it would seem natural that she should come condition Never forget that. And of Japan, we do not share as we ø

forward a little more in the matter. Holland is active about it and speaks of Japan in friendly terms. Spain is silent—too silent for the country which owns the Philippines and which has, therefore, important interests in China Seas. As all the Governments will have to agree I think you should press them all on, especially Italy.

Marshall. I will report what you have said to me.

Lamberment. But I must make a condition about that. All I have said is purely personal; I have spoken to you as a friend, and in no degree as a representative of the Belgian Government. With that restriction I authorise you to report my words. My Government is in no way engaged by them and remains as free as if I had said nothing.

附屬書三

書 ○ 十六年七月十三日マルシャル氏ト白耳義外務大輔トノ對語

Brussels, 13 July 1883.

Conversation between Marshall

and Baron Lambermont

informed, in an exact manner, of the views enteron the same question. answer of his Government to the English Circular Minister brought to me this morning a copy of the sion of the treaties with Japan, and the French a copy of it and then you will know as much as I substance. you the Berlin Note or even to state to you its tain permission from the German Minister to show a certain secrecy and I have not been albe to ob-German Gov't has always treated this matter with me to tell you what the Germans say, but the best to persuade the German Minister to authorize know what the tained on the subject in Berlin and Paris. the Note prepared by his Government on the revido. For certain points indeed, it is clearer than I expected German Note Lambermont. The German Minister has delivered the moment I can only Of course, however, Mr. Aoki can is by no means unsatisfactory; in French say, and I have done my Consequently, we are now say that You the get

in the expression of friendly dispositions towards Japan. As regards terminability it goes, I think, in some respects, a little further than the French proposal; but its plan is different. I can give you no further information on it at present; all I can do is to repeat that it is not at all an unsatisfactory document and that I have no doubt it will please you, on the whole, when you learn what it says.

Our own Note is nearly ready. I shall now complete it as soon as possible, adding what we have to say about the French and German proposals. France goes a long way (further even than Japan asked at the end of the Tokio Conference) in proposing to apply the principle of terminability to the entire treaty, including jurisdiction. I do not know exactly how we shall treat that. It is probable that we shall adopt neither the French not the German view and that we shall propose something else. But I can assure you that you will be quite satisfied with our tone when you see the note.

The action of France has been of more use to

than I thought possible a week ago, for it has not and produce less direct results than the action of already told you, the action of France will not be I was not led to expect so soon. and even that it may, perhaps, have hurried on the that it has not been without some effect in Berlin the opinion of Germany but I do incline to think for an instant, that the opinion of France decided rumoured about that France had decided to propose you than I expected and you did right to get it singular coincidence, the answers of many other only brought forward, for the first time, the idea Germany but it has served you, indirectly, more in any way decisive; it will inspire less confidence exercised a certain influence here also. As I have completion and delivery of the German Note which as if it had pressed them on. Governments have followed it immediately, almost have sent their replies to London during the last few days and England now knows what the greater terminability for the whole treaty, but, by a principle of terminability. Most of the Gov'ts I do not suppose, And all this has

part of Europe thinks.

determined. as quite definitive and I dare say that if Germany ing them, more or less completely. ciple then the Governments will have to agree how ing the idea of terminability in some form to be France and Belgium on the other side, representing the idea of permanence, and Germany, tion, as I view it, lies between England on one side, will be disposed to do so. Consequently, the quesurges those states to modify their replies they suppose that the replies so given are to be regarded acting in that careless fashion. I do not, however, proposals contained in her Circular and by acceptand there is a majority which is almost indifferent. ty includes only Germany, France and Belgium; closely and takes trouble about it; but that minoriregards the question with interest which studies it ter, into two classes; there is a minority which The states which compose that majority seem to The Continental Powers are divided, in this matanswered England by If England yeilds as regards the prinsimply echoing the Even Italy is represent-

that principle is to be applied and I imagaine that there will be much discussion on that head and that several plans will be suggested before a conclusion is reached.

Marshall. I thank you much for this information and for the opinions you have expressed. When will you be able to show me the Belgian Note in answer to England?

is only after it has been delivered in London that see it and then it must be delivered in London. It the Minister must approve it and the King must finished for some days yet, when it is complete you leave for Switzerland. It will not be quite their ing for you to be aware of their general spirit these Notes be here. But, really, I regard the language of all Lambermont. Not immediately. I be ready before details are sure to be changed before we reach than to know the details of their wording. concerns the final result. can show it to you and then you will no longer application as having no great importance as but the general spirit will, I It is far more interest-The

> tions which were discussed at the Tokio Conference yet spoken. and which can probably be settled at the same the Belgian Note to some other commercial questhe Japanese Gov't a little by drawing attention in everywhere, and I think we shall be able to assist separate arrangement will apparently be accepted in the present. and to leave for the future what cannot be effected do your utmost to persuade the Japanese Gov't to informed you. It is good. So wait in hope, and hope, be durable and of that general spirit I have time but of which no other European Power has content itself with possibilities, to take what it get now, not to ask for every thing at once, The revision of the Tariff, as a

The next step must be taken by England. It is for her to reply to the various Notes which are being addressed to her. She is not likely to hurry about that and it would be useless to attempt to hurry her. My advice to you is to leave her alone for the present, for, perhaps she will not be altogether pleased with the attitude which France,

Brussels, 13 July 1883

ways wished to assist you I am extremely glad that in the matter. I will only add that, as I have al-Government could be led, at present, to such action the affair is taking. I had no expectation that any results you have obtained and with the form which you have every reason to be Berne I may have more to tell you. I repeat that itself out to you. will ultimately be addressed to Japan will shadow degrees, the shape as to the dispositions of the various Gov'ts and, by Meanwhile you will be able to collect information Powers before ber or October, and, after that, there will of course shall learn nothing distinct from her till Septem-Germany and Belgium have taken. Government to express its views in a manner which the change of circumstances enables the Belgian is likely to be good. a further exchange of views between anything can be When you return here from of the communication which satisfied with the said to Japan. I dare say we all the

十六年七月十三日マルシャル氏ト駐白佛國公使トノ對話書

Circular.

ter in Belgium.

Count de Montebello, French Minis-Conversation between Marshall and

Government? me the text of the French answer to the Montebello. Marshall. I am much obliged to you for sending Have you communicated it to the Belgian English

though they agree with us as to the principle, they follow us in proposing terminability to England. Belgian Government and that they are disposed to Japan (sic) treaties is regarded with sympathy by the Lambermont and left it with him. I was glad to of working it out will be selected afterwards take the great step of admiting the idea; the will not propose quite the same plan as we do. I think from what Baron Lambermont said, that, learn from him that our idea of terminability for what Japan wants, first of all, is to get Europe to That, however, is a matter of small importance; Yes, I took it this morning to Baron

of that subject. surprised to see that the answer makes no mention control over foreigners in Japan. ability of examining the question of administrative Circular should include a reference to the desire-Paris that the answer of France to the English Marshall.It was agreed at the Foreign Office in I was, therefore,

Note sent to London. It will interest you. about it. better write to the Commercial Director in Paris I suppose it must have been forgotten. You had omitted in the official letter. which has been transmitted to me) and that it is the French chargé d'Affaires in London (a copy of tion is set forth in the confidential Note sent to for French agents alone. for it is an absolutely private document intended course no one must know that you have heard it, Montebello. And I will read to you the Confidential That is true. I noticed that the ques-I do not know why. Qf

various phases through which those negotiations Count Montebello then read that note. history of the revision negotiations, states the It gives

substance. support of the claim of Japan, we incline to the sent permanent treaty with Japan might create as entertain as to the manner in which Japan might England; secondly, the doubt which we ourselves ticular weight; first the strong objection made by thereto are manifest, and three of them have parof Japan for a terminable treaty. Circular, the possibility of consenting to the desire sider carefully, before munications just referred to, we were led to conforth the programme privately communicated by non-official negotiations contained in the English Circular, mentions the have successively passed, alludes to the proposals opinion that, under all the circumstances, the obwhich were non-officially brought before ing these objections, after hearing the arguments the difficulties which an abandonment of our preregards our relations with China. But, after weighfreedom if it were conceded to her; thirdly, It then says, not in exact words, In consequence of the private comwith Marshall, and replying to the English The objections but in

erate and conciliatory attitude will be appreciated she desires in the future. We hope that this modin the present and would ensure to her the liberty more or less, by other Government. Consequently, to bring about an arrangement which would satisby the English Government and that it may serve but which would offer to Japan a moral satisfaction would entail no difficulties of immediate application, involve no precipitate action in the matter and we have decided to suggest a solution which would as those views, may not improbably, be shared, the views of the English Government, especially, propose any plan in complete contradiction with permanent engagement. And, yet, we hesitate to treaty shall be maintained as jection do not suffice to justify us in insisting, as all parties. Government does, that the present an unchangeable

Count Montebello then said, I think this is wise language and I hope that our assistance will help you to a conclusion.

I report to Paris that my first impression as to

the dispositions of the Belgian Government is that they are will inclined towards the principle of our proposal and that I hope they will support it, or, at all events, something like it.

二九八 明治十六年八月二日 伊藤参議宛

歐洲事情報告ノ件(二)

附屬書 十六年八月二日附蜂須賀公使來信附屬マルン

Сору

Berne, 2 August 1883.

Dear. Mr. Ito.

I enclose the translation of the Belgian Note in answer to the English Circular (marked F).

Your Excellency will see by it that our affairs have got on rapidly since I wrote to you on 19 July. They have, indeed, progressed so fast and so far that it has become possible to imagine that the replies of the Powers to the claims made by Japan at the Conference may be decided and the plan of

revision prepared by the end of this year.

she may be much vexed by them. He will do all (who, as you know, is a friend of mine) begging on her part, he asked me to write to Mr. Plunkett to diminish the possibility of a precipitate refusal by France, receive the proposals of termination put forward fore sent a letter to Mr. Plunkett in that sense dopting hastily a negative decision. him to try to prevent the Foreign Office from auncertain as to the manner in which England may testifies). sees, however, a with wonderful kindness, Baron Lambermont (who is acting towards me can to lead her to accept them, but, in order Germany and Belgium, and fears that as doubtful point. He is the enclosed I have there-Note

It is considered by the European diplomatists whom I have been able to consult that the proposals now made by France, Germany and Belgium go so much beyond anything that looked possible a few months ago, that Japan ought to accept them instantly with joy. And I see clearly that claims of new concession would do harm to the interests of

do not mean that Japan should not ask for modias rapidly as possible to a signature. Of course I directly they reach Tokio, and to carry the revision portunity which now offers, to accept the proposals duty to entreat Your Excellency to seize the opeducation. For these reasons I am sure it is my the realities of her situation and that, consequent-Japan, because such claims would suggested, privately, while there is still time be asked for at once, in Europe, non-officially, before that, if she wishes for modifications, they should fications of those proposals; but I am convinced ly, she has made but little progress in political fresh evidence of what has been so often said to points on which (if any) modifications should be ly form an opinion on them and to determine the ing proposals and is able, therefore, to immediateconfidentially with the probable nature of the com-Japan. Your government has been made acquainted, deferred until their answers have been delivered in the Powers have come to a decision, and not be me by Europeans, that Japan fails to comprehend be regarded

Europe, so far as they are yet known. tained by your Government on the proposals of instructions to your agents as to the views enterindispensable to transmit immediate tentiary may be sent at once. Failing that, it is Europe and I still indulge the hope that a plenipo-Director of the Negotiations is not now present in get them considered here. I much regret that a telegraphic

only would then remain for settlement in Japan. present possibilities and you will know exactly in what form the revision can be made. (if any) we shall have reached the maximum of course, to obtain the modifications you may desire When the effort has been made, confidentially of The details

is adopted as it stands an early date would be nability shall depend on Japan herself. If the plan that Japan shall be ready fixed for that realisation, on the two conditions terminability rest is that the realisation of termiand that Europe shall be the judge as to whether Japan is ready. The principle on which the present proposals of This means, particularly, that the when that date arr ves

> state of application, in the opinion of European Government, that Japanese jurisdiction can be acthat the new Codes shall be in such a satisfactory whole country shall be open, just as Europe is, and cepted everywhere with confidence.

part of the work. It is the function of the Legations to execute that must be prepared and formed here so that it may which will have to be performed in Europe; opinion say thereon. But there is an essential part of it done in Japan, and, of course, I have nothing to cordially admit termination when the far the greater share of this work must be time comes.

service and without a chief to hold the Legations of action which they will place at their disposal to determine the nature and extent of the means will confide this difficult and important task, this, to carefully select the agents to whom they without an All I will permit myself to say about it is that together and to see, on the spot, that they all It is for the Japanese Government to recognize organized and competent diplomatic

consideration of persons. subordinates perfectly determined to make every-one of his dowed with the capacity of winning friends, acquainted with Europe and European ways, tions should be placed under one able master, well will become more urgent than ever that the Legarealisation of terminability at the have confidence in Japan, so as to facilitate the after the revision is signed, in leading Europe to all the Legations will be called upon to discharge, no general or satisfactory results can be looked other and contribute equally to the common end, communicate cordially and unreservedly with each With the new and most delicate duties which do his duty, without the slightest date fixed, it and en-

approves it. suka: he I have communicated this letter to Mr. Hachiasks me to say to you that he entirely

and I beg you to believe me dear Mr. Ito,

My wife and daughter send their kindest regards

your very faithful servant,

Frederick Marshall

persuaded the Foreign Office that a violent revoluasked for permanence of the treaties, and why she in strict confidence. The reason why England has most interesting news, which I have just obtained Japan free from the treaties with such a state at the Foreign Office that it is impossible to set tion in Japan. tion will follow the proclamation of the Constitu-France, Germany and Belgium, is that Parkes has may refuse to accept the terminability proposed by things impending. I reopen my letter, at the last moment, to add Consequently, it is said and believed

添附書類トシテノ Belgian Note ナルモノ 見ヘス、 次號文書ハ略ホ之ヲ明ニスルモノナリト認メラル

附屬書

十六年八月二日附在白蜂須賀公使來信附屬マルシャル報告

Brussels, 21 July 1883

The Belgian Note

Marshall again asked Baron Lambermont to allow

him to have a copy of the Belgian Note in answer to the English Circular.

and German Notes. ed as a confidential communication, like the English Japanese agents, saying that it ought to be regard-Marshall the German Minister had particularly begexpressing much regret, as he was obliged to leave following week. delivered in London, which it would not be till the Marshall with the terms of the Note before it was would be altogether contrary to usage to acquaint Furthermore he remarked that, in any event, it under such circumstances, let Marshall see the Note position and that he did not know how he could, this request for secrecy placed him in an awkward ged him not to communicate the Belgian Note to hope that he would be able to see the Note before for Switzerland in four days and had indulged the purpose from Berne at any date which Baron Lamhe started. bermont might fix. The latter would not hear of Baron Lambermont replied that, since he last saw He then proposed to come back on To this Marshall answered by Baron Lambermont said that

this, said that it was unnecessary to take so much trouble about it, that Marshall must leave him to consider the matter, that it was extremely delicate, but that he would see what he could do ultimately and would write to Marshall.

Finally, however, after a quarter of an hour more of conversation and hesitation, Baron Lambermont said, most kindly, that, after all, as Marshall was going away, he would give him the Note at once. But he attached three conditions to the communication; the first, that no stranger should know that it had been made; the second, that no Japanese agent (excepting Mr. Hachisuka) should be told anything about it for a week, so as to give time for the delivery of the Note in London; the third, that the words should be sufficiently altered in Marshall's copy to enable Baron Lambermont to say to the German Minister that he had not given the text to Marshall.

Baron Lambermont then dictated to Marshall the following analysis of the Note, he and Marshall reading the Note together as they went on. The

changes introduced in the words are of no importance; the sense remains absolutely exact.

The Note begins by setting forth the proposal made by Japan in the Tokio Conference, at the sitting of 17 July 1882, to the effect that a separate Convention should be made for the revision of Commercial affairs.

It then says that Belgium is disposed to agree to this proposal and to make a separate Commercial Convention, reserving for future discussion the question of jurisdiction and other non-commercial matters.

It adopts, in a general manner, the project of tariff proposed at the Conference, subject to the conversion, by the sub-commission, of ad valorem duties into specific duties, as arranged at the Conference.

It alludes to the promise of the Japanese Delegates (See observation No. 1) at the Conference that the increased products of the new customs duties shall be employed to improve the monetary situation in Japan.

It states that, in addition to the Commercial Regulations which have been referred by the Conference to the sub-commission, it would be desirable to settle, simultaneously, the questions which have been discussed at the Conference, such as Light Dues, Drawbacks, Bonded Warehouses, Wrecks, and other analogous matters of less importance. Such subjects as artistic and literary property, trade marks, industrial patterns, patents, etc. might be dealt with either in the same convention or by separate arrangements.

It claims that the relations between foreign traders and Japanese producers and consumers must not be submitted to any restrictions contrary to the spirit of the treaties; this matter might be settled either by the Convention or by official correspondence.

It observed that improvements should be introduced into the system of passports.

It announces that Belgium would not refuse to take part in a negotiation as to the rights of police over foreigners which might be granted to Japan,

under certain guarantees (See Observation No. 2), and in exchange for larger liberties to be granted to toreigners in other matters (See Observation No. 3).

It points out that the favoured nations clause in the Belgian Treaty with Japan (Article 19) is absolute and without conditions. It proposes to maintain this clause unchanged so far as tariff, port and navigation dues and commercial regulations are concerned, and also to maintain it as regards favours of other natures; but it suggests the admission (See Observation No. 4), as regards the latter, of a disposition analogous to that contained in the convention of 31 March 1880 between China and Germany.

Finally, the Note takes up the question of duration. It says that Belgium has always considered the question of duration of the treaties in correlation with the opening of the country and with a satisfactory state of things as regards justice and administration towards foreigners. Belgium recognises that considerable progress has been already effected;

she believes the declaration made at the Conference that reforms will be continued; and the Note remarks that it is certainly the interest of both Japan and the Powers that Japan should persevere in the road she is following.

(The words which come next are translated textually).

"In order to encourage Japan therein, a date would be fixed (say 8 or 10 years hence) at which she would reacquire the position of other States as regards treaty engagements, on condition that she shall have settled, at that time, the opening of the entire country in a manner which shall be approved by the other Governments." (See Observation No. 5).

The conclusions of the Note are that a Commercial Convention, including accessory questions, shall be signed as soon as possible, and that negotiations shall continue with Japan in order to examine all the arrangements which may conduce to a satisfactory opening of the country.

After concluding this analysis of the Note, Baron

Lambermont was good enough to read to Marshall, confidentially, three other documents;

- 1. The official letter sent, with the Note, to the Belgian Minister in London.
- 2. The confidential Note of explanations sent with that letter.
- 3. Baron Lambermont's own private letter on the subject to the Belgian Minister in London.

The sense of these documents is the same, generally, as that of the Note itself.

Copies of the Belgian Note will be at once specially communicated, by the Belgian Ministers, to the Governments of Rome and Madrid, in the hope of leading them to quicker action and to more goodwill than they have hitherto shown.

ルモノヲ略ホ明白ニセルモノナリト認メラルス、尚本文書ハ前號文書冒頭ノ Belgian Note ナ 単類質公使來信ノ本信ニ當ルモノ綏込薄册中見當ラ

Observations.

No. 1. Baron Lambermont mentioned that the German Note asks for guarantees that the promise

made at the Conference that the increased products of the new Customs duties shall be employed to improve the monetary situation, shall be carried into execution.

- No. 2. Baron Lambermont stated, particularly, that he did not know whether the question of police rights could be dealt with in the Commercial Convention, or whether it would be included in the category of points reserved for future consideration. Explanation thereon will be exchanged with Berlin and London.
- No. 3. Marshall asked Baron Lambermont what he meant by "larger liberties" for foreigners. Baron Lambermont answered that he did not yet exactly know what form the Belgian Government might give to their claim of "larger liberties" to be granted by Japan in exchange for certain police rights over foreigners. His object at present is only to indicate that there must be reciprocity, in some shape. He supposed, however, that the "larger liberties" to be claimed by Belgium would take the form of facilities for travelling in the interior.

No. 4. Baron Lambermont mentioned that it would be useful if the Japanese Government were to inform European Governments, officially, of its views as regards the meaning and the application of the favoured nations clause, and insisted on the impossibility of ever admitting that any differential duty could be enacted in Japan in favour or any Power.

No. 5. Baron Lambermont stated that by "a manner which shall be approved by the other Governments", he meant what is said on page 9, that, at the moment of terminability, there shall be, in the opinion of foreign Governments, "a satisfactory state of things as regards justice and administration towards foreigners". If, at the date fixed, foreign Governments should not consider that state of things to be "satisfactory", the termination of the treaties would be delayed until they did consider it to be "satisfactory".

二九九 明治去氏月十五日 (仲藤参議)宛

英政府有期條約反對事情報告ノ件

Strictly Confidential Note

Berne, 15 August 1883.

When the Japanese Government announced the intention to establish a Constitution in 1890 Sir H. Parkes wrote immediately to the English Foreigners in Tokio and of several important Japanese functionaries, a revolution will, in all probability, break out at the moment of applying that Constitution. He went on to say that this probability of internal troubles created a new and peremptory reason for declining to admit any idea of terminability for the treaties, because it would, evidently, be impossible to set Japan free and to submit foreigners to her control just at the time when she may be expected to be in a state of grave political disturbance.

As Sir J. Pauncefote had been completely gained over and turned against Japan by Sir H. Parkes, during the recent stay of the latter in England, this statement was believed and this argument was

adopted at the Foreign office. It was mainly in consequence of this that England stated to the Powers, in the Circular of April, that she "has no intention of modifying the permanent character of the treaties with Japan".

Sir J. Pauncefote, in his conversations with certain foreign representatives in London has taken a tone of such marked hostility to Japan and has spoken so unfavourably of the Japanese that some of those representatives have specially reported his untriendly words to their Governments.

This explains why so much doubt has been expressed of late in Paris and Brussels as to whether England can be brought to accept terminability at all, even if all the Continental Powers agree to it.

The enmity of Sir H. Parkes towards Japan and the entire control which he has acquired over Sir J. Pauncefote are at the bottom of this situation, and the departure of Sir H. Parkes for China is not likely to produce any immediate change in the conduct of the Foreign Office. He has, unfortunatly, established views there which may last for some

time

Furthermore, as it is known that, when the Chinese Mission come to Tokio with reference to Liou Kiou, Sir H. Parkes did his utmost to privately influence the Chinese against Japan, it is reasonable to fear that he will continue the same efforts at Pekin. In the present state of the relations between China and Japan it will be wise to regard with deep mistrust the policy which he may follow at Pekin.

註 伊藤参議宛ノ報告ト思ハル

三〇〇 明治十六年八月十日 吉田外務柳代理宛

新任佛國公使ト會談ノ件

馁 第四拾九號

ス可ク裁判權ノ問題ハ面倒ナル事ニテ實況ヲ看察スル上ナ所言ノ大要ハ貿易條約ハ兩國ノ利益ノ爲メ妥協ノ點ニ歸着改正一件少々問試候得共漠然タル談話ノミニ有之候同氏ノ一昨八日新任公使「シアンキヴイク」氏ヲ訪問イタシ條約

ラテハ自己ノ意見モ申陳難致云々ニ有之候

右ハ同氏埃及多日在職セシヲ以テ立合裁判說ヲ主張スル 中我發案トー般通例ノ立合裁判トノ大與ヲ辯明イタシ置候 巳ノ想像ニ止ル)其他話次立合裁判(turidiction mixte) 事イタシ居候右ハ未發ニハ無之哉ト被想像候(是ハ三郎一 英政府廻文ニ關スル當政府回答ノ始末問試候處汎然タル ノ様ニ見受候故致話及候次第ニ有之候 事ニ及候間右へ我外務卿ノ拒却スル事タルヲ話シ會議錄 カ

同氏ハ今明日中米國通リニテ致出發候

右甲進候也

明治十六年八月十日

駐佛臨 時代理公使 光 妙 寺 \equiv

外務卿代理外務大輔吉田清成殿

Ē 明治去悉月十三日 井蜂 上須 外賀 務駐 卵 宛 使

佛政府ノ對英回答ニ關スル件

十六年九月三日附蜂須賀公使宛往電

附屬書一 十六年八月三十日附蜂須賀公使宛往電

次便詳細可中述奉存候

參考可相成存候ニ付不取敢公便呈進致シ候他ハ次ノ英郵便 白政府ノ模様ノミナラズ瑞西政府ノ模様其他白政府ノ簽議 白國外務大輔ランベルモン氏ト談話書是又差出申候右書中 爲相認差出候間宜事情御汲祭ニ預リ度奉存候且マルシヤル へ回答ノ一義ニ付我ヨリ修正ヲ請求スルハ甚難事ナル理由 顧問格マルシャルへ中付即今佛政府ニ對シ同政府ガ英政府 相譲り差急草々如此御座候也 對シ各國ヨリ意見ヲ附シ回答致候次第委曲分明ニ有之御

十六年九月十三日

茂 韶 敬 白

外 務 卿 殿

飪 1 二九六文書

附屬書

一號 (佛政府ノ對英回答ニ關スル件) 十六年八月三十日附蜂須賀公使宛往電

Japanese Minister

Petersburg

instruction to To Hachisuka. French Copy of French Foreign Minister's Chargé in London received,

十六年九月十二日發蜂須賀公使來電

四三 十六年九月八日白國外務大輔トマルシア ル

五 十六年九月六日附マルシアル報告書氏トノ對話書

十一月一日到

拜啓條約改正ニ關シ佛政府ヨリ英政府へ送致候回答ノ義ニ 昨日發電致置候 付別紙電信寫改第一號二號ノ通御示令有之改第三號寫ノ通

葛藤ニ關シ我ヨリ佛政府ニ向フテハ陰ニ清國ノ屬邦主義ヲ 委曲敬承御訓令厚ク遵奉可致候 排斥シ佛國ノ論旨ヲ賛成スルノ意ヲ含ミ程好ク談話可致旨 機密第十九號七月十四日附 ノ貴信不月八日接到佛淸兩國ノ

同機密信ヲ以テ條約改正ニ係ル

木兩公使ト會合各其意見ヲ交通致シ大幸ノ至リニ御座候尚 有之一昨十一日井二昨十二日當ブリユクセル府ニ於テ森青 知候右改正事件ハ前述改第一號電信ヲ以テ御訓令ノ次第モ 閣下ト森青木兩公使トノ機密往復信ヲ添 へ御示令ノ趣致承

便開陳可致筈ニ有之候得共發信日ニ差迫リ難得其義候ニ付 右會合談話ノ要件丼ニ條約有期主義ニ係ル御訓令ノ條々今

今後益協同盡力可致候

and Aoki will go to Paris. Marshall use all effort to secure these ends. statement in the new treaty itself. Then again, no at all satisfactory. This is the most important point. Termination although couched with different words together make earnest effort with Italy.(以下省略) mention of administrative regulations is made. ten or even While I do not care if the termination is fixed at in spirit and principle the same as English. 15 years, I cannot omit its express Consult with them and Mori Not Let

Inouye,

附屬書二

二號 十六年九月三日附蜂須賀公使宛往電

Japanese Minister

Petersburg

satisfied with gulations is unsatisfactory. present is the most important moment. Marshall with Lambermont and Montebello. of my telegram of 30 ult., To Hachisuka. Also the want of mention of administrative reonly Received copies of conversation of terminability morally given to use every Therefore in pursuance effort upon I am not The

Lambermont and proper French Authorities to effect these ends.

inouye.

附屬書三

三號 十六年九月十二日發蜂須賀公使來電

Gaimukio,

inclined to adopt Belgian plan. moral termination will not do, and he seemed rather Belgian Minister in Paris that French proposal of Minister for Foreign and this was done. tion to principle of permanence proposed by England have failed. we know if we had asked for that, the whole would ventured to ask France clear termination because many reasons not to ask France now to modify with my opinion not to press France In reply to your telegram about the French note, full explanations by post. was the principle of termination in opposi-All we could ask, as matters then Have learnt confidently French Affairs has informed the Mori, Aoki agree Marshall never

Hachisuka. 12 September, 1883

附屬書四

十六年九月八日白國外務大輔トマルシャル氏トノ對話書

Confidential

Brussels, 8 September, 1883.

Conversation between Baron Lambermont and Marshall.

Marshall. I wrote to you from Switzerland to say that I expected the French Government would follow Germany in the revision negotiations. But when Mr. Hachisuka saw the President of the Confederation, the latter made objections to the German plan, stated that its wording was not clear, said that he had asked for explanations from Berlin, and expressed the opinion that the Swiss Government would incline rather to the English view. Under these circumstances we should be very much obliged if you would instruct the Belgian Minister at Berne to join his efforts to those of the German representative, in order to press Switzerland to follow the guidance of Germany, as she has always

done hitherto.

ment considers that it is "impossible" to limit the the Swiss Government. that I told our Minister at Berne to confer with I am disposed to see what we can do to meet the objections made by Japan are very legitimate and common action upon it. question and I thought we might be able to adopt zerland are therefore especially concerned in the and Switzerland has none at all; Belgium and Swit-Belgium has only one Consul de carrière in Japan, possible, in practice, from trading Consuls to Consuggested of delegating those functions as much as seems not disinclined to adopt the idea which I carrière alone, but he adds that the Federal Council right of exercising judicial functions to Consuls de August. He says, you see that the Swiss Governwishes of Japan in the matter. the objections made by the Cabinet of Tokio to the at Berne to speak to the Federal Government about Lambermont. I have already asked our Minister of judicial power Here is his reply, dated 11 My feeling is that the ђу It was in this spirit trading Consuls.

suls de carrière of other nationalities so as to get over the difficulty.

In my instructions to our Minister at Berne I have touched, thus far, on no other point than this one, but I will now, immediately, send a fresh communication with reference to the revision as a whole. I will forward a copy of the Belgian Note and I will tell our agent to urge the Swiss to go with Germany and Belgium and not with England.

Marshall. Have you been informed that, in addition to commercial reasons, the motive of England in maintaining permanence is that she believes there will be a revolution in Japan when the promised Constitution is proclaimed in 1890, and that she will not consent to terminate the treaties with such a disturbance in prospect?

Lambermont. No, I have not heard that, but I am glad to be informed that such an impression exists because I can try to combat it surely the plans of terminability put forward by Germany and by ourselves would furnish ample guarantees in such a case, for their essential condition is to make

the realization of terminability dependent on the progress and condition of Japan. It is for Japan to earn the terminability which we are disposed to offer her, and she must earn it by political quiet as well as by general advance towards our ideas of civilization. I have already begun to draft the detailed text of a scheme of terminability for consideration by the Powers hereafter, and I will incorporate in it an allusion to the political state of the country so far as to remove, if possible, the fears which you say are felt in London.

Marshall. I hope you will be good enough to show me that draft when you have finished it.

Lambermont. Certainly. But it will not be ready yet, for I must wait to see how things turn. It appears to me that there are beginning to be signs that several Continental Governments view the Belgian plan with approbation, they seem to regard it as practical and as being clearer in language than the German Note, and I should not be surprised if, in the end, it were adopted as a basis. The French Government appears disposed to adhere

to it. I received, during the month of August, answers from those of our agents abroad through whom I communicated the Belgian Note to foreign Governments. Here are those answers; I will read them all to you, so that you may know exactly what our neighbours are thinking.

We will begin with France. Our Minister in Paris says, "M. Challemel Lacour has expressed to me the opinion that the purely moral plan of terminability contained in his answer to the English Note is not of an acceptable or realisable nature. He recognized that it is a formula of a kind, and that it is expressed in terms, which are not usual in international documents. He added that he fully appreciated the practical merit of the Belgian proposal, and, though he did not say that he would adopt it, he gave me to understand that he was favorably inclined towards it".

From Rome our representative writes that "no definitive resolution has been taken yet by the Italian Government as to the duration of the treaties. But in its answer to the English Circular the

Government inclines to what it calls a policy of conciliation".

Our representative at St. Petersburg tells me that Russia had not yet answered the English Note, but that "she will probably follow the German proposal".

From Madrid I learn that the Spanish Government began by accepting the English plan, but that, "recognizing afterwards the tendency of Europe to admit a conciliatory formula, Spain will now accept the point of view of the majority" (here Baron Lambermont observed, with a smile, "that makes one more, for we have already the majority)".

Our Minister at the Hague says, in general terms, that Holland accepts the views of Germany and Belgium.

From Stockholm I am informed that, "though the Swedish Government does not wish to take any formal engagement for the moment, it considers that the Belgian plan would form, hereafter, an excellent basis for negotiation".

From Vienna we have no news, but I suppose we

may expect that Austria will follow Germany

Consequently, you see what the Continent thinks and you ought to be very satisfied with the news. Of the ideas of England I know nothing, absolu-

Of the ideas of England I know nothing, absolutely nothing. Not one word has been said yet by the Foreign Office to the Belgian Minister in London. I can, therefore, give you no information. But the moment I learn anything I will tell you. The position of England is not quite easy. She opened her communication to Europe by declaring, with marked positiveness that she will not abandon the permanence of the treaties, and now she finds that she is almost alone in that view and that nearly every one else inclines to the opposite impression. I am curious to see how she will deal with the situation.

Marshall. Have you heard a report that the United States have intervened to bring about an arrangement between France and China?

Lambermont. There have been newspaper paragraphs to that effect, and it would be quite in accordance with the recent attitude of America if she tried to bring about a settlement of the dispute.

stepped in. would be wanted if the United States had already been gaining ground during the last two or three idea of a European mediation, in some shape, has tion, if it really existed. She would have been rewould have been delighted to announce her mediaapprobation of the action of France, that America China and has expressed so unmistakably her disterest already. Europe is watching with such keen intaken place it would certainly have become known days, and it is evident that no European mediation garded as a public benefactor. the march of affairs between France because, if such an intervention had really do not suppose there is any truth in the No, I do not believe the story. Furthermore, and the

附屬畫五

十六年九月六日附マルシャル報告書 Brussels, 6 September, 1883.

Memorandum on the position of the negotiations between Japan and France.

would hold to the present treaty as long as she during several years, in private conversations, the possibly could. the matter, she would take no initiative therein and end, act as other European Japan, and that though she would probably, in the Ministry of Foreign Affairs expressed, repeatedly, opinion that France had nothing to care about in an attitude treaties first When the of indifference came before Europe, France took up question of revising towards Japan. nations might act in the Japanese Her

France gave several reasons for this attitude. She said, in substance, that her position in Europe was delicate and difficult, that her whole thoughts were absorbed by that position, that her trade with Japan was small and her political interests there null, that she would only create difficulties with her European neighbours by assuming an active position in the Japanese revision, and that she wished to trouble herself as little as possible about that revision.

Still, in spite of all this carelessness about revi-

sion, France should (have) a latent spirit of fairness towards Japan, and, when pressed, exhibited faint sympathy and good will. For instance, in April 1880, she expressed, in writing (in answer to the five points submitted by Mr. Sameshima) a theoretical disposition to admit the idea of terminability and to grant a few other conditions of a relatively generous kind.

So things stood until the beginning of 1883. In March arrived a letter from Mr. Inouye instructing Marshall to try to induce France to recognise that China was going too far, both for France and for Japan, in the matter of suzerainty over the States adjacent to her. France declined to admit this view and preserved her habitual attitude of indifference to the objects and interests of Japan.

At the end of April she suddenly took up another tone. Marshall was informed that, in consequence of change of circumstances in Tonkin, France had, at last, recognised that she had some interests in common with Japan and was disposed to adopt some sort of undefined joint action with Japan towards

China.

In the meantime, however, the Japanese Government had altered its views and no longer desired to associate itself with France against China. Marshall, therefore, received with coldness the overtures of France and simply sought to let the matter drop discreetly.

But when, at the beginning of May, it was discovered that England had sent out a circular probetween China and France. about China, excepting as a separate subject and joint interests with Japan against China, but on the France to reject that proposal, not because of any as permanent, posing to the Powers to regard the Japanese treaties under which she would need, perhaps, the good will only with reference to the chances of war or peace merits of the case itself. Nothing more was said the new sentiment that circumstances might arise possible that France was somewhat influenced by cussed on its own bearings alone, but it is of course of Japan. Marshall attempted to persuade The revision was dis-

that both Germany and Belgium were connected with the question in itself; the second, brought about by other considerations than those picion that her action in the matter had been by other Governments, in consequence of the susthe motives of France in proclaiming the principle to the omissions of the French Note; the first, that other things which made him attach less importance gramme. ed to see that it did not correspond to the prointo his hands there on 10 July, he was disappoint-Brussels. that programme. Marshall left Paris on 23 June for Circular should be drawn up in conformity with Marshall's programme, and, after arranging with go further in the sense of terminability and revision France was already surpassed. than France had done and that the example set On 20 June the French Foreign Office accepted terminability were regarded with some mistrust But, about the same time, he learned two When the text of the French Note came that the French answer to the English disposed to bу

From that moment the action of France lost

much of its use, for the double reason that other Governments had declared themselves ready to do more than France had suggested, and that the example and influence of those other Governments were likely to be far more powerful in Europe than those of France, because, under the peculiar circumstances of the case, the opinion of France in the matter was evidently regarded as having but little moral weight.

Still it was manifest, in spite of all this, that the action of France, no matter what its hidden motives may be supposed to be, had largely served the cause of Japan. France had done two things which nobody had expected from her; she had suddenly abandoned her long existing attitude of indifference towards Japan, and she had taken the initiative in proclaiming that the Japanese treaties ought to be made terminable.

All the diplomatists consulted by Marshall expressed surprise at this change of tone and all of them made the observation that it was a great result to have led France to take the lead in giving

up the principle of permanence so strongly advocated by England.

As time passed on (during the months of July and August) it became more and more evident that, though every one was astonished that France had published the principle of terminability, no one attached any importance to the form in which she suggested that principle, first, because the other proposals which followed it were far more precise, secondly because every one recognised that the question of form could not be practically dealt with until all the Powers had accepted the principle.

These were the impressions which had been collected, in different directions, by Marshall, when, at the beginning of September, telegrams arrived from Tokio expressing dissatisfaction with the French Note and urging that efforts should be made to induce France to change the terms of that Note.

Now, even if France could be led to alter her language and to advocate a specific plan more in harmony with the wishes of Japan, it cannot be supposed that the adoption of such a plan by France

would really influence other European Governments. Its effect would probably be, in the present state of European opinion, to awaken a general suspicion that Japan had made some secret arrangement with France on the subject of China and that the new plan was an element of that arrangement, a price paid by France for services to be rendered to her by Japan. Such a suspicion would be damaging to Japan.

Japan. be contrary to diplomatic usage to alter the prourging Europe to grant definitive terminability to superficial good will in details, and that, consequenthope from Japan, in the matter of China, beyond different thing from changing her own note. she has no motive for doing so. France will, of ly, she would obtain no advantage for herself by cannot fail to be aware that she has nothing to Europe may adopt ultimately, but that is a very course, led to put forward any new plan at present, for But there is no probability that France could be It must also be borne in mind that it would accept the plan of terminability which

result would instantly set to work again if the quesposals of a Note while that Note is under consideration were reopened. diminished; the opposition which achieved was no longer present the sense was altered and production of the programme, but when Marshall distinctly understood that that Note should be a reists; it was its action, after Marshall had left Paris French Foreign Office as far as it has gone already; Furthermore, it tion by the Government to which it is addressed. the promised wording of the French Note; it was for Brussels, important functionaries. That opposition still exdiction to the previous policy of the Office and many times, during the negotiation, all hope seemed notwithstanding the resolute opposition of certain through private and personal influences, in contrahave disappeared; success was won, at last, which brought about the change in was difficult enough to lead the that

impolitic to ask more of France for the moment, and he repeats his reasons, as follows: Consequently, Marshall argues that it would be

- suade France to modify her proposal now. Because it would be hardly possible to per-
- sult through so many difficulties. a discussion which was carried to its present re-Because it would be dangerous to recommence
- which she had previously followed. of France in a direction absolutely contrary to that ing a principle, and in publicly engaging the action Japan, in Europe, and has done all that was really wanted from it, in setting an example in proclaimthough it be, had admirably served the purpose of Because the French proposal, insufficient
- reality, in consequence of their greater precision, the only ones which are under the consideration Because the German and Belgian plans are, in
- fends Japan the stronger will that suspicion become. cion in the matter, and because, the more she de-٠ Because France is already viewed with suspi-
- mately adopted by Europe for proposal to Japan, cannot be decided by France or by any other Power Because the form of terminability to be ulti-

between all the Powers. alone, but must be the outcome of an agreement

- separate action on any one Power, especially on tingency in view, it would be impolitic to press tinuing to refuse it, and because, with that contogether against England in the event of her the interest of Japan is to get all the Governments sion of England is still entirely uncertain, because who accepted the principle of terminability to join Powers are not yet known to us, because the deci-Because the answers of many Continental con-
- while it is under consideration—unless, indeed, some precedent and usage to change the terms of a Note very special motive existed for doing so. Finally, because it would be contrary 6
- it insufficient, and that it is not impossible he may Note which he sent to England, that he considers Minister for Foreign Affairs does not approve the learnt from Baron Lambermont that the French After the foregoing was written Marshall

to leave Belgium more convenient and more advantageous for Japan events, and for the reasons previously given wiser, accord and adopt the Belgian Note in its stead. that she will drop the Note altogether of her own so it becomes even more undesirable (if possible) adopt the Belgian plan instead of it. the matter ourselves. Belgian Note than to take any immediate action in And, in any case, it will be, for the present at all than it was already to press France to alter the It may be, to according to this information, urge France to adopt the This being

佛政府ノ對英回答修正方ノ件 **井上外務卿宛** 蜂須賀駐佛公使ョ

<u>=</u>

明治士会先月十九日

附屬書 十六年九月十五日發蜂須賀公使來電 (佛政府ノ對英回答修正方ノ件)

佛郵便ニハ執筆ノ暇無之爰ニ其大略申述候 拜啓過ル十一日森青木兩公使ト會合談話ノ結末過ル十三日 十一月七日到

過ル十日當ブリユクセルへ青木公使到着森公使ハ其前八日

生ノ心得迄ニ御訓令ヲ乞ヒ候事ニ御座候即今一日モ速ニ執行スベシトノ意見ハ今日日本政府ノ甘受即今一日モ速ニ執行スベシトノ意見ハ今日日本政府ノ甘受延引スル事而シテ税則其他通商ニ係ルコンヴエンションハヨンニ達セザルト各國ニ於テ見認ル時ハ止ヲ得ズ猶終期ヲョンニ達セザルト各國ニ於テ見認ル時ハ止ヲ得ズ猶終期ヲ

有期ニ候得ハ決シテ至難ニ無之歐洲大陸各國中多クハ同意 ŋ 獨政府ノ意嚮治外法權ヲ全廢スルノ意味歟或ハ一部分ヲ廢 拜見小官大ニ心得ト相成奉謝候右青木公使へノ貴機密信中 密信ニ御添付被下候貴君ヨリ森靑木兩公使ヘノ貴機密信寫 致候事卜存候二付次便猶又委曲可申述候七月十四日附貴機 相成ルベキ卽今ノ景況ニ有之候猶兩三日中ニハ御返電領受 ミへ期限ヲ附シ實施候樣致度」トノ御考慮ニ有之果シテ此 テモ或ハ之ヲ至難ト爲シ候哉ト過慮致候間先以通商條約 ゲ候ハ素ヨリ我政府ノ希望スル所ニ有之候得共各政府ニ於 座候七月十四日附ノ貴機密信中ニモ「佛國政府ノ意見ノ 未グ今日迄此御返電領受不致候得共日夜相待居申候事 一般條約ニ有期ヲ附スル事前述ノ如キコンヂション付キノ 一般ノ條約裁判税則ヲ併セテ有期ノケ條ヲ加 ルノ意味ナル敷トノ御不審ニ相見へ右ハ青木氏ヨリ へ改正ヲ遂 Ŧ = 如 ノ

右條々申進度他ハ後便ニ相讓候也ハ小生ニ於テモ慥ニ承知致シ居候事故一應此段申述遺候ハ小生ニ於テモ慥ニ承知致シ居候事故一應此段申述遺候ハ小生ニ於テモ慥ニ承知致シ居候事故一應此段申述遺候の小小生ニ於テモニ が

十六年九月十九日

蜂須賀茂韶

井上外務卿殿

內展

註 1附屬書參看

2 二九六文書

附屬書

(佛政府ノ對英回答修正方ノ件)十六年九月十五日發蜂須賀公使來電

Envoyé de Belgique le 15 Septembre 1883 par la Russie.

Gaimukio,

Please instruct me whether you are disposed to accept termination for the entire treaty on condition of opening the country and administering acceptable justice to foreigners as proposed by Germany and Belgium or whether you desire uncondi-

Mori, Aoki instructions you may give me I think also that the former plan would be more mation and shall carry out in exact accord with would give us commercial convention at once and favorable and morè former, because the majority of the Continental separately. conditional termination Governments are inclined to adopt the former planbut it may be more difficult to tions alone tional termination for tariff and Commercial ques-I ask this question for my personal inforif it can be obtained treating the The latter plan may fit your purpose, dignified for Japan, hereafter obtain than for the since in reply whole

||O|| 明治大学月三八日 幹須賀駐佛公使ョリ

Hachisuka.

條件附有期結約問題ニ關スル件

- (修約有效期間ニ關スル件) 附**恩都一** 十六年九月十九日蜂須賀森青木公使宛電信
- 1 十六年九月二十二日森蜂須賀雨公使發電
- 一 十六年九月十六日蜂須賀公使白國外務大輔

對話書

十一月十四日到

得共森青木小生三人へ當テタル 令ヲ乞候改正一條兩策ニ對シタル御返電ハ未ダ落手不致候 本月十九日附特別機密信ヲ以呈出致シ候已來小生ヨリ御訓

遵奉可致ハ申迄モ無之次第二御座候 結フノ本邦政府御意見ナル事ハ判然拜承飽迄モ其御趣意ヲ 趣キ以通商條約稅則共八年ノ期限ヲ以コンヂションニ拘ラ 候事ニ 罷越居早速打寄拜見致候事ニ御座候青木氏へハ即日寫相鈴 貴電信去ルニ十一日落手其節ハ當地近在スパーへ森氏同道 ズ確然終期ヲ見認メ法權其他ノ問題ニ關係ナク速ニ條約ヲ 御座候右貴電信中在日本獨逸公使ノ申出ニ御返答ノ

且又

正一條ニ付テハ過日森始三人會合以來別シテ何事モ打合セ 曲敬承森氏ニモ委曲承知ニテ去ル二十三日歸龍相成申候改 貴官ヨリ獨逸公使へ御返答ニ可相成三ケ條ノ御意見是又委 可中候然ル處過日森氏帶留中種々相談ノ上通商條約税則ハ 協力致候筈ニ相談致シ居ル事ニテ御訓令ニ遵ヒ追々相運ヒ 問題ニ拘ラズ確乎定期結約相成ハ申迄モ無之候得共法

> 問題ニ付コンヂション付ノ定期結約ヲナス各國ノ好意ヲ御 約ヲ本邦政府ニ於テハ御甘受可相成旨佛獨白等在日本公使 權ノ問題ハ獨白政府ノ發議ノ如クコンヂション付ノ定期結 宜御汲察御高慮有之度希望二不堪候 甘受相成候方事成就シ易ク可有之相考候事ニ 候其故ハ卽今歐洲大陸各國政府ノ意嚮此點則チ法權其他ノ へ御申入有之度段森小生連名ニテ意見ヲ電呈致候事ニ御座 御座候此趣意

御含ニテ御承知ノ程希望致候森公使へハ今日別紙進呈ノ 別紙進呈致候是ハ極機密ト申事同氏吳々被申居候事ニ付其 話書寫參考ノ爲メ相送リ申候 一昨廿六日當白國外務大輔ランベルモン氏ト小生ガ談話 談

右要件而已早々如此御座候也

十六年九月廿八日

韶

白

茂

外

1前揭〓〇二文書

2及3夫々附屬書一及二

附屬書

十六年九月十九日附蜂須賀森青木三公使宛往電

(條約ノ有效期限ニ關スル Mori and Aoki at Paris From Inouye to Hachisuka,

September 19, 1883.

same condition that if, during that period, you could be the termination of the commercial part? said, that revision must be had, but I am instructed at the denounce the prepared to open the whole country, then you may Minister: 8 years as proposed by protocol but upon will be discussed and settled hereafter. I: how is Government to do for said that, answered, commercial part. I thank German Government, but they would consent to separate settlement of the Bismarck to assure you of the intention of German following are the main points of conversation; he I had long interview with German Minister, the time the other part? he has received private instruction from I only know the principal points. He do you know to ask you privately what concessions whole treaty, if not another treaty you as much as they can, the England circular? German Minister: German that

> answer but would like to know what is the opinion you are ready to make? open ports. present system of foreign ships going between the privilege to foreigner. English circular. I replied, the geographical posiour government in endless complications. ly bring up the question of jurisdiction and involve directly with producers. merchants are enabled the extended system of passport by which foreign of German Government on this point? very serious to prelude He replied to settle it in accordance ment regarding the most favoured nation clause we could open two or three tion of Japan entirely China Treaty of 1881. what I think of coasting trade claimed by I asked the opinion of German Govern-He said, in his own opinion, to forbids us I said, that will immediatemy giving any immediate I replied, the question is ports and so extend the trade in the interior to grant this with He replied, German

I propose to answer:

tem, as it will necessarily involve jurisdiction ques-With reference to extention of passport sys-

claim for concession from commercial question. this way and settlement jurisdiction question is taken up in tion, it would be better to postpone its discussion ďn in this way (?)). (the settlement of jurisdiction question I wish to detach this

- in the protocol, that is, under the system of Japa-5 years in accordance with the principle contained more we will consent to concede coasting-trade for nese chartering foreign vessels. termination clause definitely even for 10 years or If they will consent to increase of tariff and
- proposed in the conference. tional clause and to maintain the form we have vague, propose to ask to make it a definite condi-German Minister says to fix it in accordance with As to the most favoured nation clause, although China Treaty of 1881, as I find it very

St. Petersburg. also this telegram in mind in carrying out the work Just received Hachisuka's telegram of Will answer it to morrow, but bear 17 from

1 〓○||附屬書

Gaimukio, 十六年九月二十二日森蜂須賀兩公使發電 Envoyé de Spa le 22 Septembre

immediately treaty with unconditional termination clause shall tion clause for the settlement of jurisdiction questo Japan, you will consent to conditional terminasympathy and friendly action of their governments French Ministers to Japan that highly appreciating Belgian Minister to Japan, we shall be very glad. questions. tion with clear understanding that new commercial We shall find much facility if you confidentially inform German and If you can communicate the same concluded independently for our action of all other

Mori, Hachisuka.

附屬書三

ノ覺書 九月廿六日小官ト白國外務大輔ランベルモン氏ト談話 十六年九月二十六日蜂須賀公使白國外務大輔對話書

小官曰ク

先日來 「スパ! 」へ差越居り昨夜當府 へ到着二付早速御幕

望近時猶御聞込ノ事御內話降サル、二於テハ幸甚ノ至ナ ランベルモン氏日ク 然詳細ノ内訓ヲ得サルナリ尙今後モ不相變閣下ノ厚意ヲ希 各政府ノ意嚮等日本政府へ内密ニ報告致置タレトモ未タ確 ル」氏へ内密厚意ノ御談話被成下シ事ヲ多謝ス改正ニ係ル ニ参リタリ先達テョリ條約改正ノ儀ニ付追々「マルシ 1)

二 七 改正一條既ニ「マルシヤル」氏迄内話シ置タル事柄ハ閣下 御熟知相成リシ事ト思考ス

(concession, transaction)元來讓與和好ヲ欲セサルハ東洋 fort 氏及ヒ タルヲ欣賀ス乍併英國政府ハ如何ナル方向ニ決スベキヤ未 爭ヲ爲シ (faisant la Compagne) 斷然和好ノ意嚮ニ導キ シ居リシト雖トモ狐炭シテ顯ハレザリシガ白政府ハ眞ノ戰 表スルニ至リシ是迄モ歐洲政府ノ日本ニ對スル厚意ハ存在 以テ各國ノ同意ヲ促カシ遂ニ歐洲過半白國ノ覺書ニ同意ヲ 白政府ノ覺書寫ヲ歐洲各政府ニ送リ且ツ内密ノ書翰ヲ送リ 抑改正一條ニ付テハ白政府ニ於テハ英政府ノ發議ニ對ス 久シク住居セシ政事家ノ常僻ナリ在英白國公使ハ小生ノ 知スル能ハス閣下モ御承知ニ候半英外務省ノ Parkes 氏等ハ躨與調和ニ同意スル ノ色ナシ Pauns-

> 送リタリ至極內密ノ書翰故其御心得ニテ御聽ヲ乞フト述 盡力スベキ旨ヲ内訓シ置キタル處此頃同公使ヨリ此手紙ヲ 在英白國公使ノ書翰ヲ讀マレシ其大意左ノ如シ 友人ニモ有之日本へ對シ英政府モ好意ヲ表スベキ様ニ勸告

中ハ迚モ英政府カ日本ニ好意嚮ヲ表シ讓與ヲ爲ス ベキ 望 様ナリ Parkes 氏ノ意見ニ全ク同ナル Paunsfort 氏擔任 (espoir) 非ラサリシ乍併相互譲與ノ語ハ(le mot de trankett 氏出發ノ時分ニ至リテ初メテ取調ヘニ着手ス ベキ模 國政府ノ發議案ヲ相互讓與ノ基本トスル事ニ Currie saction)改正事件擔任ノ Currie 氏ヲ驚カサヽルナリ白 藏メ未ダ研究ノ運ヒニ至ラス十一月ノ頃卽チ新公使 Plun-同意セシムルニハ全ク望無キニ非ス云々 日本條約改正ニ係ル英政府ノ書類ハ凡テ役所ノ引出中ニ 氏ヲ

而シテ又ランベルモン氏曰ク

英政府 萬々一相分リ候テハ甚タ困却ニ付惣テ貴政府ニ於テモ嚴ク 先達テョリマルシャル氏へ追々内話セシ事最モ機密ヲ要ス 内密ニ成サル ハ甚タ猜疑深キ故種々機密ノ談話拙者ョリ出テシ事 様閣下ヨリ御申遣降サレ 夕 シ

小官曰

サリ信シクルニ付決方洩泄致シ間舗ク段々ノ御懇切多謝スル所信シクルニ付決方洩泄致シ間舗ク段々ノ御懇切多謝スル所拙者丼ニマルシヤル氏へ御内話ノ件々ハ最モ秘密ノモノト

三〇四 明治十六年十月五日 非上外務卿宛

佛政府ノ對英回答ニ關スル「マルシヤル」氏ノ對話

書送付ノ件

附屬書 十六年十月三日マルシャル氏ト佛外務省通商

僾 第六拾四號

致候十二日附ヲ以テブリユツセル府ヨリ答電佛政府へ右回答修十二日附ヲ以テブリユツセル府ヨリ答電佛政府へ右回答修正ノ儀ハ即今請求難致旨及申陳置候然處右ハマルシヤル氏正ノ儀ハ即今請求難致旨及申陳置候然處右ハマルシヤル氏正ノ係の即今請求難致旨及申陳置候然處右ハマルシヤル氏正ノ解の方面を修正ノをでした。

右談話書英文及御送付候尚本件ニ付テハ通商局長ノ勸告モ

more completely fulfilled. fore, in a false position, and I must begin to-day good dispositions of France. to the Japanese Government to have overrated the were not fully realised and that he and I seemed and which he had at once pectations which I had expressed to Mr. Hachisuka not mentioned at all. me to hope for and administrative questions were reason to complain that your promises were not by pointing out to you that I have, personally, laid down with the clearness you programme; the principle of terminability was not ing that it weeks afterwards, I had the disappointment of seedid not realise the conditions of the The result was that the ex-We were placed, theretelegraphed to Tokio had authorised

Clavery. I am sorry you think you have had cause to be dissatisfied and I quite understand your view. But let me tell you that when we set ourselves to write, after you had left Paris, we found that it was not possible to adopt exactly, in our Note to England, the programme you had brought to us. As regards administrative questions we were

談話為致候心得ニ有之此段及開陳候也有之候ニ付修好局長ビョー氏ヘモ不日マルシャル氏ヲ以テ

明治十六年十月五日

駐佛特命全權公使 蜂 須 賀 茂 韶

外務卿井上馨殿

註 1三〇一附屬書三來電

附屬書

劉話書

Paris, 3 October 1883.

Conversation between Marshall and Mr. Clavery, Commercial Director at the French Ministry of Foreign Affairs.

Marshall. When we parted, at the end of June, it was agreed that the French answer to the English Circular should be based on the programme which I had presented to you and which, you imformed me, the French Government had accepted. But when the ext of your Note came into my hands, three

sent to London we were ignorant of the views of tell you that I, individually, took the same view as it insisted that they ought to be heard. I need not as the Commercial Department has the immediate programme than the Political Department was, and and June, was, throughout the negotiations with you in May are well aware that the Commercial Department irritating England, on the other. Furthermore, you satisfaction to Japan, on the one side, and to avoid seemed to be the best calculated to give reasonable gards terminability we adopted the language which cause we found we could not distinguish them, in obliged to leave them out, after consideration, bestrongly all the round me in my own office and I could not do the Political Department, but I had opposition all control of the Japanese revision, my colleagues in general terms, from judicial questions. And as rethat we were the first to move; when our Note was more, at the time, than I did. Again, remember Governments except England, against terminability, and we less favorably disposed towards your proceeded. who

lean rather to the Belgian Note, adopt either of them we should, for that reason, the Belgian Note is much clearer than the German cupied with other things and I have been away. our Note was despatched; I have been too much oc-But I have given little thought to the matter since disposed to do more when an opportunity offers. beyond those we employed, we may, perhaps, views and have expressed them in words which go Now that other Governments have adopted similar might be advocating alone, in opposition to England. naturally, with some hesitation in a direction which could examine that until we know the reply which France should be. way considered yet what the further action of Note, it has seemed to me that if we decided to have read the German and Blgian Notes, and, as have been communicated to her, and until we per-England may make to the different Notes which ceive distinctly the dispositions of England. know what the Japanese Government thinks of the then so new and in which we supposed we I do not see, indeed, how we but I have in no Do you be

different Notes?

ity shall be definitive at a fixed date. cial part the further condition that the terminabilproposal of separate terminability for the commertreaty together as seems to be done in the German instead of mixing of the terminability of the whole accept the separation which you have so made, Hachisuka to ask France to urge the other Powers to fore possible that instructions may be sent to Mr. Note, has separated the terminability into two parts, thus far, France is the only country which, and being rendered definitive at a fixed date. parts, the former being independent of the latter of the treaty and terminability of all the tween the terminability of the commercial parts ment will desire, probably, to maintain the division and Belgian Notes, and also, to add to your present according to the programme I gave you. It is therewhich was claimed at the Europe incline to the impression that the Governtions to arrive, but the represntatives of Japan in Marshall. Time has not sufficed to allow instruc-Tokio Conference be-As regards Now,

the rest of the proposals contained in the German and Belgian Notes I am unable to say anything, because I know nothing as to the opinions which may exist in Japan. What is your idea as to rendering the commercial terminability definitive.

Clavery. I cannot answer that without reflection, without talking to my colleagues, without consulting the Minister, and, probably, without hearing what the other Powers might think about it. All I can tell you now is that I quite understand that Japan should wish for the arrangement you speak of; but, whether we should be disposed to grant it or to refuse it I cannot at all say. And I must repeat that, even if we had an opinion, we could not take any further public action until England has made known her views.

Marshall. As the Continental Powers seem to be almost unanimous in adopting the principle of total ultimate terminability, I hope they will join together to press England to accept it too.

Clavery. I am surprised at the favorable dispositions manifested. The information in our hands when you went away in June in no way indicated

which was not likely to be generously, and our feeling, in sending our Note the probability that Japan would be treated so separate terminability for the commercial parts of up the subject again and will examine the idea of go too fast; we must wait for others. I will take cal Department to support you. Do not press us to you here, only you must continue to get the Politineed not tell you that we shall do all we can for glad that your prospects have become so good. However, all that is changed now, and I am very to London, was that we were setting an example the treaty. But what do you mean, exactly, by "the commercial parts of the treaty"? generally followed.

Marshall. I presume that they would include the tarriff and such commercial questions as were discussed and practically settled at the Tokio Conference.

Clavery. Nothing else?

Marshall. Nothing else, so far as I personally suppose. But remember that I am speaking privately, without instructions or authority, and that I merely express my own impressions. I will let you

know as soon as I can speak with more certainty.

三〇五 明治士至五月十一 日 井蜂 **开上外務卿宛** 肆須賀駐佛公使ョ

條件附有期結約問題ニ關スル件

附屬書一 青木森公使宛往電 十六年九月二十日附井上外務卿ョリ蜂須賀

- _ 十六年九月十七日後青木公使ョリ外務卿宛
- 府意向ニ關スル件) (最惠國條款及終期 約款ニツ 1 ・テノ 獨逸政
- Ξ 電信寫 十六年九月三十日後青木公使ョ リ外務卿 宛
- 四 宛內信 十六年九月三十日青木公使ョ リ蜂須賀公使
- 十六年十月十日蜂須賀公使ョ 十六年十月六日蜂須賀公使ョ リ淺野公使宛 リ青木公使宛

五

t 十六年十月三日附淺野公使ョ リ蜂須賀公使

拜啓偖ハ條約改正事件ニ付先月廿三日落手致候森青木小生

出置候右返翰ハ未ダ落手不致候得共一兩日ニハ必到來可致 明瞭免レ難ク候ニ付別紙丁號ノ通小生ヨリ青木氏へ書翰差 相待居申候何分本邦ノ爲メ各處區々ノ取扱相成候テハ不宜 政府不好意ノ如ク青木氏ョリ申候ハ事實ト相違致シ彼是不 呈シ候二度ノ電信寫送リ來別紙丙號同氏ヨリ小生へノ書翰 電信有之右ニ對シタル貴電信ニ候得ハ右青木電信寫差送候 三人へ當テタル貴電 相考如此取計候段宜御承知被下度候 マルシャル探知ノ實ト青木氏電信ノ趣ト齟齬ノ廉有之且佛 樣照會致候處先月三十日附ヲ以別紙甲乙號貴君へ同氏ョリ ケ條ニ付早速青木氏へ通知致シ同氏ョリ貴君へ既ニ差出候 共ニ落手致候然處銀テ貴君御手許へ差出置候獨政府囘章 信ノ義森丼ニ小生ニ於テ總テ承知不致

邦政府ノ御企望東京豫議會ノ節ヨリ今日ニ至リ決 候電信ニ對シ御電令日夜相待居申候 事ト拜察致候得共其他條約全體ニ關スル獨白政府ノ發議セ 偖又通商條約稅則ニ明確ノ終期ヲ付シ速ニ實行相成候樣 テ御甘受可相成哉或ハ後日ニ讓ルノ御決意ニ候哉先月十五 所小生ヨリ呈シ候電信幷同廿二日3 如キコンヂション付キノ終期ニ於テハ即今不邦政府ニ於 附森小生兩人ョ テ不相變 呈

差出置甲候淺野氏ヨリ到來ノ書翰ハ己號寫ノ通ニ御座候 右逐條御參考ニ供シ度早々如此御座候也 尤此談話書中ニモ佛政府ニ於テ英政府同樣我力希望ニ違反 スル意味相見へ候ニ付別紙戌號寫ノ通淺野氏へ紙面昨十 趣是ハ同氏丼ニ青木氏ョリ委曲可申進候ニ付爰ニ略致シ候 伊國二於テモ淺野氏同國外務卿ト改正事件二付談話有之候 Ħ

十六年十月十一日

茂

猶々去ル八日森公使英外務卿別業へ一泊相越改正事件 委曲ハ承知不致候得共通知ノ儘一應申進候 々其他談話有之候由未夕右談話書寫ハ廻シ來ラズ候ニ付 付通商條約稅則ニ明確ナル終期ヲ付スル事ヲ希望スル云 =

夏來在佛英大使口 **顚末相話置候旨申入候處プランケツト氏ノ中ニハ同氏當** 致候得共一應右口 **専問シ小生面會致候節何事モ龍動ニ於テ森氏ヨリ談話可** 偖日本駐劉英國新公使プランケツト氏昨十日當公使館 多用本邦條約ノ事ニ付テハ何ノ點 F I F ライヲン氏ノ留守中代理致シ居 グランヴイル森氏ト談話有之候 モ未ダ研究不致且

> 龍動 通り相越候由相話申候此段モ 同人一己ノ說ト ハ 同氏來年一月初旬リバプト へ來ル十三日出發相越英外務省ノ意嚮ヲ承リ候迄ハ テモ今日相話シ難キ旨返答有之候且本邦 御參考ノ為メ申進候也 ル發ノ郵船ニテ亞米利

1本號附屬書一參看

2三0二附屬書

3三〇三附屬書二

尚別紙甲乙丙丁戊己號ハ夫々本號附屬書二、 六 七ナリ $\vec{\Xi}$ 冏

附屬書一

公使宛往電 十六年九月二十日附井上外務卿ョ 蜂須賀、

From Inouye to Hachisuka, Aoki and Mori in Paris,

September 20,

subject to further agreement. of the favoured nation clause and concession in the propose for the present, besides tariff, new wording administrative powers, The principal part of Aoki's telegram read: also termination of tariff, they

If it is Is favoured nation clause absolutely conditional? like that of German China treaty of1881,

it is too vague. Is any concession in the administrative powers to be made at the same time with tariff, and to what extent? The favoured nation clause, concession of administrative powers, and termination of tariff; are they conditional with opening of country? If so, suppose we can not be ready to open country in time fixed, then is tariff to be revised or to be made same rate as in the existing treaty and does favoured nation clause still continue in its conditional character or revert to present conditional? Reply by telegraph.

竹屋墓

(最惠條馱及終期約綦ニツイテ獨逸政府意向ニ關スル件)甲號 十六年九月十七日附青木公使ヨリ井上外務卿宛電信寫

From Aoki to Inouye.

With reference to my despatch of 21 June and in conformity with your telegraphic message of 29 August, I send full particulars. German proposition to foreign Powers contemplates securing all possible concessions to us for the present and the possibility of obtaining the rest afterwards. They propose for the present besides tariff new wording of the

the present determination of England and France, an open question, or mere travelling for commercial pursuits is left subject to further agreement. ministrative powers, also the termination of tariff favoured nation clause and concessions in the adquence of a harmonious consultation at Brussels, I quite the of Germany, these conditions will meet eventually out doubt, with the further good-will and assistance of opening could only produce disadvantages to our any attempt at settling now the mode and principle employing well our time and opportunities, is not in any way prejudiced and all depends on our think proper and when we think proper. opening and enjoyment of all rights in the interior jurisdiction or whether the opening means entire entire or partial abolishment of extraterritorial of the country, whether the opening is under an conditions of opening in your own hands and, withpresent you may be assured that you will hold the interests, whilst by wishes of our government. We are free to propose what we leaving the question for the As to the opening In conse-Our_case

despatch Siebold to carry information and memorandum to Asano and to make use of Siebold's connections with the Ministry of Foreign Affairs there.

Regarding my visit to Vienna, I must add for your personal information only that in consequence of the illness of Wooyeno I seized favorable opportunity to ask Minister for Foreign Affairs that

Austrian influence be exercised in Paris and elsewhere in accordance with Germen propositions. He distinctly promised this. I might perhaps also exercise some influence on opinion.

September 17 1883.

附屬書三

乙號一十六年九月三十日附青木以使ョリ井上外務卿宛電信寫

To Inouye from Aoki.

Before German Government issued their cicular, I repeatedly recommended here to have fulfilled your desires all, especially on three points mentioned in your telegram of 19 September, and, although the first seems to meet your wish, the success of intermediation, as to the third especially the second,

sure that it refers not only to tariff but to all power and the new creasing tariff, the concession in administrative Germany recommends to others acceptance of inof the country under condition acceptable this right should be dependent upon the opening tion, conditional, tion of 1881, and to grant us the right of denunciafore, proposed to adopt the German Chinese Convenwas doubted without finding shifts. country. nation clause, not conditional with opening of fortnight, and also the new ference as Jappe would tell you adout it within and some Japan the recognition of this principle in generae treaties. German intention relative to terminability, according to the aforesaid modus vivendi. As to clause, above all the grant of right of denunciation wers. which you shall obtain in the occasion of next con-Respecting your last telegram, I repeat, They will kindly effectuate in favour of Besides, it is concession that is, the effective wording of favoured nation in very inopportune administrative wording of favoured powers, to Poto re-I am

seem to be even not easily acceptable to England and France. Your last resort to stick to existing treaties may be eventually good, but wait for the result of German endevour. I have a good hope in the coalition of Germany, Austria, Belgium and Italy, where Assano is now working under assistance of Siebold and Count Fe.

Berlin, the 30/9 1883

附屬書四

- 電信ヲ指スナリ)
 電信ヲ指スナリ)
 電信ヲ指スナリ)
- oursed nation clause 中二 recognition of the right 行政權ノ囘復及ビ New wording of the most fav-一一年非ズ併シ小生ノ不同意云々ヲ別ニ井上氏へ申遣ス 一一年本之候將又異存ノ廉ハ 日下「セツトル」スベキ箇條ハ通商條約就中稅則其他 日本非ズ併シ小生ノ不同意云々ヲ別ニ井上氏へ申遣ス

でいた。 でいたでは、 でいたが、 でいが、 でいたが、 でいが、 でいたが、 でいなが、 でいなが、 でいたが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でい

三難被行請求ニ相見へ申候 our proposal contained in protocol ニテ取付ケ別っま。不利ナル「コンデション」(即開國ノ規約等)ヲニ我ニ不利ナル「コンデション」(即開國ノ規約等)ヲニ難被行請求ニ相見へ申候

(以下不要ノ件ニ付略之)

十六年九月三十日

木

蜂須賀閣下

賀拜井上君閣下」ト朱書アリ 2「此青木氏ノ考慮ハ小生ニ於テ 至極尤ニ 考申候蜂須賀公使ノ朱書アリIIOII附屬書参照

門屬書五

> 不致候又開國ノ點ニ於テモ全國ヲ開ク歟或ハ國中ノ幾部分 信ト「マルシャル」探知ノ實ト相違ヲ相覺へ候 法律ノ改良ヲナシ其期限ニ至リ約束ノ通リ歐洲政府ニ 猶又延引スル事ト承知致シ此八年間不邦政府ニ於テハ 年ト定メ其期ニ至リ「コンヂション」未夕不充分ナル ノ期限モ終ルモノト獨政府發議セント承知致シ居是又貴電 スルニ相違無之此企國ヲ開キ治外法權ヲ解クト同時ニ條約 ヤル氏ノ探知スル處ニ於テハ獨政府ハ全國ヲ開ク事ヲ意味 ヲ開クカ今日ニテハ不定ノ如ク貴電信中相見得候處マルシ 候通決シテ別段ニ通商條約稅則ノ終期ヲ發議セシト へ差進候マルシャル氏獨政府同章ノ報告書中ニモ分明致居 モ終期ヲ承諾スルニ至ラシムル事ニ有之先達テ貴君御手許 承知スル處ハ條約惣體へ 「コンヂショ ン」付キノ終期 ・ハ承知 ア八

結約ノ主義ヲ發議シ日本へ好意相示シタルモノニ相違無之スル囘答寫中分明致居候通佛ハ英ノ無期條約ニ反對シ有期ニ於テ甚意外ニ考へ候先達テ御手許へ差出置候佛ノ英ニ對ニ於テ甚意外ニ考へ候先達テ御手許へ差出置候佛ノ英ニ對附貴電信寫中ニモ――印ヲ付置候通英ト佛トハ全ク同様日且又今一ケ條貴答ヲ煩候事ハ十七日附貴電信寫幷ニ三十日且又今一ケ條貴答ヲ煩候事ハ十七日附貴電信寫幷ニ三十日

ルシャル 府ノ 致承知候ニ付佛ノ囘答ハ本邦ノ企望ニ此點ニ於テハ符合ス政府東京豫議會ノ節ヨリ今日ニ到ル迄終始變セザル企望ト 話ヲ承知致候テモ好意ハ十分相見得居申候此談話書ハ兩三 ヤル氏ヲ當外務省通商局長ニ面話爲致候處此通商局長ノ談 哉モ難計候得共毫モ不厚意ノ點ハ無之此度歸巴ノ上マル 様相聞へ實ニ意外ノ次第佛ニ於テハ前顯申入ル如ク 獨政府ニ同意ノ上ハ右兩國ニ勸告有之度段伊政府 政府へ獨政府發議ノ如ク好意相示シ候様斡旋有之度段御 相見得其爲メ貴君墺國 政府東京豫議會ノ節ョリ今日ニ 日中淨寫ノ上送進可致候加之佛政府 候)然ルニ貴君丼ニ 通墺伊兩政府ニ於テ獨政府ノ發議ニ同意シ佛政府へ斡旋有 年限ヲ今日定ムル モ ノ終期ト他條約惣體ノ終期ト二段ニ區別シ有之是ハ日 シト 如キ好意ニ比較スレバ或ハ厚薄アリ佛ハ獨白ヨリ薄 成 |候事ニ相見へ且一昨日伊國滯留シイボル ヘノ 相考へ(勿論佛政府 紙面ニ依レバ英佛共ニ抗議スル モ佛英共ニ抗議シ歡心相顯サズ 「シイボルト ト ハ 不甲是ハ小生モ甚不充分ニ考居論佛政府ハ終期ノ主義而巳ヲ掲が明カ 一へ御苦勞相成墺政府ヨリ 」ヨリ既ニ御勸告相 ノ發議ニハ通商條約税 故 伊國ニ於テ ト氏ョリ ハ別シテ佛 パー中入候 獨白政 成候 本 シ キ 7 申

於テ別 囘章ノ 電信差出シ猶又森氏連名ニテ廿二日附電信相送候事ニ有之 日 N 國政府ニ同意セシメ英政府終ニ孤立シ難ク滿足ノ結果ヲ得 先日會合ノ節御話合致候通リ獨白政府ノ發議ヲシテ歐洲各 御返答相伺候得ハ小生ニ於テ安心可致候元來小生ニ於テハ 議シ而シテ他條約全體ノ終期モ亦發議セシニ相違ナシトノ 苦慮致候尤此小生ノ考ハ「マルシヤル」 探知ノ實ヲ獨 小生任國政府ノ好意ヲ不好意ノ如ク貴君ヨリ伺候ニ付一身 セラレ而シテ獨白政府ノ發議スル條約全體 (此二信ニ對シ外務卿ヨリ未タ返答無之候)小生ニ於テハ 哉トモ 終期ノ事ハ他日ニ譲り今日「アクセプト」セ ニ於テ通商條約稅則而已ヲ明カニ年限ヲ立 事コソ萬々希望致候得共如何ニセン日本政府ノ決意ハ今 ハ間違ナリ慥ニ獨政府ニ於テハ通商條約稅則ノ終期 - 同意セシムルヲ望ムニ相當リ或ハ後日混雑ヲ可生哉 主 - 御聞込ノ義有之此點ニ於テハマルシヤル探知セシ ノ意ヲ留 祭セラレ是等ノ推祭ヨリ小生先月十五日外務卿へ 意ニ相違無之ト信シ候ヨリ起ルモノニシテ貴君 ハ日本二於テ希望スル如 田メ獨政府 ノ發議スル區別 ク終期ヲ二段ニ區別 ナキ條約全體 コン ルノ考慮ト ザル ヂシ 心算ナ ョン付 グラ發 政府 プ終 ス ==

候事ヲ相恐候ニ付忌諱ヲ不憚如此申進候 之候テハ萬々不宜此爲ヌ事矛盾ヲ生シ且他日混雜ヲ惹起 シキ事ニ有之候得共本邦政府ノ爲メ御五ノ間 邦政府ノ意ニ適合スル様遵奉盡力シ好結果ヲ得ルコソ願 甲斐ナシトテ不滿ヲ唱ルニモ決テ無之何處カラニテモ マシ 上不足ヲ中入候義 1 ル 1 | ラ以テ御勸告相成候事ニ付小生ニ於テ働 ニテハ毛頭無之又墺伊政府等へ貴君丼 三合點違ヒ有 我本 シ 25 キニ

十六年十月六日

須賀

青木公使宛

註 1及2前掲附屬書二及三下線ノ部分參看

附屬書六

戊號 十六年十月十日附蜂須賀公使ョリ淺野公使宛內信

井上外務卿時代 對佛交涉 三〇五

御同慶此事ニ御座候全ク御苦勞御盡力ニョリ同政府ニ於テモ好意相示候段爲國全ク御苦勞御盡力ニョリ同政府ニ於テモ好意相示候段爲國一條ニ付伊國外務卿へ御談話書添へ御申越被下辱ク奉存候不月三日附ノ貴書辱拜讀先月廿七日ニ那拿爾へ御出張改正

猶返翰御落手次第御示可被下旨忝奉待候

シ後日ノ ス 府ノ如ク日本へ好意ヲ示候様勸告有之度御申入相 意相示サベル テハ決テ不宜相考候間 入候譯ニハ決テ無之候得共本邦ノ爲メ御互間區 政府ニ對シ佛ハ不好意ノ 意ニ有之今日ニ於テ佛ニ於テ不好意ノ點 相見へ此義ハ小生ニ於テ甚意外ニ相考候元來先達 偖御談話書中佛政府ニ於テモ英政府同樣我望意ニ違反 == ルーモ此 ル無期結約 及候佛政府ガ英政府へノ囘答書中ニモ有之候通 承知 可 、混雑発レ マシイ 點ニ付兩三日前 如キ御考慮ヨリ伊政府ニ於 ニ反對シ有期結約ノ主義ヲ發議セシ ボ サル事 1 此邊ハ篤ト御注意被下度 申入置有之且當館顧問格 三御座候小生一身上二取 如ク御申入有之候テハ事矛盾ヲ生 氏迄委曲申 入置候事 パテ 佛政府 無之候然ルヲ 奉存 20 以リ不滿申 英ノ發議 デ御 成候事ニ 座 コマル ___ ハ \sim 取扱候 モ 候宜敷 候 アノ厚 送致 シシ好 他 青 Ī シ

九八六

要件貴答迄如此御座候也鑑當方ヨリモ追々改正事件ニ付テハ御打合可致先ハ至急右

明治十六年十月十日

韶

没野公使宛

附屬書士

リモ御談判ノ御模様御垂示被下度糞入候也 サモ御談判ノ御模様御垂示被下度糞入候也 サモ御談判ノ御模様御垂示被下度糞入候也 サモ御談判ノ御模様御垂示被下度糞入候也 中年御談判ノ御模様御垂示被下度糞入候也 十六年十月三日附淺野公使ョリ蜂須賀公使宛内信 以 テハ全ク獨乙政府ノ所見ニ同意シ頗ル吾カ政府ノ為メ好意 テハ全ク獨乙政府ノ所見ニ同意シ頗ル吾カ政府ノ為メ好意 アハ全ク獨乙政府ノ所見ニ同意シ頗ル吾カ政府ノ為メ好意 アル全ク獨乙政府ノ所見ニ同意シ頗ル吾カ政府ノ為メ好意 大声 中入置候間返翰到來次第尚又可供御内覽下存候間同以テ中入置候間返翰到來次第尚又可供御內覽下存候買官ョ以テ中入置候間返翰到來次第尚又可供御內覽下存候買官ョ以テ中入置候間返翰到來次第尚又可供御內覽下存候買官ョ以テ中入置候間返翰到來次第尚又可供御內覽下存候買官ョ以テ中入置候間返翰到來次第尚又可供和同學下存候買官ョリモ御談判ノ御模様御垂示被下度糞入候也

十月三日

野

淺

御含被下度爰ニ申上候候程ニハ無之候得共各持論ハ異リ中候ニ付貴君ノ御心裡ニ候程ニハ無之候得共各持論ハ異リ中候ニ付貴君ノ御心裡ニ事ニ御座候然ル處森青木小生三人ニ於テ協力ノ妨ケト相成

現一 森公使ノ説ハ左ノ通

處隨 極無禮 英國政府ニ於テハ最初ヨリ カ ニ過ス且歐洲各國ニ於テハ日本カ各國ニ滿足ヲ與ルコンヂ 好意ヲ示スカ如クシテ其實條約重修ヲシテ益難 ション付キノ終期ノ如キハ英ニ於テ決シテ同意スヘカラサ イト」ヲ刪ルモノナリ然リト雖モ今日日本政府ノ希望スル ヨンニ至ラハ現行條約終期ノ權ヲ日本ニ與フヘシト ルニ至ラシム ノミナラス之ヲ幸ナルロ實トシテ通商條約ノ締結ヲモ之 キノ意嚮ニ有之此度獨自政府ノ發議スル條約全體コン 本ニ全權ヲ取 共二引キ延ハシ終ニ卽今條約中一ノ重修モ爲シ得ヘカ 明 テ スル 森氏自身ニ於テ卽今最要點ト考フル處ハ通商條約稅 プロ上ナリ之ヲ日本ニ於テ承諾スル時ハ日本ノ カニ終期ヲ付シ此貿易事項ノミハ他ノ論題ニ關 所卜 ナ ル事ニ有之此事 ヘク元來獨政府發議ノ如キ表ハ日本ニ對シ ル 様我輩三人各處ニ在テ盡力セ 何事 = コソ英ヲ始メ歐洲各國政府 歟托 シ條約重修ヲ延引 **州カラシム** ス ン セス フラ ハ至 ハ N ラ ヂ ス

青木公使ノ説ハ左ノ通

蜂須賀公使閣下

卿往復書翰ハ劉伊交渉三九九及四〇〇、四〇一参照註 1及2シーボルト、マチニー談話書幷淺野公使伊外務

三〇六 明治士至十月十六日 非上外務卿宛

條件附有期結約問題ニ關スル件

共即今ノ現況重複ヲ不顧爰ニ申上候内啓偖ハ條約改正事件ニ付是迄每便申上候次第モ有之候得

本公使へ貴君ヨリ御申入相成度意見電呈致シ候事ニ御座候 乞ヒ置其後森氏スパー表ニ滯留中同二十二日附兩人連名電 處其後今日ニ至リ既ニーケ月ヲ閱候得共何タル貴電令モ相 信ヲ呈シ前顯第一段ノ結約速ニ可相整都合ニ候得ハ第二段 終期ヲ付シ候事本邦政府ニ於テ御承諾可相成哉ノ御電令ヲ 或ハ條約全部ニ獨白政府 受不致必當節ハ内閣ニ於テ右邊反覆御評議中ト ノコンヂション付キノ終期モ御承諾可相成段佛獨白等在日 ナル終期ヲ付シ締結相成候事本邦政府ノ御希望ニ可 過ル九月十五日附 |小生ヨリ電信ヲ呈シ通商條約稅則ニ ノ發議ノ如クコンデショ 拜察致居候 ン 付キノ 有之哉 明確

限リ 森氏モ漸ク同意ト相成九月廿二日附森小生連名ノ電信ヲ呈 面會右意見陳述相成候由森氏談話書八本月十二日附森氏 シテ承諾スルモ然ルヘシト 入ル心底ナレ シ候事ニ御座候而シテ本月八日森氏ロード、 ヘカ 廻シ來リ候次第委曲御承知ノ筈ニ付爱ニ 機密信ヲ以貴君へ報告相成候由ニテ小生へモ右寫同氏 發スル他條約全體ノ終期モ亦本邦政府ニ於テ其好意ヲ謝 ハ本邦政府新通商條約ノ締結ニ同意スヘカラスト迄申 ラサル 事ニテ英ニ對シテハ此明確ノ終期ヲ付セサ ハ此點ニ於テ各國承諾スルニ於テハ獨白政府 小生マルシャルモ敷回談論ノ上 贅言不致候 グランビルニ 3 3

テ獨政府 國ヘハ青木氏自身出張同外務卿 シ 故日本ニ於テハ何處迄モ之ヲ承諾不相成テハ交際上ニ關係 今二於テ日本二許與スヘキケ條ハ餘サス漏サ 嚮ヲ特シ居ル事ニテ此度歐洲各國へ差出シタ 獨政府ニ於テハ元來日本ニ對シ他ニ比較スヘカラサル 如何ナル大事ヲ惹起ス哉モ難計依テ飽迄モ歐洲各國ヲシ = ノ發議 同意ヲ表スル様勸告ノ義ヲ倚賴シ ニ同意セシムルノ外無之トノ意ニテ隨テ墺 二面會英特 叉貴君 == 佛政 ル回章ニハ即 ス掲載有之事 府 3 へ獨墺 IJ 御電 好意

手不致候尤青木氏ト小生トハ最モ一致盡力ノ目途有之青木 生ヨリ青木氏へ一書(此書翰寫モ本月十一日附佛便ニ貴君 知何分青木氏即今ノ意見不明瞭ニ有之其爲メ本月六日 有之森氏ノ説トハ全ク反對ノ如ク 第本月十一日附貴君へ小生ョ 上 シ 1 へ寫差進置候)差送り有之返答夙夜相待申居候得共今ニ へ靑木氏ヨリノ書翰ニハ森氏ノ說ニ同意ノ段中越候哉ニ承有之森氏ノ説トハ全ク反對ノ如ク相見へ候然ルニ此節森氏 ノ上ハ英佛等ニ同意セシムル樣勸告ノ事ヲ倚賴セシメ候次 テ伊外務卿ニ面會ノ節モ亦獨政府ノ狡議ヲ伊國ニ於テ同 IJ 趣モ有之ニ付森小生ト共ニブリユク モ小生ニ對シ至極懇親ノ意ヲ表サレ申候 ト氏ヲ伊國羅馬ニ派シ同氏淺野公使ノ譯官 リノ呈書中ニ詳悉致居候通 セル府ニテ談決 附小 F -意

顯ノ如ク本月六日送翰已來 期立約ハ無クトモ速ニ新通商條約ヲ締結シ一日モ早ク我内 獨ノミナラス佛白墺伊等往々同意ニ傾クノ今日ナレハ日本 テ當然ニ可有之而シテコンヂション付キ條約全部 共表面ハ何處迄モ獨政府ノ好意ヲ謝スルコソ我政府ニ取ツ **未夕何等ノ返答無之次第ニ御座候** 國財政ノ困難ヲ救ヒ候事今日ノ得策ト小生ハ相考申候森氏 ケ得レハ重疊ノ事若シ彌各國ノ承諾ヲ得難ク見認ル時ハ定 <u>---</u>, ハ 商條約締結ニ同意スル能ハス」トハ餘リ激烈ニ過キタル哉 英外務卿へ申入タル 論題ニ關セス通商條約稅則ニ定期立約ノ明文ヲ揭クル一條 條約締結ノ機會ヲ失ヒ可申哉ト深ク相恐レ申候故ニ森氏 於テ承諾相成而シテ新通商條約ニハ定期立約ノ明文ヲ揭 決テ無理ナラサル感觸ニテ或ハ其實ニ近キ哉モ難計候得 - 相考申候小生ノ考ニテモ森氏カ獨政府ノ發議ニ付テノ說 最難事ニテ英ヲ始メ各國共迚モ承諾致ス間敷隨テ新通 ハ此節屢書翰ヲ往復シ五ニ事情ヲ通シ申候青木氏ヘハ ノ基可相立考居候事ニ御座候小生一己ノ説ヲ申サ 「定期結約ノ明文ナクンハ我政府新通 一兩度他用ニテ書翰相送候得 ア終期 ハ カ

右ハ即今ノ現況御參考ノ爲メ内々入貴聽候也

十六年十月十六日夜認

茂韶新

外務卿閣下

○ 国書五○ 五月十五日蝌蜂須賀公使ョリ青木公使宛書翰ハ前號附名十月六日附蜂須賀公使ョリ青木公使宛書翰ハ前號附名十月六日附蜂須賀公使機密信ハ二四四文書○ 五月二十二日森蜂須賀州公使後電信三〇二附屬書○ 五月二十二日本蜂須賀公使後電信三〇二附屬書

三〇七 明治大学十月十六日 蜂須賀駐佛公使ョリ

佛國政府ヨリ覺書取付ケ方ノ件

候尤同政府ヲシテ變意セシメサル爲メニハ今日殊更ニ當方 之候事故今日迄モ遵奉取扱居ル事ニテ猶重々服膺從事可致 ヲ我好具トスヘキ云々既ニ巳ニ御電令ニモ其意ヲ御中越有 御紙上佛政府カ 月廿四日附ノ御内翰落掌難有拜讀候事ニ 過ル十二日發佛便ヲ以呈書致シ侯節一言申上置候通同 之哉旣ニ モランダムイ如キヲ領收致度申入候事ハ却テ如何可 一廿四日 東京事件ヨリシテ條約事件ニ色氣ヲ顯 ノ貴書御認メ後御受取相成候佛外務卿ヨ 御座候 シ族 朝八 有 1)

先般公然トナク佛外務省へ通知致シ候三ケ條ノ趣旨ニ付 委曲拜察致シ候然ルニ佛代理公使小生ヨリ 書ヲ以通知致シ有之候而シテ佛政府ハ之ヲ承諾シ同政府 題ト分離スルノミニ無之之ニ終期ヲ付スル事マルシヤ 在日本佛代理公使トノ御談話書モ篤ト拜見貴意ノ有 ク御亮知被下 テ他條約全體ノ終期ヲモ發議シ二段ニ區別シ有之候事ハ疾 リ英へノ回答中ニモ貿易事項ノ終期ヲ先ツ第一ニ揭ケ而シ ノ誤解有之様相考候何カト申ニ第一條ハ貿易事項ヲ他ノ論 候筈且事過候義ナカラー應申上候 マルシヤル N 所 ヲ以 ル覺 3

(以下省略)

十六年十月十六日

茂 韶 拜

閣下

務

猶々新田氏華族ニ被列候事深奉賀候東京一件ハ今日ニテ

決スルモ難計形勢ニ御座候也ハ佛淸雙方共内國ノ弱ミヲ考ヘ居候哉ノ模様和戰孰レニ

當府海底電線會議今日初會有之マルシャル出張致候也

三〇八 明治士至十月十六日 蜂須賀駐佛公使ヨコ

佛外務卿談話書及マルシャル氏報告送附ノ件

- || 一十六年十月二十日附我條約改正ニ對スル歐
- 政務局長談話書 ローナ六年十月二十日附マルシャル氏佛外務省

ノ日ニ方リ我改正事件ニ波及スヘキ影響、丙號ハ獨白政府日ニ付小官外務省へ出頭談話ノ要領別紙甲號臺冊差進候石マルシヤル氏報告書乙丙丁號三冊モ御參考ノ爲メ差進候右マルシヤル氏報告書乙丙丁號三冊モ御參考ノ爲メ差進候右を納改正一條此頃御電報ノ趣モ有之本月十日佛外務卿接待機密信 第七拾二號 十二月十一日到

談話書ニ有之候ルシャル」氏ト 佛外務省政務局長 Billot 氏ト 改正一條ノルシャル」氏ト 佛外務省政務局長 Billot 氏ト 改正一條ノヨリ英政府へ回答ノ條約改正事件ニ係ル見解、丁號ハ「マ

此旨甲進候也

明治十六年十月廿六日

在佛特命全權公使 蜂 須 賀 茂 刻

外務卿井上馨殿

附屬書

甲號 十六年十月十日佛外務卿蜂須賀公使談話書

務卿シャルメルラクール氏トノ談話左ノ如シ十月十日佛外務卿接待日ニ付キ外務省へ出頭小官ト外

小官日

我政府ノ主張スル有期結約ノ主義ヲ佛政府ヨリ回答中ニ發ヲ擧レハ第一ニ英政府カ發議シタル無期立約ノ意總ニ反シヲ爲シタルニ付去七月佛政府ヨリ共回答差出サレ我國ノ爲ヲ係シタルニ付去七月佛政府ヨリ共回答差出サレ我國ノ爲ヲ解意ヲ示サレタル事ヲ傳聞セシ事是レナリ而シテ其要點メ好意ヲ示サレタル事ヲ傳聞セシ事是レナリ而シテ其要點スタニテ拜話ノ榮ヲ得ル爲メ出頭致シタリ借今日閣下ニ謝の大会教育を表している。

陳述ハ去ル七月佛政府ヨリ英政府へ回答中ニ前段述ルカ如ヲ承諾セラレン事閣下ノ高配ヲ仰ク處ナリ而シテ此ノ余ノ 述スルニハ無之ト雖トモ此終期ノ問題ハ我政府ノ此際希望 因スルモノナリ スル要點ト信スルカ故佛政府ニ於テ歐洲各國ト 事ナリ今日余カ閣下ニ陳述スルハ我政府ノ訓令ヲ受ケテ陳 爲メ多謝スル 既ニ通商事項ト ラ改締 セラレ 商條約ニ約束ヲ附セサル的確ナル終期ノ條項ヲ揭 回答中二此 セント欲スル我政府東京會議ニ於テ シ事第二 ニ 約束ヲ附セサル的確ナル終期ノ條項ヲ揭クル處ナリ然ルニ余此際猶閣下ノ好意ヲ希望スル 他 ノ事項トノ區別ヲ揭ケラレシ ノ區別ヲ維持掲載セラレ 通商事項ト其他ノ事項ト シ事我政府 ・ヲ區別 ノ發議ヲ旨 共二此 好意ニ 2 希望 テ 1

小官日

佛外務卿曰

望スル所 警へハ歐人ノ日本内地旅行ヲ容易クスル 日本政府二快キ事日本政府ノ希望ニ應諾 ŧ commerce」等ノ如シ改正ニ係ル歐洲諸國ノ意嚮ハ 住居スル事「Etabliss ement dans I/ interieur pour テ 御承知ナラン然ルニ今閣下ノ陳述セラ ナリ乍併佛國政府モ亦日本ニ向テ希望スル事ア 事通商ノ爲メニ スル事 i *>*> 、余モ亦希 ` 如 閣下 ク通 内 ŋ

> 諾シ得へキ == 、最モ厚意ヲ現シ居ル政府ト 事項 完全ノ自由ヲ與フヘシト ノケ條ヲ掲載ス ヲ法權問題ョリ 7 否 到 デ ハス余 可キ日本政府ノ請求ハ恰モ日本政府引離スノミナラス條約全部ニ明確ナ ノ請求ナル故各國ノ中日 ハ之ヲ保シ 雖トモ日本政府 請求ヲ承 4 政府 本二

述セヨトノ命令ヲ受ケテ開談セシニ非ル事 閣下ハ余ノ説明足ラサ 望セシニハ非ルナリ 閣下ニ談話セシナリ條約 ル確乎タル終期ヲ附セント希望スル義ハ余ノ確信スル 事項ト其他ノ事項トニニ分シテ通商事項ニハ約束ヲ附 モ日本政府ハ東京會議中ニ發議セシ如ク條約ノ事 サレタシ抑改正ニ係ル各國ノ意嚮ハ余モ セサルヤヲ恐ル旣ニ閣下 ŋ - ニ述シ シ故余 全部二 明 如 1 強ナル グク今日 陳述ニ付キ或 終期ヲ付っ 知ラサル 此問題ヲ閣下ニ ハ能 八未夕了 ク御承知降 件 == ス ラ通 N ヲ希 所 セ ν 故 ・ザ 商

條約全部 ナル終期ヲ附スル上ハ其發議ヲモ研究シテ成丈ケ承諾セン 由ナレト 希望ナ モ日本政府ハ前段ノ如 ニ約束ヲ附シ ラ ント信ス佛政府 タル終期 ハ諸國ニ先チ有期主義ヲ發議 ク通商事項ヲ區別 ノ發議ヲ爲 セシ政府 シ テ Ŧ 的 有之 確

厚意ヲ得ン事ヲ希望スシ日不ニ厚意ヲ示サレシ故今陳述スル點ニ於テモ尙閣下

佛外務卿

神ヲ以テ此問題ヲ研究ス可シ 終ノ精神ヲ以テ條約改正ヲ研究スルニ於テハ余モ亦同一ノ精貴政府ニ於テ相互調和護與 airangement et conciliation

門屬書二

乙號 十六年十月二十日附歐洲ノ形勢ト我條約改正ニ關スルマル

Memorandum

as to the effect which a war in Europe would exercise on the revision of the treaties with Japan.

Paris, 20 October, 1883

Thirteen European countries have treaties with Japan. The interests and objects of those thirteen countries are substantially identical towards Japan; there may be differences on points of detail, one country, for instance, may desire lower customs

everywhere the same. interests, their its main outlines, the same everywhere because their springs of inter-continental action between the East results, but, viewed as a whole, their attitude is, in carrying out these ideas and of attaining these to be animated by the same guiding ideas and to duties than another on certain articles of exportation less liberal, more or less pursue and the West, the thirteen countries may be said concerns the dominant motives and the essential factures; but, politically and generally, in all that to Japan, according to the nature of its manu-They are more or less generous, more or the same results opinions and their prejudices are in their relations with just in their manner of

The consequence is that they have always regarded the revision of the treaties with Japan as a question which concerns them collectively, as an element of the dealings of Europe with Asia, as a matter which affects Europe in its aggregate capacity as much as it affects the particular interests of each of the countries which compose Europe.

The thirteen countries have therefore made common cause with each other about the revision and it is understood between them that the revision is to be effected by agreement between them all, as a matter relating equally to them all. And, however much Japan may disapprove and deplore this common action of Europe towards her, it must be expected that it will be maintained until the present treaties are entirely terminated. There may be (there are, indeed, already) divergences of disposition and of tendency, but those divergences will not suffice to dissolve the unity of action of Europe.

All this, however, refers to the action of Europe during a state of peace. What would be the effect produced on the revision by a war in Europe?

To this question it may be answered, with certainty, that a war between European Powers would stop the revision altogether, for the two reasons that the belligerants would cease to give thought to it and that the neutrals would invoke the suspension of European unity and the impossibility of isolated arrangements as motives for doing

nothing.

Japan should, therefore, regard the revision as an act which is realisable only at a time of general peace, and would do well to take note of the circumstances which might place peace in peril and, consequently, endanger the revision.

produced war, it may be hoped that things will go so many risks of war exist without having hitherto probability of preserving peace is, indeed, arguments at present employed in favor of war are, at this moment, unusually numerous, and prudence wear out, and, today may become sufficient tomorrow, that patience that a provocation which is considered insufficient of complications. But still it must be remembered Powers would be dragged into it by the multiplicity as every one believes that, if war once began, all the and will make great efforts to avoid it, especially and it is also true that all Europe shrinks from war on as they are. wide-spread, and grave; one of It is generally felt in Europe that possible causes There is some truth in this view, above all, that new the principal that as of the

events, new accidents may occur and that unforeseen passions may burst out.

pulous ambition of Italy comes fifth; it very nearly come forth. which are attributed to Austria and Germany, and between Russia Germany may be placed second. The latent ill-will foreign enterprises and disorderly home action of during the last two or three years, tion which has been aroused throughout Europe, the general impression of distrust and disapprobasuccession to the Crown of Holland, and the possible years ago. provoked a rupture between her and France two which would be opposed by Russia and England, The projects of suppression of European Turkey effects of an arrangement thereon with Germany, have been strained of late. The doubts about the contingencies in Europe must be added the accidents must not be forgotten. First amongst the possible causes of war stands The permanent enmity between France and The relations between France and Spain The excitable and somewhat unscruand Germany may be put third. And to all these by the rash

which so frequently happen outside Europe, like the recent difficulties in Madagascar, the influence on Europe of a war between France and China, and the slow but steady advance of Russia towards British India.

No one of these matters can be said to present, at this moment, a character of immediate danger; but, with such a variety of possible risks in the air, it is natural that Europe should be uneasy and that confidence in the maintenance of peace should not be absolute and unhesitating.

It would be well for Japan to take these considerations into account and to ask herself what would become of her revision if, unhappily, a European war did break out before the revision is concluded. In determining the altitude (sic) to be adopted when the collective proposals of Europe are laid before Japan, this grave element of the situation should be duly weighed. It might be prudent not to lose time; present opportunities might disappear, and, if they did disappear, when would they come again?

附屬書

ニ付マルシャル報告書 内號 十六年十月二十日附我條約改正ニ對スル歐洲外交界ノ意見

Memorandum

on the present situation of the revision, as European diplomatic opinion seems to view it.

Paris, 20 October 1883.

The *principle* of terminability appears to be admitted by a large majority of the European Powers. There is, therefore, no exaggeration in supposing that the resistance of the minority will be overcome, sooner or later, and that all Europe will finally agree to offer total terminability to Japan, on conditions and in a form to be determined.

Now, according to the information recently collected from a variety of diplomatic sources, it is beyond doubt that Europe will regard this act (supposing it to be realised) as a remarkable and surprising one on her part. For the first time in

history she will declare her willingness to liberate an Asiatic nation from its signature and to leave it free to fix its own relations with the world; for the first time in history she will abandon the policy she has unceasingly followed towards non-christian nations for three centuries and a half (since the original Capitulations were made with Turkey) and will assist an Asiatic Government to undo the knots which treaties have tied around it. Japan, the last to sign such treaties, is to be the first to get rid of them; it is for her—for her alone—that this exception is to be made.

It is, evidently, the general opinion of European diplomatists that this new and striking situation, so full of present significance and of future consequences, will give to Japan a place apart in history, because it will render her relations with the world altogether special to herself.

The view of Europe (supposing it to be generally adopted) would be that Japan is to acquire entire treaty liberty on the single condition that she shall use it towards foreigners as European nations use

mine to you." Treaty liberty for Japan depends, cause you do not open your territory to me as I open there is no international equality between us, present treaties; but so long as you do not do that accept; the moment you do that I will tear up the your territory and give me a jurisdiction I can from Japan. She says to Japan, "Do as I do; open present proposals, Europe asks neither more nor less and accept each other's jurisdiction, and, by the European nations open their territories to each other proposed show to each other. And that is precisely what is application of the treatmert which European nations she claims than by an exact imperial rights and the international equality which that in no way can she more completely attain the Japan cannot desire more than this, for the reason therefore, in the opinion of Europe, on Japan herself. it towards each other. It is supposed in Europe that in proposing to her to act as Europe herself acts in Europe thinks that she is asking nothing of Japan the two matters of judicial organisation and of free by the German and assimilation and Belgian Notes. be-

circulation throughout the country; her impression is that such a proposal is honourable to Japan.

In answer to all this the opinion of Japan would appear to be that the proposed action of Europe is insufficient, because the commercial part of the treaties is not made definitely terminable, and, perhaps also, because conditions are attached to the offer of terminability for the rest of the Treaty.

if this great change concerned no one but Japan herself it could not, by possibility, extend beyond policy of Europe needs some preparation. Europe recently, she would probably go on to say that even according to the dispositions she that so profound a change in the entire traditional the Japanese elements, that the matter is full of aspects of the matter merit as much attention as fact that in Japan the purely Japanese elements of difficulties and of grave importance for Europe, and while its European aspects receive less consideration. the subject are those which are most thought of, This objection results, of course, from the natural considers, however, that the European has manifested

the Continent and would alienate the sympathies terminability on commercial questions, dinarily advantageous for Japan. the more disastrous because of the awakened towards Japan. The effect would be all which have refusal would upset all that has been achieved on because Europe was unwilling to give unconditional shows that if Japan were to decline to revise at all pride of Japan could possibly be conceived than the abandonment by the West, toward her alone, of the Europe, that on higher satisfaction for the national to her. the total treaty liberty which Europe now proposes that her present proposals are It would certainly be thought and said, by been so slowly and so laboriously conviction of extraorsuch

It should be repeated that the question is a general whole affecting all Europe together; it cannot, by its nature, depend on the will any single Power; great as is the influence of Germany and of England with respect to it, even they are not masters of it; the issue does not lie in Berlin, in Paris, in London, or anywhere in particular, but in

the accord of all the Governments together. When that accord has been rendered as favorable as possible to Japan, when the *best* has been reached, Europe will certainly be surprised if her proposal are rejected by Japan.

附屬書四

丁號 十六年十月二十日マルシャル氏佛外務省政務局長談語書

Conversation between Marshall and Mr. Billot, Political Director in the French Ministry of Foreign Affairs.

Marshall. The communication made by France to England in July with reference to the revision of the Japanese treaties has been very useful to Japan, for it put forward, for the first time, the principle of terminability; but it was vague and incomplete and it did not supply a plan of arrangement. It was followed by proposals of a more precise nature from other Governments, but those proposals suggested the terminability of the treaties as a whole, without

portions should be made terminable separately. Mr. recommended that the cordance with the request I had made to you in May, distinction of parts, while the French Note in acmy visit today is to put the matter before you and rest, but, furthermore, that it shall be, in itself, the commercial parts shall be separated from the It is to be expected, also, that the Japanese Governthe commercial and judicial parts of the treaties. tain the distinction between the terminabilities of that the Japanese Government will desire to mainyet on the subject, but he has reason to suppose Hachisuka has received no definite instructions as advised me to see you upon it, and the object of on this point with the Commercial Director; he distinct and unconditional. I have a conversation ment will wish, not only that the terminability of to ask for your support in it. commercial and judicial

(Marshall then gave detailed explanations).

Billot. As the subject is new to me I can only make a personal and private answer; before I can say anything positive I must talk to the Commercial

will renew them at all; what certainty have we acceptance of Europe, she would have no chance of Ministry, but my individual view, at present, is that when I speak officially, after discussion request. Of course I may have to say the contrary given me, privately, I have no hesitation in telling you, have Director and to the Minister; but, personally and country again and to have no more to do with us?" that she will not profit by her liberty to close the ments towards us, what guarantee have we that she if we set Japan free from her commercial engagemade everywhere. Every one will ask, "Well, but answer to the objection which will manifestly be success unless she put forward simultaneously an proposes it to Europe and recommends it to the Powers and that if France accepts such a plan and ever, that we must act in accord with the other we ought to be able to consent. that I am fully disposed to admit your Remember, in

Marshall. Surely you do not say that seriously? The very fact that France and other Powers have proposed terminability is proof that you all recog-

nise the reality of the progress of Japan, that you believe it will continue, and that you have confidence in the use which Japan would make of the freedom she claims. All the commercial treaties of Europe have a definite duration; they come to an end, new arrangements are discussed, according to the circumstances, and new treaties are made in the place of the old ones. That is what Japan wants and no one can pretend that she would misuse such a right.

Billot. I cannot admit the parallel you draw between the commercial treatics of Europe and those of Japan; the two cases are totally different. In Europe we are all neighbours, in intimate relation with each other and in close dependance on each other; we need each other's trade, it is the essence of our international life; commerce has become the basis, the bond and the object of our connection with each other, and when a commercial treaty between any of us comes to an end we are forced, by public opinion and by public necessities, to renew it, somehow. But Japan stands towards us in no

support of the definite terminability of your comyou that whatever France may decide also to assist and promote their commerce with the that it has become one of the great levers of our an international trade so enormous and so profitable particular experience, they are the consequence of as we do; our opinion in them are the fruit of make Europe believe that Japan feels these questions such situation as that; nothing you can say will ideas or the same motives as we have, and I warn the conditions are different; Japan has not the same rest of the world. need of treaties in order not only to regulate, but Japanese, nationally, feel, as we feel it, the obligatory them, but you will never persuade me that the There may be in Japan some few persons understand admit that she and too unpractised in such questions, for us to she is too undeveloped, politically she is too young views; geographically she is to far off, commercially has neither our wants, nor our habits, nor our Japan, however, has no such motives, can regard them as Europe does. Consequently, as I said just now, to say in

mercial treaties, Europe will refuse that terminability unless she can feel certain that you will not quash the treaties altogether. I in no way refer to modifications of the treaties; it would be perfectly natural that you should alter them as you desired, if you were free to do so; I would even admit that you might impose protective duties on certain articles, if you thought fit; but what I cannot admit, and what no one would admit, is that you should be left at liberty to suppress the treaties.

Marshall. I assure you that you are supposing an impossibility. Japan has no more idea than France has of suppressing the treaties; what she wants is the same sort of liberty that France possesses, and she wants it for the same purposes and would employ it in the same manner.

Billot. I repeat that protestations of that sort will not convince Europe. Europe will want realities, not words. Do not waste your time in trying to convince me. I am talking to you confidentially and frankly and I tell you that, to succeed in such a matter as this, we must find a solution which will

satisfy Europe. It is from that point of view that I will examine the question and I think I see plans which are worth consideration. The difficulty is clear. I will do what I can; rely on that.

Marshall. Well, there is one plan which would be of a nature to satisfy everybody. It would be to put a stipulation into the revised treaties that Japan can alter them when she becomes free, but that she cannot suppress them. Of course I mention that idea as a purely personal one without any authority; but I should think the Japanese Government would be willing to adopt such a condition.

三〇九 明治六年一月三日 非上外務卿宛

條約有效期限問題ニ關スル獨佛ノ態度報告ノ件

附屬書一 十月十八日附青木公使ョリ蜂須賀公使宛内

- 一 十月二十六日附蜂須賀公使ョリ青木公使宛
- 十月二十三日附蜂須賀公使宛往電

十六年十一月三日

西班牙國マドリツド府ヨリ 茂

詔

馨賢臺閣下

(追申省略)

註 1、2、3夫々附屬書一、二、三參看

附屬書

執掌スルニ方リ彼此往復上ニ於テ誤解相生候テハ千萬々々為面ノ語氣ニ徵スレバ當日頗ル「エキサイト」被成居候歟本月十日附ノ貴書正ニ拜讀依テ早速拙答可差出筈ノ處貴書本月十日附ノ貴書正ニ拜讀依テ早速拙答可差出筈ノ處貴書

有之候ハハ折返シ叉々何分ノ義御申越可被下候候間篤ト御一覽ノ上尚ホ貴意ニ觸レ且御了解難相成候事項遺憾ノ至ニ有之申候依テ來示ノ質疑ニ對シ左ノ條々遂貴問

一、本年九月十七日我外務卿宛ノ拙電信中

the termination of tariff subject to further agreement as to the opening of the country

ニ據ル)ニノミ關シ獨政府ヨリ終期ヲ發言シタル義ニ相違ス云々御申越有之候處通商條約税則(貴書ノ文字ノ文字有之候處其趣意ハ「マルシヤル」氏探知ノ實ト

ハ無之候卽九月卅日附外務卿宛拙電信中

as to German intention relative to terminability, I am sure that it refers not only to tariff but to all treaties. They will kindly effectuate in favour of Japan the recognition of this principle in general

候又十七日拙電信中ノ文字御參考被下候得ハ詳細敢テ説明ヲ要セズト召申

Whether the opening is under an entire or partial abolishment of exterritorial jurisdiction

or whether the opening means entire opening and enjoyment of all right in the interior or mere travelling for commercial pursuits is left an open question

様存中候何トナレバ貴書ニモ説明有之候通り條約物體 場合ニ立至リ候ハ、治外法權ヲ解クト同時ニ條約ノ期 期ニ至リ自我可充塞「コンヂション」ノ義ニ付我彼間 然ニ此點ニ關候テハ先日入內覽候我機密信中ノ注解等 限モ明ニ終ル事ト御承知ニ有之候處小生ノ電信中ニ right ノ囘復ヲ幾望スルハ勿論ニ可有之依テ其節自我 ノ「コンヂション」ヲ付シ其終期ヲ八年ト定メ置キ其 篤ト御推考於有之テハ決テ貴我ノ際誤解可相生筈無之 全開半開ノ義今ヤ不定ノ疑問ニ付ラルヽガ如キニ付亦 トノ義ハ悉皆開全國トノ意味ニ相違無之又果テ開國ノ モ可相成候併シ 八年ノ期ニ至リ 於我ハ terminatory we consider treaties as expired, as far ノ協議不相整候ニ於テハ重テ該終期ヲ延引スル都合ニ 「マルシャル」氏探知ノ實ニ相違ス云々御申越有之候 義御了解難相成何トナレバ獨政府ヨリ發言セル開國 as we ハ

> are ready according to the condition to open the country, but under the *condition* that the Japanese laws should be applicable also to foreigners in every respect, that is the final abolishment of the exterritorial jurisdiction

其功歐洲各國ノ成績ニ同一ナラントノ事ハ確乎難相保 相行候ニ於テハ本權囘復ハ金ク「コンヂシヨン」ニ關 是非々々認可致サセ度義ニ有之申候但シ八年後我進步 of exterritorial jurisdiction ニ關シ候テハ各國尚ホ erto ノ意)ヲ請求セザル可ラズ假令バ abolishment 迫リテ必ズヤ其優待(a better treatment than hith 候得共姑ク立法司法ノ區域ニ就テ致想像候ニ八年間ニ 府更ニ相關ノ手段ヲ 假 用 シ some スルニ於テヲヤ)殆ド可豫知義ニ有之候左スレバ我政 價トシテ何等歟請求申出候华(況ンヤ今獨白ノ建言被 ノ事實ヲ證左スルモ該權囘復ヲ請求セバ各國共必其償 我幾望ヲ認可セズトモ the terminating right 丈ハ 我裁判官ノ資格モ可相崇候ニ付該事實ヲ證左シ各國ニ ンヤ況ンヤ今後八年間ニハ開明ノ事業頗ル可進其歩尤 手段ヲ尙四年或ハ八年ヲ期シ左置不問ニ付シテ可ナラ 政府最大ノ幾望ニ有之候處前段中述候通り八年後ニ至 稍ク佛國ノ五典ニ類似スル位ノ法律編集モ可相整且 開國ノ規約尚本各條約國ノ意ニ不相稱トラ豊回復ノ ル時ハ the terminating right ヲ囘復スル事 concession for ハ

by (to?) Powers 申入候節該政府ノ所見ニテハ無規約的ニ該權利ヲ囘復 tions ハ可成 free = 保持不致置テハ不相叶候抑先前小 right ヲ領收スル agreement ヲ致招致候テモ可然歟 risdiction should be then at least modified acin the interior, provided that the consular whole country should be depended(dependent?) 有之候併シ純然タル我政府ノ趣旨ハ opening of country under condition acceptable this right should be depended(dependent?)upon nating right ヲ unconditionally ニ認可可然云々 生儀我外務卿ノ意嚮ヲ體認シ獨政府ニ就テthe termi ×困却ノ至ニ候間今ヨリ八年後ニ係候我政府ノ ac 年後ニ至リ更ニ數年ヲ期シテ稅關囘復不相成候テハ萬 ニ存申候要スルニ今ヤ八年ヲ限リ規約相結置候半ニ八 ラ交付シテ the recognition of our terminaing cording (to?) our proposals made at Conference instance, the travelling for commercial pursuits スル事到底難被行 ニ 付 the effective exercise of ノ主義ニ據テ斡旋可相試トノ事ニ the opening of

開ノ義全ク我手中ニアリト報道致シ候都合ニ有之候但 都合ナリ)可有之トノ事ニ有之候依テ拙電信中半開全 abolishment of consular jurisdictionノ意味アリシ upon the abolishment or at least upon the tial opening of country and entirely or partial 更ニ商議ノ手段(該手段ト申語氣中 entirely or par-定期前後日本國開明ノ事業進其步候ハヾ其程度ニ準ジ 間該兩箇ノ疑問ヲ引離シ是非各自ノ understanding (as above mentioned)ヲ以テ領收スル確意ニ相見候 consular jurisdiction 耳 terminating right 〈旨 troducing of the tion ヲ與ヘ旦我 jurisdiction et justitia ノ南項ニ テ可致進送候要スルニ八年後ニ至リ我政府へ free ac 可可然云々小生ヨリ十分議論ケ間敷甲張候得共獨政府 ヲ招來シ度特ニ稅權囘復ノ義開國ノ疑問ニ關係ナク認 一九月十七日附拙電信御謄寫無之候ハヾ照據ノ爲メ重 | 华開トハ不明言候得共斯字句ハ來書ニ照據致シ候萬 確乎前顯ノ主意ヲ維持シ且懇諭的小生へ申聞候ニ unconditionally or unimportant concession proposed modification of the iņ-

獨政府ニ於テハ通商條約稅則ノ終期ヲ發議シ而シテ他條約 於テ獨政府ノ發議ニ同意シ佛政府へ斡旋有之時ハ或ハ日本 以テ斡旋ノ勞ヲ擔任候以上ハ勿論日 不政府ノ幾望ヲ認了シ テ此點ニ疑ヲ御抱被成候義萬々意外ニ存中候獨政府好意 **全體ノ終期ヲモ亦發議セシニ相違ナシトノ御返答相伺候得** ヲ望ムニ相當リ或ハ後日混雜可相生哉ト苦慮ス云々尤慥ニ メ獨政府發議スル區別ナキ條約全體ノ終期ニ同意セシムル = 付佛ノ囘答ハ本邦ノ企望ニ符合スルモノト相考然ルニ貴君 期ト二段ニ區別シテ發議致シ有之是ハ日本政府東京豫議會 下度左候ハ、貴拙間ノ誤解滅其跡候事ト存候將又御束書中 右兩款ニ關スル答詞ハ頗ル長文ニ相成候得共彼是御照考彼 ノ節ョリ今日ニ至ル迄始終變セザル企望ト承知致シ居候ニ 「佛政府ノ發議ニハ通商條約税則ノ終期ト他條約惣體ノ終 小生ニ於テ安心可致存候云々ノ御質疑有之候處貴君ニシ 於テ企望スル如ク終期ヲ二段ニ區別スル佛政府ノ意ヲ止 シーボルト氏ョリ既ニ御勸告相成候通リ澳伊兩國政府ニ 旨先前ョリ内聞致シ居候間此亦御參考ノ爲申出置候 獨政府ハ(墺モ亦然ラン)不同意不甲張意嚮ニ有之候 シテ可ナリ整頓致シ候ハド治外法權ヲ廢止スル 事ニ付

問ニ關スルトナレバ我政府モ決意ハ十二年ト明言シタリ) 中ニ有之候通)其證左ハ臆祭ヲ要セズ九月廿一日附我外務 自他事項ニ關スル條約惣體ニ付スル終期年限ヲ五年十年或 相違無之反之今囘御申越有之候貴祭ニハ相反シ居申候勿論 無之テハ不都合于萬ニ付該條約ニモ必終期ヲ豫定スル趣意 ナリ)ニ關シ條約相整候半ニ該條約中終期ノ豫定(裁判疑 云フ)自他ノ事項(卽アトミニストレーションノ疑問等是 ルニ今後へ但シ今後トハ明春ニア於東京再ビ開商議ノ期ヲ 云々卽是ナリ然ル以上ハ通商事項(税則固ヨリ之ニ加入ス) (to?) the separate settlement of commercial parts ニ有之候故ニ獨政府ノ趣意ハ正敷マルシャル氏探知ノ實ニ ハ碓乎其意ヲ體シ居候(亦マルシヤル氏八月三十日報道書 關スル條約ヲ八年ノ終期ニテ可結納トノ趣意ニ有之候然 十二年ト確定スル事ハ matter ハ引離シテ致結納トノ義我政府ノ幾望ニ有之候間獨政府 of. リ御互ニ宛候電信中 German minister assured Ino-ソ擧動スル都合ニ有之候抑如來諭通商條約ト自他條約 タリ抑區別ナ キ German intention and said: they consent 終期云々貴察或ハ誤解相生候ハ定 of next negotiation in

テ拙電信中(九月卅日ノ分)

I am sure that it refers not only to tariff but to all

treaties, they will kindly effectuate in favour of Ja-

As to German intention relative to terminabillity,

pan the recognition of this principle in general 第二御座候該權果シテ認可セラレ候上ハ今後商議ニ由 better denouncing right 丈ハ是非々々各條約ニ關シ(即 mination clause 勿ル可ラズ要スルニ terminating or 約ニ關セズ今後ニ可結約分ニハ各己々々ニ豫定シタル ter-之節ハ小生言ヲ返シ「否々通商條約ハ其通用規限ヲ八年ト 排棄シ各條約ヲシテ terminable ノ性質ニ致シ度事ハ固ヨ 竟從前ノ 條約ハ permanent character ニ候間該性質ヲ ノ文字ニ起因致シ候半察申候併シ啻ニ稅則ノミナラズ自他 商條約ヲ八年トナシ自他條約ヲ五年トナス等全ク我權利 前英文中 in general ノ意也) 認可可然云々」 申込置候次 ナシ自他條約ハ十二年タルベシトノ我建言ニ照據シ何等條 コロース」ハ單ニ税則ニ關係サスル趣意ナル歟云々質疑有 ノ條約ニモ關係ストノ意味ハ前段ノ陳述ノ趣意ニ有之候畢 我本望ニ有之候依テ最前獨政府ヨリ「テルミネーション、 「 リ 通

可有之候依テ the right of denouncing ヲ in general ニ取付候事最肝要ニ可有之候右ハ小生我政府ノ意味ヲ取違ニ取付候事最肝要ニ可有之候右ハ小生我政府・意味ヲ取違ニ取付候事最肝要ニ可有之候右ハ小生我政府・意味ヲ取違にはではでは、フ文字ョリシテ區別ナキ終期云々ノ誤解相生候ハ族モ可有之候得共 は refers not only to tsriff but to all freaties ノ文字ョリシテ區別ナキ終期云々ノ誤解相生候ハケ・第五葉目ニ於テハ the claim of Japan to the right of denouncing the treaties ト條約ノ字ヲ複數ニテ相用のf denouncing ない。

承知甚奇與ノ感覺ヲ生中候況ンヤ御來書中「小生任國ノ政佛國政府ノ好意ヲ維持スルニ相違無之證左等御來示有之致生ョリ中出シ候段於貴君甚意外ニ御考相成候トノ來諭幷ニ日附拙機密信中ニモ英佛共ニ抗議イタシ歡心不相顯云々小日附拙機密信中ニモ英佛共ニ抗議イタシ歡心不相顯云々小月附出機密信中ニモ英佛共ニ抗議イタシ歡心不相顯云々小月附出體信(九月十七日ノ分)中――ノ文字ニ徵スルニ英將又拙電信(九月十七日ノ分)中――ノ文字ニ徵スルニ英

- トシテ同一ノ事件ヲ負擔スルニ於テヲヤ乍去佛政府ノ好意 九月十七日拙電信中 之候勿論爲國一大事ヲ執掌スルニ際シ候テハ不得已場合ニ 辯解セザル可ラズ依テ左ニ其細縷ヲ啓シ候 不好意ニ關スル一件ニ付テハ必ヤ裁書中ノ文字ニ照據シテ 小生不爲覺悟ニ有之甲候況ンヤ御互ニ co-ordinated 官員 シ其場合ニ於ルモ人ノ功ヲ滅シ自分ノ功トナス等ノ事 會セバ區々タル私黐ノ情質ヲ顧省スル譯ニモ難參候ハン併 有之候半歟ト掛念罷在申候然ルニ卑意ノ方嚮ハ金ク之ニ反 力ヲ蔑視シ却テ小生ノ働ヲ驕誇的ニ衒賣セント 等へ御勸告相成候次第二寄り働キ甲斐ナシトテ不平ヲ唱 シ隨テ從前ヨリ所業上ニモ斯ル卑劣、形跡ヲ衷セシ事ハ無 二英佛ヲ譏議シ有モノヲ無キョウニ取成シ又ハ貴君ノ御盡 中入候心底ハ毛頭無之又小生當府ニテノ働キハ貴君ガ墺伊 府ノ好意ヲ不好意ノ如ク貴君ヨリ モ決テ無之」云々ノ文字有之候得共如何ニモ 相伺候ニ付一身上不足ヲ 申様二 小生義妄り 御考 ハ於

with the present determination of England and France any attempt at settling now the mode and principle of opening could only produce disadvan-

tages to our interests

云々トノ意ハ憑據非無之候其箇條ヲ枚擧セバ佛政府事擬間ニ方リ拱手英佛政府ノ偏頗的抗議ニ被打勝候テハ遺憾招致ニ付先日外務卿代理者某氏ニ就テ云々又本件將結局ノ犯政ニ付先日外務卿代理者某氏ニ就テ云々又本件將結局ノ

第一、通商事件ヲ治定スルニ不同ナケレドモ新税則(此

其實誠ニ不定ノ申分是ナリノ發議ニ齊シトノ「ヲブセルベーション」モ有之程ニテナリ此義ニ付テハ我外務卿ノ電信佛政府ノ發議ハ英政府第二、七月七日佛外務卿訓令書中第五及第六款ノ云々是

抗議候テハ反偏頗論ニ被打勝候テハ遺憾云々正シク豫防的知識候テハ反偏頗論ニ被打勝候テハ遺憾云々正シク豫防的外事折合吳候ハ、至妙ナ レ トモ 獨ヨリ强テ勸告相成云々府事折合吳候ハ、至妙ナ レ トモ 獨ヨリ强テ勸告相成云々府事折合吳候ハ、至妙ナ レ トモ 獨ヨリ强テ勸告相成云々府事が合吳候ハ、至妙ナ レ トモ獨ヨリ强テ勸告相成云々府事が合成の方法を表示。

用スル敷ト程々推察致シ申候併シ其參り掛り等ハ直 候前ハ猶更疑念シ佛ハ果シテ「トリクー」氏ノ說ヲノミ採 好意ニシテ全體今少シ顯著ニ七月七日附書帖ニ相見へ候得 府ノ幾望ヲ充塞セシムベシトコソ申込候都合ナリ佛政府 疑問中英佛輙主唱者タルニ付右兩政府間ニ斡旋シ須ク我政(ピン) 話頗ル安心致シ候都合ニテ有之申候 ハ右等ノ事モ倚賴セスシテ可ナレトモ實ニ過日御目ニ掛り 意ヲ 言語ニ外ナラス候依テ小生ョリ澳國へ申込シ 伊國へ申込候際ニモ事實ヲ證明シ 中張候條勸告有之度ト明言セシニ非ス要スルニ東洋 此康其康二付佛國不 = 得拜 ŀ

復シ公務ノ打合セ等五ニ無腹臟致居候間萬端御掛念被下間 以電信云々御注意被下多謝々々其後同使トハ敷回書信ヲ往 拙電信貳箇 右條々無腹臟可致拙答トノ懇諭ニ付無遺漏達御聞候 ノ寫ハ固ヨリ當日森公使へモ致轉送置候處其節

先ハ爲其草々不乙

十六年十月十八日

藏

周

須

賀

賢 凛

此八年ノ終期ト ト相察候 シテ其終期ハ八年トスベシト在日本獨公使申出タル ハ前顯コン ヂ ション付キノ終期ヲ申タ 由则 iv Æ

進メ候得ハ右八年ノ期限前ニテモ日 現存領事裁判權ノ幾部分ヲ廢止スベシトノ事 ノ事ハ不定ノ疑問ナリトノ義ハ本邦開明ノ事業此上其歩ヲ 九月十七日附貴電信中日本國全開或ハ幾部分ヲ開 不國中ノ幾部分ヲ開キ 7

右ノ通リ小生ニ於テ貴諭ノ趣了解致候得共重要ノ件 尊臺へ獨政府ヨリ懇話有之候由依テ獨政府ノ各國へ 念今一應爰ニ相掲ケ候 回章中不定ニ發議セシ事ニハ無之段敬承致シ候 差出候 = 付為

着手相成候ニ付一身上ノ不平ハ先日モ中進候通リ毛頭無之 唯々後日本邦ノ爲ヲ心配致候而已ニ御座候依テ御追書ニ井 念モ有之由御中越ニ候得共小生ニ於テハ貴君ノ墺伊等へ御 於テ好意アリト御通知致シ候段ハ御確信ノ趣又不好意アル 偖又佛政府不好意云々ノ義ニ付御中越ノ趣委曲敬承小生 小生ニ於テハ別段辯明致シ候ニ 由縁モ無之トノ御紙表ニテ安心致シ候此點ニ付テハ猶御掛 上外務卿へ云々辯明致シ候テハ如何ト御中越ニ候へ共今日 ハ 不及ト ·相考申候

foreigners into interior by extended receive 15th ultimo by mail as it is the above despatch: The

付「ヲブセルブ」被成候テ不苦候 都合ノ義ト存申候其際ニハ御用捨ナク拙電信及機密信ニ 考有之候テハ於小生萬々不不意ニ候間拙電信幷機密信 テ如何左候ハ、御趣意井ニ佛政府ノ趣意モ確乎相分リ 照據シ都合次第賢臺ヨリ井上外務卿へ云々御辯明相成候 ノ御盡力ヲ蔑視シ或ハ佛ノ好意ヲ不好意ノ様取成候様御 候義ハ千萬遺憾ニ候御互往復中ニ生シタル云々特ニ貴君 ヨー尚 IJ 々昨日「シー 投シタル書帖ノ義ニ付種々云々申遣候全體事此ニ至 ルト」氏ョリ通信中「マ ルシ 好 =

附屬書二

達シタレバ現存ノ條約ハ全ク功力ナキモノトナシ得ルト 第一、獨政府ガ歐洲各國政府へ回章中發議セシ終期ノ意味 件々委詳無御腹臟御示諭被下多謝ノ至奉存候 事ナリ御申越ノ如ク九月二十一日附我外務卿ヨリ御五へ當 至リ日本ノコンヂション全國ヲ開キ治外法權ヲ解キ得ルニ 本月十八日附ノ貴書拜讀改正事件ニ付小生不明瞭ニ相考候 ハ通商事項ノミナラズ條約全部ノ終期ヲ八年ト定メ其期 乙號 十六年十月二十六日附蜂須賀公使ョリ青木公使宛內 タル電信中通商事項ハ他ノ事項ョリ 引離シテ締結スベ シ 7

瞭ノ廉ハ御五ニ明瞭ニ相成候迄無腹藏往復致シ候方好結果 ヲ得ルノ基ト ヲ重ネ候モ全ク御同然憂國ノ情ョリ起リ候事猶此後モ不明 右條々ニテ御互間此上不明瞭ノ康ハ無之ト存申候此如往復 相考申候

可奉存候 右貴答旁申進候間御都合ョ キ節御再答被下候ニ於テハ大幸

十六年十月二十六日

韶

茂

木公 使閣

十六年十月二十三日附蜂須賀公使宛往電

Japanese Minister

Petersburg

and not to be mentioned as my instruction until you for your personal information as strictly private, answer by wire; but I will add the following only Hachisuka. Shall answer too complicated to your system of pasadmission of telegram

generally, our geographical position system for a limited period. ports and also to allow coasting trade under charter same time with the latter. jurisdiction and deem it best to consider it at the concede in entirety. is necessarily connected with the question of stead, we are not unprepared to open few (以下省略) Therefore, as concession As to coasting trade forbids Inouye Ö

明治士军一月 ブロ 曰 蜂須賀外 駐務

獨逸政府ニ意見書提出ノ件

蜂須賀公使宛

御意見兩氏ト相違ノ脈モ有之候得共後ニ至リ釋然御瞭解尚 九月十九日發ノ貴簡致披閱候先版森青木ト會議ノ節始メ 一層兩氏ト協同御盡力ノ趣承悉於拙官モ大ニ休神致候 凡テ條約重修ノ件ニ關シ拙官ヨリ差立候電信及書簡等 ハ

可成森青木へモ御轉示隱諱セラル、事無之樣致度要之自己

方致希望候 計可申候ニ付右記入無之分ハ悉皆森青木ヘモ御示シ相 官一人ノ御心得迄ニ差立ル電信及書簡ハ其旨ヲ記載致様取 免レザル次第ニ付諸事協同熟議御從事 意見ヲ敢爲セントスルトキ ハ竟ニ相五ニ撞着ノ 相成度尤向後單二貴 成候 恐 ヲ

協議ノ上外務卿ョ 苦候得共夫迄ノ處ハ去月二十三日附電信ニテ中進候如ク白 國政府へ廻達セシ事御確知ノ上ヲ待テ森靑木兩公使トモ御 テハ空言ト相成候義ニ付追テ獨政府ヨリ右意見書ヲ以テ各 極々秘密ナリト申入置候詞モ他ニモ之ヲ承知スル者有之候 好意モ徒然ニ歸シ且ツ此方ニテ獨逸政府ニ對シ右意見書ハ リ聞テ承知致居ルト中様ノ事有之候テハ獨逸公使ノ折角 場合ニ立到候義ニ付他日獨逸政府ヨリ右意見書ヲ各國政府 獨逸政府ノ好意ニ起リシヲ以テ竟ニ右意見書ヲモ送致セシ 政府ノ意見書相認メ書簡相添同氏へ交附致置候抑右へ全 談判ニ及ヒ内閣一同トモ協議ノ末途ニ別紙ノ通英文ニテ我 度談判ノ提要ハ過日巳ニ以電信中進候通ニ有之其後再度 2 重修一件二付不邦在留獨逸公使カウト 相廻シ候節其國政府ニ於テ其儀ナレバ巳ニ駐劄ノ公使ヨ リ今度斯々内訓到來セリト シ デノーフ氏 御發言被成不 1 力 ラ

承知致スナラント |此段以内信中進候也 テ凡テ貴官一人ノ御見込ト 一人ノ御見込トシテ曖昧ニ御話置相成候様致ントハ思ヘトモ如何ノ者ニヤト云フ使ノ語氣シテモ自分ノ考ニテハ其位ノ事ハ我政府ニテ

十六年十一月九日

及三〇九附屬書三参照 234夫々三〇二、三〇三附屬書 一〇六附屬書

明治士至一旦十日 蜂須賀駐佛公使宛弁上外務卿ヨリ

條約改正ニ對スル佛國政府ノ態度ニ關ス ル件

十月三日附尊翰落掌仕候益御多祥御精勤奉欣然候劣弟無事 爲病且柔弱ナル質故別テデリケートニ相成フアミリノハツ 候事ハ於弟無御座候御安心被下度候其節差出候電報後獨 へ御會合ノ後森ヨリ少々疑心ヲ生ジ候由併シ更ニ意ニ介 ー無之實ニ困難ヲ極メ申候御憐察被下度候陳ハブルツセ 光乍併當三月已來末子事队床今以全快二不至又愚妻事

七

改正事件 反對論云々ハ既ニ來書モ有之少シク奇異ノ思ヲ生 **忠候テモ内地通商抔切迫申來候得ハ程善ク相斷候テ先此上** 屹度御 大輔ト 人ヨリ中來候トモ近々ノ御來書ト又マルシヤルノコンベル度候左候ハド明瞭可相成事ト相信シ居候又於弟ハ如何樣何 力ノ不足事ユヘ國ノ迷惑ト悲歎ニ不堪又青木ヨリ兎角英佛 = 政府ノ少シク動キタルハトンキンアツフェアスニアライン シェー 付相成候書類ヲ極密ニシテ寫壹通丈至急青木ニ御送達被下 功ヲ未ダ能ク不知事ト愚考仕候就テハ弟エ機密信ニテ御送 共定テ老豪丼ニマルシャル氏ノ盡力ニテム シ候哉此末甚以懸念至極ニ御座候最早此上ハ如何樣工 スヲ不致ト 劣弟ノポリ 現行條約ヲ守成シ兩三年間改正延引仕候外手段無之候實 ニ候得共前便中上候通ニ相決中候獨政府ニ於テ如何感觸 ンヲ申出候故是迄コンセツションナシト相考候故少々困 注意有之度候又ト ノ談話等ニテ委曲承知仕居候間御安心被下度候丈佛 ションニテ佛政府ノ方向ヲ改メ候事又同人 ヘフェ モフレ シー不當リニテ基面皮モ無之候得共如何 ンド ボー ル IJ ヲ與エ候事ハ不容疑候ニ付其邊ハ ー局外中立位ハ望ミ度色氣ヨリ我 ン キン事件ヲイン ウブメント ス チュル 八卜同外務 - シ居候得 メ - ノ 奏 ント セン

公使ト

劣弟面晤ノ末我政府ヨリ他國政府エ

可 與コ

ン ゛セ ッ

一・談判書此次便ニ差出可申候リニカラ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働候趣向御承知通ニシテ改正ノムーブメントヲ佛政府エ為働に対している。

(中略)

書外ハ後鴻ニ讓候時下益々御自愛專一奉存候謹言盡シ協和可出來人ナリト中越居候此段モ御心得迄申上置候盡シ協和可出來人ナリト中越居候此段モ御心得迄中上置候理・中候青木ヨリハ老臺ノ事ハ餘程適當ナル人物能其職ヲ

條件附有期結約問題ニ關スル件

君在日本獨逸公使へ御返答云々貴電信寫靑木氏ヨリ廻シ來拜啓偖ハ條約改正一條ニ付貴君ヨリ靑木公使へ當テタル貴

十六年十一月廿八日他事ハ公信機密信ニテ申上候ニ付此段計草々内啓徴恙ト存候

ドリ

ツド府ヨリ

韶

馨賢臺閣下

2 三六九附屬書一青木公使發外務卿宛電信託 1 三六六附屬書外務卿發青木公使宛往電

|| || 明治十七年一月四日 井上外務卿宛

新任英國公使ト會議ノ件

ontial マルシャル氏來信 X號

Confidential

4 January 1884

Monsieur le Ministre,

I left Lisbon ten days ago and came back to Paris see Mr. Plunkett, who was then here.

Mr. Hachisuka asked me to write at once to your Excellency with the results of the interview and I beg to enclose a condensed report¹ of those conver-

sations with Mr. Plunkett. They lasted, together, about eight hours, and almost every element of the position was discussed.

In order to avoid error the report has been agreed between Mr. Plunkett and myself, and Mr. Plunkett takes a copy of it.

I found Mr. Plunkett animated by what seemed to be a sincere desire to do all he can for Japan (consistently with his duties to England), and by a strong conviction that he has achieved wonders already in bringing England to the proposals contained in the Memorandum of 11 December. But, at the same time, he thinks that Japan ought to meet him half way and he was much disappointed at my opposition.

He asked me to wrice privately to Your Excellency to express his hope that he will be received with good-will and confidence in Japan and to say that his attitude will depend on the attitude adopted towards him. I told him that this was rather delicate, but that, still, I would write whatever he desired should be communicated confidentially to

Your Excellency, provided he read and approved my words beforehand; he accepted this condition and the result is the letter enclosed herewith, marked X. It is of course essential to give Your Excellency this explanation of the circumstances under which the letter X came to be written, but I venture to add that it is desirable Mr. Plunkett should not learn that I have mentioned those circumstances.

The general feeling left upon me by my interviews with Mr. Plunkett is that he is really convinced that England will not at present grant total terminability on the German conditions, but still I incline to the impression that it would not be impossible to bring England, with time, to agree to it, provided Germany and the other Powers maintain their present proposals unchanged. I may be wrong in this opinion, but I lay it before Your Excellency in the belief that it is correct. Mr. Plunkett has not *told* me anything of the kind, but I infer it from his manner and attitude.

I send copies of the conversation to Mr. Mori and Mr. Aoki.

I have the honour to be, Monsieur le Minister,

Your Excellency's most obedient servant, Frederick Marshall.

証 1"condensed report of those conversations with Mr. Plunkett." ハ別紙X號マルシャル來信ナリ

附屬書

Confidential Confidential

4 January 18

×

Monsieur le Ministre,

I think Mr. Plunkett is desirous that Your Excellency should be made acquainted, privately, before he reaches Japan, with the double fact that peculiar difficulties, of various kinds, have stood in the way in London, and that he has made energetic efforts to overcome those difficulties in order to obtain better terms of revision for Japan.

Mr. Plunkett evidently feels strongly that he has acted as a friend of Japan in struggling against the

obstacles which he has encountered in England, and I am sure he hopes that Your Excellency will think so too. He seems to be convinced that if he had not taken the side of Japan, as he has done, the result would have been far more unfavorable than it is, and I fancy he considers that the warm sympathy and support which he has shown to Japan in London justify him in expecting that he will find the same sympathy and support in Japan when he gets there.

I have told Mr. Plunkett that, so far as he is personally concerned, he may look forward with certainty, to a hearty welcome in Japan and to all the manifestations of esteem and trust which his character, his person and his manner arouse in everybody who approaches him. I have assured him that he will be received in Tokio with the warmest cordiality and with lively gratitude for his efforts to serve Japan.

But, at the same time, I have not concealed from him that, in my opinion, the testimonies of confidence and regard with which he will be greeted

in Tokio will be a hommage to his own qualities and merits alone and that they will not affect the action of the Japanese Government in its negotiations with England.

In reply to this Mr. Plunkett gave me to understand, rather distinctly, that his official attitude in Japan will be dependent on the manner in which he may be officially treated there, and that his personal disposition to be conciliatory and yielding will cease to influence him if the Japanese Government is not conciliatory and yielding also.

have the honour to be,

Monsieur le Ministre,

Your Excellency's very obedient servant, Frederick Marshall.

二一四 明治七街月子五日 并上外務卿宛

ンド 法權回復及內地開放問題ニ對スル獨佛ノ態度ニ關ス

(條約改正事件ニッイテ 佛國政府ノ在本邦附屬書一 十七年四月二十日後蜂須賀公使來電

同國公使宛訓令ニ關スル件〉

- 一 十七年四月十六日附マルシャル氏及レーン
- 三 在東京佛國公使へノ訓令
- 四 十七年四月三十日附マルシャル報告

六月六日到

獨政 信ヲ呈シ且郵書ニテモ委布中上候事ト存候此青木氏ノ報 意ヲ在日本獨公使迄訓令致シ遣シ候由此事ハ青木氏ョリ 滿足ノ承諾ト共ニ日本法律ヲ以テ全國ヲ開キ得ベシト ベリ 申 出テ候事ニ御座候隨テ小生ヨリ相呈シ候本月七日附 ヲ不得モ 三掲グル意味幷前顯十九日附電信ニモ反對ヲ引起シ候 ニ付テノ同國在日本公使ヘノ 生白國ブラツセルス府ニテ同政府其筋ヨリ承リ候反對 ショナル云々ニ不同意スル而巳ナラズ八年ノ後歐各國 府ハ昨年發議ハ主義ヲ飽迄モ固特シ英政府ノ申スプ 上候處其翌々廿一日ニ至リ在獨青木同僚ヨリ書翰 ル十九日二通ノ電信進呈 ノニテ其節マデハ獨政府ノ斯ノ如キ意嚮ナル 訓令云々又一八小生ガ所見 佛 政府ノ我改 ごの電 シーク 到 Œ 電 # 2 知 Ħ

巳來變節セシ證據ハ無之候得共舊臘十一日附ノ英メモラン 即今ノ意嚮ハ青木氏ヨリ前顯ノ如ク承リ候ノミナラズ當佛 覺書出來ノ譯ハ森公使當地出發前右兩氏ノ面會前途從事 N 合ニ至リシ哉ニモ相聞へ素ヨリ此事確然ニハ無之候得共多 ダムニ付テハ餘程小首ヲ傾ケ殆ンゞ英ニ同意ヲ表スルノ場 話有之青木氏ノ報知ト全ク符合致シ候尤獨政府ハ昨夏發議 本邦ニ先年中在勤御同樣能ク承知ノ人也)ヨリモ小生へ內 當佛國在留獨國大使舘二等書記官グーツシミツド氏 外務省中ノ或ル人ヨリモ承リ込候事有之且極密ナガラ即今 爲メ必要ナル事ヲ小生へモ話有之依テ在英我臨 ヲ御研究御熟考被下度隨テ爰ニマルシャル氏レー ル氏ト種々懇談ノ末右覺書出來致シ候事ニ 大山氏ト相談ノ上本月中旬レー ノ覺書ヲ卦入相呈シ申候此マルシヤル氏レ こ至り 更ニ存知致サベリ 十九日相呈シ候電信一通ノ方小生所見ハ何卒篤ト 勿論ナガラ其談決ノ如何ニ寄リ大關係有之様被存候尤過 可申尤貴地在留英獨兩公使ノ商議ニ不滿足無之等 生ノ望ム所 ニ有之歐各國ハ多分獨ニ同意ヲ表 御座候獨政府 ン氏當巴府ニ來リマ 1 御座候扨獨政府 意嚮 ーン氏兩名連署 時代理公使 -ン氏兩名 (此人 ·其意味 ル ァ シャ ス ル 1

洋二 好友 確然 獨公使へ訓令セシ事ト察セラレ候然ルニ此獨政 前以テ 或ル人ヨリ 爲メ十分ノ好意ヲ示セシハ唯一ト筋ニ我日本ヲ好ミスル 本政府ノ denounce スル權ヲ與フル ル 何分全 原因ト推察シ中候尤英ト大陸各國トノ間ニ於テ決テ大ナ 此邊二起因セルモノニハ有之間敷哉ト考ヘラレ テ八年ノ後日本空國ヲ開ク事隨テ我條約ヲ其時ニ至 ヲ得ズ政略ヲ改ムル 争ヒヲ生ズル 令ヲ 本月二至リ再ヒ昨夏ノ發議ヲ固守シ英ニ拘ラズ日本法 關スル 1 タル事ハ申上難ク候得共此節ニ至リ露國ト獨國ハ = ナリ > understanding ヲ要スルトハ有之候)決意在 ハ右ノ事情ニテ有リシナラン然ルニ過月即三月末 有之間敷必故アル事ト 日本佛公使與へ候段ハ過ル十九日附電信ヲ以(マトン)の英政府ニ同意シ我改正事件ニ付英ト大同小 | ク眞確ト保シ難ク候得共右ハ中ラズトモ遠カラザ 內話 政略ヲ計ル哉ノ風聞新聞紙上ニモ端々相見 他歐各國ト 如 ニモ承リ候本邦へ獨政府ガ好意ヲ示スモ キハ萬々有之間敷候得共畢竟英政府 ニ可至歟唯傅聞ノ儘ヲ中上候偖佛政 共ニ英國ガ埃及事件ノ拙策ヲ責 存ラレ申候未ダ即今ニテ 事マデ(尤歐各國 府 大同小異 即今ニ ノ我 俄 ベヌ 二上 テ ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ 邦 Ħ = ŋ 東 デ 或 フラ テ В == ハ 3

上候通り 關係ノ 佛政府 難計景況ニ有之候尤前段ニモ申述候獨露兩國合體云々東洋 館等ョリ内聞スル所ニテモ獨ヨリ佛ニ 猶又再考中ニ相見へ其放ハ青木ョ 拘ラズ此節聞知シタル獨政府ノ前段ニ掲クル如キ意嚮ニ付 度旨申入候處早速承諾卽夕電令ヲ出シタル由ニ承 務卿ニ小生面會ノ上同様ノ 去青木同僚ヨリ申越候ニハ過日同氏ヨリ獨政府へ促 密マルシャル氏迄送リ來候書翰中ニ其訓令三ケ條大意ヲ揭 1 之多分ハ獨ニ 在日本獨公使へ電令致シ候由ニ有之依テ一昨廿三日 テ最早此六七日間ニハ在日本佛公使落手相成候事 政府 或ハ極メテ内訓ナル哉モ難計)在日本同公使へ遣 有之依テ右寫是又爰ニ封入(英譯文トモ)相呈シ候扨此 令ヲ當佛政府ョリ 政策云々等モ佛今日 ス ハ右ノ如ク一旦英ト大同小異ノ訓令ヲ(但シ此訓令 ハ此節貴地ニテ改正事件萬般商議スル權ヲ與フル旨 ル ニ有之是ハ佛外務省商務局長クラブレ ノ 意ナル 同意シ再ヒ在日本佛公使へ訓令 出シ候ハ過ル三月十四日ノ便ニ有之依 ベキ 電信ヲ在日本佛公使へ電令有之 ŀ ハ 能 察セラレ隨 ク聞 リ承ル處対 知シ此 同意ヲ促シ候哉ニ有 デ 日 點二付テ ラ造 本 三當地獨大使 う事 シ候哉 ŋ ŀ 中候尤 當佛外 心シ候上 シ候ニ 11. IJ 候乍 E

曲申上候種可生哉ト望ミ居中候 結約希望二不堪奉召候猶佛政府 大體ハ同意スル方近カラン哉ト眞ノ推察ナガラ相考申候兎 角 タケ英在日本公使ニ折合ヲ付ケ此機ヲ失ハズ滿足ノ御 、モ獨政府ノ決意ハ我邦ニ取リ好結果ヲ可得相考候ニ ノ模様ハ次便迄ニ今一層委 付

本各國公使輩へ訓令有之度申入方了簡中 白耳義西班牙葡萄牙瑞西四政府へモ追々貴電信 - 二御座候 == シ 在日

=

基トナル哉モ難計元來開國立法ハ全ク本邦政府ノ隨意ニ做 其時々各國政府ノ承諾ヲ得ザレバ改メ難キ患難ヲ引起スノ 偖別紙マルシャル、レ 歌ヲ掲グル等ハ甚好マザルモノニ有之一ニ卑屈ニ均シクー ニ於テ同意ニ有之開國ノ事條約上ニ掲グル時ハ自縛ノ シ得ベキモノニテ條約ニ開國ノ期限ヲ設ケ法律ノ完全不完 セザレハ行ヒ難キ弊ヲ生ズベキ恐レ有之且日本法律モ開國 從フニ至ルモ後年我ニ於テ法律ノ修正改良等ヲ要スル 難キ歟後年之ヲ實行スル時ニ臨ミ何ニ付ケ歐各國ニ相談 時期ニ臨ミ確定セシモノニ各國同意ヲ表シ各國人我法律 ハ主客ヲ違フルニ均シキノ嫌ヒ死レザルモノト ニョリ外國政府ニ於テ左右スルガ如キ性質ラ帯ビタル I ン兩氏ノ覺書ハ其大體主義 存 患兔 小 腙 條

> 勅意ヲ以テ御布告相成ル事最良策ト相考而 開クナリトモ來年ョリ開 純粹本邦政府ノ決意ヲ以テ今日 クナリト ⋾ IJ 開 クナリト シ テ内國 モ 本年 3

御推考御考慮ノ程希願ニ不堪候也 意ノ最要點ト存候ニ付愚存ヲ不顧申上候拙文意ヲ盡サズ 年去前後宜御照考我レヲ自縛スル如キ忠無之樣條約上御注 我ニ取リ患難ナキヲ計ル至當ノ策ト相信シ候乍去卽今獨政 ヲ持タズ内地ニ人ルヲ得ザル而已ノ事ト相成可中是レ後來 欲スル外國人其他商業ヲ成ス事ヨリ萬般本邦法律ニ 本邦政府御同意他各國モ異議ナク終ニ御結約相成ルトノ事 候得ハ假令開國ノ事條約ニ掲グルモ忠ヒ無キ事 ノ意嚮ノ如キハ全ク條約全部ヲ八年ノ後ハ廢止シ得ベシ ナシ得ラル ス シテ日不法律ヲ以テ開國シ得ベシトノ意ナルヲ以テ是ニ レハ此御布告後ハ其後ノ在日本公使ノ許可ヲ經 ベク我法律ニ從フヲ欲セザル 、者ハ其自 ずト可相成 隨從サ 由ノ權 テ隨意

十七年四月廿五日 巴府ヨ 1)

百

務 卿閣 下

猶々在英我臨時代理公使大山 3 1) 我公館組織配置等ノ事

生二 味有之聊拙ヲ免レザル哉宜御折衷肝要奉存候尤大體ハ テ英ノミヲ知リ他各國ヲ詳ニゼザルヨリ聊偏見ヲ発レ 哉ト行シ又マルシャルハ或ハ外交政略ニハ疎濶ナル マルシヤ 於テマルシャルノ意見ニ同意御座候也 ン意見書今便御手許へ差出シ候事ト存候是ハ巳 ル意見書ト御照考被下度レーン氏ハ英ニ在 氣 小 771 ij

1「過ル十九日 二通ラ 電信」ノ内一通ハ附屬書 來電 他ノ一通ハ見當ラズ

2「本月七日附ノ電信」ナルモノ見當ラズ

(條約改正事件ニッイテ佛國政府ノ在本邦同國公使宛訓 令ニ關スル件) 七年四月二十日發蜂須賀駐佛公使來電

ハシタリ 大略左ノ如シ ハ在日本佛公使ニ訓令ヲ送付シタル事ヲ内密ニ

日本政府ハ十ケ年ノ中此通商條約ヲ廢棄スルノ權ヲ有スへ 事件ヲ約定スル所ノ通商條約ヲ締結スル事ヲ承諾スヘシ 佛國政府ハ稅目及ヒ東京豫議會ニ於テ討論シタル各種ノ シ 但シ其前 三ヶ年 蕳 満足ニ 月 本全國 ラ開キ 置 カ + ル IJ カラ

> 生絲ニ課スル輸出税ヲ廢シ文學及工業上ノ所 難破船ニ關スル日本ノ發議ニハ充分ニ同意スヘシ 右ニ關スル獨逸ノ提議ヲ勘考スル事ヲ拒マサ 最惠國條款ニ付テハ其主義ヲ維持スヘシ然シナカラ佛國 司法及行政上ノ結構ヲ確定シタル後ニ於テ議スヘシ ヘキ方法ヲ定メサル可カラス 會議ニ於テ論定シ別條約ニ掲載スヘシ此別條約ノ終期ハ右 全國ヲ開 |キタル時ニ要用ナル司法及行政上ノ結構ハ次回 ルヘ 有權ヲ保護ス 7 ハ

一千八百八十四年四月廿日

附屬書二

十七年四月十六日附マルシャル氏及レー Paris, 16 April 1884. ン氏慇書

Japan should be opened to foreigners Memorandum on the conditions under which

contrary they seem to the opening shall take ed together that the opening of the whole of Japan the revision of the treaties. to foreigners shall be, in some form, a condition of The European Governments appear to have point place immediately; on the to eight They do not ask that S, ten years decid-

hence as the period at which it shall be effected; but they claim that the Japanese Government shall bind itself, under treaty, to open the country at a fixed date and they assume the right of examining and approving the conditions of administration and legislation to which foreigners would be subjected in the interior.

We do not know (in Europe) whether the Japanese Government has, in the course of negotiations, given the foreign representatives in Tokio to understand or to suppose that it admits, wholly or partially, the right of foreign Powers to approve that administration and legislation. We do not know whether, from what may have happened in Japan, the Japanese Government is free or not free, to refuse that right to foreign Powers.

But we do know that the present treaties leave Japan free on the question; that they impose on her no engagements with respect to the opening of the country; that, so far as the present treaties go, she is at liberty to deal with it as she likes, and to take the initiative about it, if she so pleases,

according to her own views and without consulting any foreign Government.

If, therefore, the communications which have passed in Japan have not modified the situation created by the present treaties, Japan is in no way bound to make a treaty engagement on the question or to voluntarily encumber herself, for an indefinite future, with another engagement of such gravity.

Why should she not, on the contrary, reserve for her own action alone the arrangement of this question of opening the country? Why should she not settle its conditions by her own laws, as is done in every country in Europe, excepting Turkey?

If she did so the Powers might complain, but what rights have they in the matter? None—unless moral obligations have been tacitly accepted towards them during the recent negotiations which entitle them to say that Japan has already consented to grant them such rights.

As they have no such rights by the present treaties their object clearly is to acquire them in the revised treaty by pressing Japan to include them

therein. The object of Japan should be to prevent them from acquiring those rights and to retain in her own hands exclusively the entire control of the question in all its parts. It is on the supposition and in the hope that such rights have not been tacitly yielded up to them by the tone and character of the negotiations, that this memorandum is prepared.

If Japan is free why should she not declare that it is her intention not to deal with the question by treaty, but to regulate it, in every detail, by a Decree of the Emperor?

Of course, on such a subject, an Imperial Decree would bind Japan *morally* towards foreigners as completely as a treaty would bind her, and the terms of such a Decree could not be altered afterwards without very decisive motives. But the opening of Japan by Decree, on condition that all foreigners entering the interior are submitted to Japanese jurisdiction, would be a purely Japanese act, performed by the Emperor in the fullness of his power and rights, and the engagements created

by it, solemn though they would be, would present a very different character from those which would result from an international convention, and would place Japan in a very different situation of present and future independence before the world. She would follow the examples and adopt the precedents supplied by European countries, in which the aboltion of Alien Acts has not been made a subject of treaty arrangements.

The opening of the country is decided, in principle, by Japan herself; it is for Japan herself to decide also the time and the form. If she did so, by Imperial Decree or some similar procedure, her position before the world would gain largely. She would no longer be exposed to the reproach of keeping herself closed; she would have decided and regulated the opening on her own conditions, and she would have kept hereself clear of further treaty engagements.

As to the working out of such a Decree it may safely be predicted that, though foreign governments would probably object at first, certain of

them, after a time, would begin to allow their subjects to profit by it, and that successively, all of them would admit its application.

should be made, in the revised treaty, to any interstand by itself, is, still, to be wished that such a stipulation shoul d ments in the interior were conceded in substance dealt with exclusively by Decree of the Emperor. subjects in the ference of control of foreign Governments over their equoivalents, or set-offs. Especially, the country shall be opened at some fixed date, it insertion in the revised treaty of a stipulation that desirable, for any special motive, to consent to the Powers in the matter, or if it morally bound to come to an agreement with the should be created by treaty, if in any way avoidable expressed in this Memorandum) no such Even if the right of approval of jurisdiction arrangelegislation and administration in the interior being And even if the Japanese Government is already foreign Governments (contrary to the views uncoupled with any conditions, interior, the whole question of were considered no allusion right

Frederick Marshall R. Stuart Lane.

附屬書三

在東京佛國公使ヘノ訓令

- 1. Assentiment à la conclusion d'un arrangement commercial séparé, qui comprendrait, indépendamment du tariff déja élaboré par la Conférence, le réglement de différentes questions renvoyées a des sous commissions (droits de phare, régime des entrepôts et drawbacks, syndicats commerciaux, &c. &c.);—
- 2. Dénonciation possible de cet arrangement après une pariode de 10 ans, avec clause de tacite reconduction et sous réserve de la mise à execution préalable et satisfaisante depuis 3 ans, du second arrangement à intervenir sur les questions liées à celle de l'ouverture du Japon au commerce étranger.
- 3. Décision relative à la fixation de la durée de ce second arrangement, ajournée jusqu'au moment oû la conférence qui doit se réunir de nouveau à Tokio, aura réglé les questions d'ordre judiciaire et administratif que soulève l'ouverture du pays;—
- 4. Maintien de la clause générale de traitement de la nation la plus favorisée, sans decliner, cependant, tout examen de la proposition de l' Allemagne en ce qui concerne les questions *autres* que le régime douanier ou maritime et les réglements commerciaux;—
- 5. Admission d'une clause conforme au voeu émis par le Japon relativement aux naufrages.
- 6. Suppression des droits à l'exportation des soies et garanties pour la protection de la propriété littéraire et de la propriétaire industrielle.

註 英譯文省略ス

附屬書四

十七年四月三十日附マルシャル氏報告

(獨、露ノ亞細亞政策ト我條約改正問題ニ付報告ノ件)

Information secretly obtained at the beginning of April from a member of the French-Foreign Office as to the supposed motives of Germany in not adhering to the English proposal of revision.

Paris, 30 April 1884.

Since the Congress of Berlin Germany has steadily declared to Russia that she must give up all designs on Turkey and that Germany will oppose

any extension of Russia in Europe, adding, however, that Germany will look on without disapproval at the conquests or annexations of territory which Russia may effect in Asia.

It is believed that Germany has been led by four considerations to propose this policy to Russia.

The first that she intends to resist all development of Slav influences in Europe, as contrary to German interests and power.

The second, that she wishes to reserve European Turkey for Austria, in order to obtain for herself, as a set-off, a part of the German provinces of Austria.

The third, that she desires to create political difficulties for England in Asia, and to profit by them to extend German trade in Asia at the expense of England.

The fourth, to take precautions against the possible consequences to Germany of a revolution in Russia, by directing the national action of Russia, beforehand, towards Asia alone, and away from Europe.

For some years Russia resisted these proposals,

served, in the development of her commerce said, confidentially, that the essential object of the and the relations between Russia and Germany refor diminution of English influence there Asia which is expected to ensue from the hoped to find her own advantage, as has just been obdefinite extension of Russia in Asia. the convinience of Germany and Austria at the in-Asia, Russia cordially abandoning her old designs arrangement is to substitute Russia for England in Russia at last accepted the German offer. mer of late and, towards the end of March 1884, Constantinople and accepting, in their place, cold. But those relations had grown war-Germany is with It is

The first effect of this understanding between Germany and Russia is understood to be that those two Powers and Austria are expressing to England disapprobation of her action in Egypt.

Another effect, directly concerning Japan, appears also to have been produced by the recent arrangement. It was generally supposed, at the end of March, that Germany was going to accept,

of Corea by Russia. so rendered, to make of Russia by taking up a position for Japan against thus acting is to make more difficulties in Asia for friend of Japan. It is suspected that her object, in understanding with Russia, not to adhere to the Japanese treaties, and it is probable that she really in principle, the English basis of revision for the ter for asking Japan, as the price of England, which will give her a justification hereaf-England and also to serve the territorial projects English basis, but to assume the attitude of a decided, simultaneously with the conclusion of her refuse the arrangement proposed to her by Gerwould have done so if Russia had continued to Instead of that, no objection to the seizure Germany has suddenly the service

The present sudden action of Germany as regards the revision is directed, according to this view, not by any real sympathy or good-will to Japan but by the objects and necessities of her general policy, in which, for the moment, Japan happens to occupy a place. The Japanese revision is made to

fit in with the arrangements between Germany and Russia and also with the general policy of Germany which forms one whole and of which every detail is made to serve all the rest. The Japanese revision is being used by Germany as an occasion of opposition to England in favor of Russia, politically, and of Gemany herself, commercially.

luences as to the German motives by the newspapers, deal of proof has been obtained elsewhere, and of this case since the statement was made, a Germany should be regarded with mistrust; but in all statements from French sources with regard to Office, of the present action of Germany. est confidence, by a member of the French Foreign under ordinary circumstances. Note, such is the explanation given, in the strictaccuracy in many details has also been furnished more attention and for that reason, the infthan they would deserve towards Japan As a rule good

議最明白ナレバ我取ルベキモノト考フ、須賀公使ノ註 意嚮ハ殆ト同一ニ歸センカ但獨政府ノ發網外ニ於ケル蜂 英獨兩政府之說吳ナル如ク見ユレトモ其

茂韶

三一五 明治十七年七月十日 蜂須賀駐佛公使ョ

絹輸出稅廢止ニ關スル件

代ルモノナシトノ考慮ョリ益確守スルノ患ヲ招クヘキ哉ト代ルモノナシトノ考慮ョリ益確守スルノ患ヲ招クヘキ哉ト代ルモノナシトノ考慮ョリ益確守スルノ患ヲ招クヘキ哉ト代ルモノナシトノ考慮ョリ益確守スルノ患ヲ公テの資際のの場際ののでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一方のでは、一

甚夕相恐レ申候吳々御賢察奉仰望候

十七年七月十日

茂 韶

閣 下

1後出三一八附屬書一及二ノ七月一日附幷ニ七月十日 附電信以外往復ノ電信見當ラズ

三六 明治士笔月十八日 井蜂 サ上外務卿宛 埋須賀駐佛公使ョ

絹輸出稅廢止ニ關スル

御中越ノ通兎モ角卽今右發議取消シ猃近々議會開設ノ上若 迄ノ間ハ全ク取消シ難キ旨返答有之依テ小官ヨリ御電令中 便ニモ申上候通ノ理由ニテ他ニ之ニ代ル譲與ノ點ヲ見出ス 御訓令ニ選ヒ過ル十六日(則水曜日外務省請日)外務卿 拜啓絹輸出税一條ニ付過ル七日呈書以來御返電相受依テ右 シ他各國ヨリモ稅目ノ義ニ付讓與ノ請求發議有之如キ景況 面會第一ニ右發議全ク取消ノ義請求申入候處外務卿ヨリ前 ニ至ラハ其節ハ更ニ佛國ノ動議トシテ發議相成ルトモ佛政 ノ考慮次第二有之趣意中入候後外務卿委曲其趣意了解 =

事ヲ此上主張相成ル時ハ稅目全部ニ影響ヲ生スルハ必定ニ 正説或ハ請求等無之然ルニ佛政府ニ於テ右絹輸出稅廢止 求ハ議會開設迄ハ取消シ可申乍去議會開設ノ上萬一日本ヨ 外務卿篤ト其理由了解ノ趣ニテ然ラハ兎モ角モ右佛國ノ請 難ク候得ハ今日ノ處ニテモ速ニ取消シ猶議會開設ノ上前段 延引スルノ恐有之故萬一全ク佛政府ニ於テ此發議ヲ取消 テ其爲メ決定ノ稅目ニ狂ヒヲ生スルノ恐有之又他各國ヨリ リテハ他歐米各國ニ於テ我カ發議ノ稅目ニ付今日迄一ノ 出シ此請求ハ再發議セサル様日不ノ都合ヲ計ルヘクトノ ヲ欲セスト承ル上ハ可成丈議會開設ノ上ハ他讓與ノ點ヲ見 國ノ自由ニ任セ吳度旨乍去是ハ全ク萬一ノ時ヲ慮リテ今日 芝キト見込時ハ或ハ再ヒ此請求ヲ發議スル哉モ難計是ハ佛 リ歐米各國與フル讓與ノ條款中ニ付佛國ニ取リ得タル所最 ニ申述ル如ク景況ニ寄リ再發行相成候テモ不苦段申入候處 セントスル税目又再査ヲ要スル事ト相成結約ノ期限モ隨テ モ各請求修正ノ說等起リ候哉モ難計然ル時ハ今日 趣返答有之且我ヨリ右請求ノ理由 有之候二付小官ョリ右ハ他ノ理由ニ無之税目ノ部分ニ 申置候モノニテ絹輸出稅廢止ノ事ハ日本政府ニ於テ之 一殆ト決定 2 ノ

テ御滿足ヲ希望致シ候而已ニ御座候 先以御申越ノ御趣意ニ大體違ハサル様談判相整候ニ付是ニ 十七日電報ヲ以テ申上候寫ハ當便公信ニテ御手許へ差出候 以テ貴君へ可申進旨申入退席致シ候依テ右ニ搨クル大意昨 發シ吳可申哉相尋候處外務卿委曲承知一兩日中電令ヲ發ス 日本佛公使シエンキヴイツ氏へ電報ヲ以外務卿ヨリ訓令ヲ、官ヨリ其早速承諾ノ好意ヲ謝シ猶然ルニ於テハ一兩日中在 へキ旨返答有之依テ小官ョリ今日ノ御談話ハ直チニ電報ヲ 答ニ有之候其語氣頗ル款心ヲ相顯シタル體ニ相見候依テ小

十七年七月十八日

巴府ヨリ

詔 頓首拜

游 下

註 2「十七日ノ電報」見當ラズ 「七日」ハ「十日 こ」ノ誤カ、 前揭三一五文書參照

三七 明治士等月二五日 **井上外務卿宛** 蜂須賀駐佛公使

(絹輸出稅廢止ニ關スル)佛國外務卿談話書送付ノ件

井上外務卿時代 對佛交涉 三七

> 佛國外務卿フェレー氏ト ノ談話書送付ノ

附屬書

七月十六日佛國外務卿談話書

拜啓過ル十八日附呈書中申上候小官ト佛外務卿フエ ノ談話書別紙呈進候 111 v }

氏

十七年七月廿五日

巴府ニテ

茂

韶

飪 1前揭三一六文書 (追書省略)

務

卿

閣 **Т**

附屬書

十七年七月十六日佛國外務卿談話書譯文

(千八百八十四年七月十六日巴里ニ於テ) 蜂須賀公使佛國外務卿「ジュル、 フェリ」氏ト ノ談

公使 「グラヴリー」氏ハ閣下ニ 話シ申セシカ 絹糸輸出稅廢止 ノ事 == 付

フェリ氏 ハイ、話シ致セシ ナ ij

公使 猶拙者ヨリ御話シ仕リテ可然ヤ

フェリ氏 ハイ、何卒御話シアリタシ

公使 條約改正ノ事ニ付貴政府 ニ於テ一般 = 御厚意ヲ表

サラン事ヲ大ニ恐ル、ナリ 様ノ事ヲ爲シ得可キカ故ニ到底一致合議ヲ得ル能 變更ヲ加ヘスシテ税目ヲ承諾セントスルナリ然ルニ 事ヲ切ニ希望致スナリ其故ハ歐洲ノ諸政府ハ少シ 困却致ス可ク且之レノミナラス他諸政府ニ於テモ同 貴政府ニ於テ右議ヲ主張セラル、ニ於テハ日本政府 被下サルル事ニ付テハ我政府ニ於テ甚タ滿足致シ居 中出ラレタル絹糸輸出税廢止ノ議ハ拋棄セラレ ナリ併シ我政府ニ於テハ「シェンキウイツ」 氏ヨ Ŧ ン

フェリ氏 ケレハナリ ノ高低ハ我カ大工業ノ一項タル物件ノ高價ヲ生スへ ハ之レナク其故ハ絹糸ハ重要ノ原質物ニシテ其税額 拙者ノ方ヨリ此議ヲ提出シタルハ驚ク可キ事 --

公使 拙者ノ領收シタル電信ノ訓令中ニ又左ノ事ヲ記載 アリタリ即チ

トキハ閣下ハ先ツ會議ノ開クル メラレタシー段會議ノ開ケタルニ於テハ他ノ全權者 「若シ佛政府ニ於テ右議ヲ全ク拋棄スル事能ハサ リモ諸議ヲ提出ス可ク此際ニ當テ右議ヲ申出ラレ ルマテ右議ヲ拋棄セシク拋棄スル事能ハサル

> フェリ氏 貴方ニ於テハ右議ニ固着セラル、ヤ ラス拙者ハ閣下ノ望マル、通り致ス可シ併シ何故ニ 二代ル可半件ト殊ニ會議ノ如何二依テ決セサル可力 リ之ヲ確約スル事能ハサルナリ其拋棄ノ有無ハ其之 タルニ於テハ日不政府ニ於テ又之ヲ協議スヘシ アルニ於テハ右議ハ拋棄致シ得ルナラン併シ今日ヨ 拙者ニ於テハ若シ他ニ右議事ニ代ル可キ事之レ

公使 般ニ與フル所ノモノ佛國ヲ滿足セシムル事能ハサル 我政府ノ大ニ之ニ固着スル所以ハ税目ニ於テ變更ヲ ラレサル事ヲ切望スルナリ リ何レニ致セ我政府ニ於テハ會議前ニ右議ヲ主持セ ノ確信スル所ナリ則チ右議ヲ提出スル事モ出來ルナ ニ於テハ他ニ又之ヲ滿足セシムル事アラン事ハ拙者 ヲ拋棄ス可シー段會議開ケタル上ニテ我政府各國一 受クル事ヲ避クルカ爲メナリ拙者ノ勘考スル所ニテ ハ閣下ノ御考次第ニテ「シェンキウイツ」氏ハ右議

公使 フェリ 閣下 氏 「シェンキウイツ」氏ニ御送り被下ル、事ヲ得サル 了解致シタリ拙者ハ御望ノ通リ致ス可シ ハ電報ヲ以テ左ノ文言ヲ記 シ タ ル 改正訓令ヲ

左ノ文言トハ

宜二依テ絹糸輸出税廢止ノ議ヲ提出ス可シ」 議ノ開ケタルニ於テハ他ニ其議ニ代ル可キ事ヲ見出 「絹糸輸出税廢止ノ議ハ會議ニテ取戾ス可シー段會 可シ若シ之ヲ見出サ、ルトキハ佛國ノ代理者ハ 畤

ノ事是ナリ

フェリ氏 ハイ、左様致ス可 シ

公使 閣下若シ商事ノ區域内他ノ議ニ於テ絹糸輸出稅廢止 シ被下ル、カ ノ議ニ代ル可キ事之レアラハ日 不政府ノ中分通り致

フェ リ氏 ハイ、 勿論左様致ス可シ

公使 フェ 閣下ヨリ訓令ヲ御送リ之レナキ前ニ拙者ヨリ我政府 氏 閣下ヨリ直ニ電信ニテ訓令ヲ御送リ可被下ヤ如何 ニ閣下ノ御厚意ノ段ヲ電信ニテ申遣シテ可然ヤ將タ 直ニ拙者ヨリ左様致ス可シ

右ニテ終り

ŋ

(右原文)

du Japon et M. Jules Ferry, Ministre des Conversation entre M. Hachisuka, Ministre

Affaires Etrangères de France.

Paris, le 16 juillet 1884.

d'exportation de la soie? Excellence de la question de l'abolition du droit M. Hachisuka. M. Clavery a-t-il parlé ۵'n Votre

M. Jules Ferry. Oui, il m'rn a parlé.

je répéte. M. Hachisuka. Votre Excellence vondra-t-il que

M. Jules Ferry. Oui, s'il vous plaît.

ment Français pour la révision des traités. mon Gouvernement désire vivement que la proposila même chose. pourra plus se embarrassé et craindrait beaucoup que l'accord ne le tarif sans ancune altiration. les gouvernements de l'Europe sont disposés à agréer droit d'exportation de la soie soit renoncée; tous tion de M. Sienkewitz fait de la bonne disposition générale du Gouverne-M. Hachisuka. sontenue, le Gouvernenemet faire, les autres pays pouvant faire Mon Gouvernement est très satisdemandant Si cette proposition Japonais l'abolition du

M. Jules Ferry. Il n'est cependant pas étonnant

est notre grande industrie. pouvant causer le renchérissement de l'article étant une matière première importante et ses droits que nous avions formulé cette demande, la soie qui

jusqu'à abandonner j'ai reçu, il est anssi dit: "dans le cas que la prendra en considération."_ question sera soulevée, le Gouvernement Japonais des propositions, et si ouverte les autres plénipotentiaires pourront faire veuille bien faire renoncer la question au moins Gouvernement Français ne pourra pas complètement M. Hachisuka. conférence; une la question, Dans l'instruction télégraphique dans cette occasion la que fois Votre la conférence Excellence

sous dez; mais pourquoi tenez vonez vous tant à cela dépendra de l'équivalent et surtout de la conmais nous ne pouvons pas nous lier dès maintenant; K une forme quelconque, on pourroit renoncer; Jules Ferry. je pourrai Si nous trouvons un équivalent faire comme vous deman-

M. Hachisuka. Mon Gouvernement y tient énor-

> tenue an moins avant même la conférence. ment tient à ce que la question ne soit pas mainsoulever la question; de toute façon mon Gouverneaura un avantage ne satisfont pas la France, je suis sûr qu'il y en la conférence ouverte si les concessions mément pour éviter des altérations dans le tarif; Sienkiewicz renoncera à la question; et une fois mon avis personnel, de toute si vous voulez façon, on générales bien, pourrait X.

cela. M. Jules Ferry. Je comprends; je pourrai faire

verra s'il y a lieu de soulever la question." ne le trouverait pas le représentant de la France sous une forme quelconque; et dans le cas á M. Sienkiewicz disant que "la question sera bien envoyer une instruction modifiée par télégraphe férence ouverte on tâchera de trouver un équivalent × Hachisuka. jusqu'à la conférence et une Votre Excellence voudra-t-elle fois la

M. Jules Ferry. Oui, je ferai cela.

dans d'autres Z. Hachisuka. vuestions dans Si vous trouvez Pordreun équivalent commercial,

Gouvernement Japonais. vous ne demanderez pas mieux de contenter le

M. Jules Ferry. Oui, parfaitement.

télégraphe. Excellence Excellence n'envoie Votre instruction; ou si disposition à mon gouvernement avant que Votre mieux que je télégraphie d'abord Votre bienveillante M. Hachisuka. veut Votre Excellence trouverait-t-elle l'envoyer dès maintenant Votre

M. Jules Ferry. Je le ferai dès maintenant

明治主宪月十三日 蜂須賀駐佛公使宛井上外務卿ヨリ

三八

絹輸出稅廢止ニ關スル件

附屬書 (絹輸出税廢止ニ關スル件) 十七年七月一日發蜂須賀公使宛往電

Ξ 十七年七月十日發蜂須賀公使宛往電 十七年八月十一日發蜂須賀公使宛往電

機密信 第廿七號

蜂須賀全權公使殿

井上外務卿時代

井 上 外 豥 卿

> 矢張其一部ヲ動カス時ハ其弊害ハ輸入稅ヲ變換スルト敢テ 目ハ各國ノ利益ヲ調合シ各自ノ護與ヲ以テ僅ニ協同ヲ得タ 元來我政府ニ於テ各國ヲシテ豫議會擬定ノ稅目ヲ其儘採用 逐一領悉御配慮ノ段深察致候然處七月十八日ノ貴信ニ據 n ヲ全ク拋棄スル事能ハサルトキハ先ツ會議ノ開クルマテ之 述被成候趣又同月廿五日ノ貴信ヲ見レハ佛政府ニ於テ右議 サル時ハ他各國ヨリモ請求修正ノ說等起リ候哉モ難計旨演 七月十八日丼廿五日ノ內信接到條約改正事件二付其國外務 テ從前實施ノ通リ之ヲ動カササル事ニ發議致置候ニ付テハ 之候又輸入稅ノミ獨リ然ルニアラス輸出稅モ亦預議會ニ於 多ノ時日ト勞力ヲ費スニアラサレハ其完結ヲ得難キ故ニ有 セシメントスルハ先般差進候覺書中ニモ記載有之通元是稅 ヲ拋棄セシメラレ度旨御請求相成候趣ニ有之候 貴官ニハ同卿ニ對シ若シ佛國ニテ右廢稅ノ要求ヲ拋棄セ 者ナレハ若シ其一部ヲ動ス時ハ忽チ全體ニ差響キ更ニ許 ニ御面會相成絹類輸出稅廢止ノ要求ニ對シ御抗論ノ顚末 ハ第一ニハ輸入税額ヲ増加シ第二ニハ其報酬トシテ新港 ナル所ナギ次第ニ有之候加之今般條約改正ノ主眼トスル v

増設及其他ノ讓與ヲ爲シ以テ多少裁判權ヲ收復シ治外法權

> 議中ニ於テモ佛公使ヨリ廢稅ノ議ヲ論出セサル時ハ英獨其 改正ノ成否ニ付テ緊要ノ關係アル為メニ有之候 破却スルニ至ルノ憂アル儀ハ前條陳述ノ理由ニテ御明解相 議ヲ拋棄セラレ度ト説カレタル事ト被存候申迄モ無之英獨 説等起り候哉モ難計ト曰ハレ或ハ會議ノ開クルマテ廢稅ノ 他ノ公使モ各其要求ヲ提出スルノ寸隙ヲ得サルカ故ニ條約 ノ議起ルヲ恐ル、ノミノ故ヲ以テ一時佛國ノ要求ヲ撤去セ 去セシメントスルハ雷ニ開議前ニ於テ他ノ諸外國ヨリ要求 成度候右ノ事情ニ付テハ拙者ノ佛國ヲシテ其廢稅ノ議ヲ撤 ヲ表シタル諸國モ亦同然ノ儀ニ有之遂ニ條約改正ノ基礎ヲ ルハ必然ニシテ米魯其他旣ニ預議會擬定ノ稅目ニ對シ同意 テ愈廢稅ノ議ヲ固執スル時ハ兩國ニテモ各其要求ヲ提出ス 兩公使ハ旣ニ前陳ノ如キ訓令ヲ所特致居候ニ付テハ佛國ニ 之候處爾來ノ電信幷今般ノ内信ニ據レハ拙者電報ノ意味御 シメントスルカ如キ一朝ノ姑息ニ出テタル者ニ無之右ハ開 了解無之ニ付佛國外務卿 ニ当シ或ハ他各國ヨリ請求修正ノ

相成度切望ニ堪エス候尤絹類輸出稅廢止ノ儀ハ我闋製産者ニ其國外務卿ニ御面會相成我政府ノ要望貫徹致候樣御盡力依之爲念七月以來貴官ト往復ノ電信差進候間御熟閱ノ上更

註 1 夫々三一六及三一七文書ナルニ付参照

モ附屬書三之ガータルベシ3「七月以來貴官ト往復ノ電信」ナルモノ見當ラズ尤2七月一日及十日附外務卿訓電ハ夫々附屬書一及二

竹選書一

(絹輸出税廢止ニ關ヌル件) 十七年七月一日發蜂須賀公使宛往電

Hachisuka,

modified as follows. urgent desire therefore the reasons Impossible to the Minister for Foreign Affairs our I telegraphed 24 ultimo. to to have accept the iŧ withdrawn conditional clause for or Represent at least

France would ask (not demand conditonally)

abolition of export duty on silk, if other Powers ask any modification of the Tariff agreed to.

Inouye.

註 1六月二十四日往電ニ相當スルモノ見當ラス

附屬書二

Japanese Winister

Petersburg,

name found impossible, being still premature. those of other Powers. any modifications in tariff as agreed to. he finds other Representatives in Conference ask announce claim of the condition in case only when French Minister in Japan so modified as he shall that is, if entire withdrawal of that condition be To Hachisuka. here amount of the tone of French instructions similar I meant just as you understood; try to It is not possible now to general concessions have instructions to This will

Inouye.

附屬書三

(絹輸出稅廢止ニ關スル件) 十七年八月十一日發蜂須賀公使宛往電

Hachisuka,

still insisting on the abolition of export duty French Minister replied to my despatch of 4th no

withdrawal of the French proposition even before means to prevail upon to obtain consent any thing but satisfaction. and no other representative has as yet expressed prepared to accept the land, Germany, Russia, America, Spain, all are favour of Japan. You may also tell him that Englast year the initiative step to turn the event in cerned. Remind him of the fact that she had taken rably progressing so far as other Powers are conin the pending negotiation which is now so favobably unwillingly, the position of an obstructionist tulation inadvisability for France to assume, prothings, try and convince him by diplomatic exposdum from the memorandum can be brought to the knowledge soon as you receive the copy of my memoranfor Foreign Affairs and, Aoki or Komatsubara, take it to memorandum as the basis If you can find among to other the

> of the French Government, of course the better Inouye.

明治七宪月十二日 井蜂 上須 外賀 務駐 卵佛宛公

帝國政府ノ覺書受領ノ件

税云々ニ付テモ右兩氏へ懇々相話殊ニクラブレ 長クラブレー氏面會同樣委曲相話總テ承知ニ相成候絹輸出 速外務卿へ通知可相成等ニ返答有之候又昨十一日ハ商務局 御趣意研究一昨十日佛外務卿請ケ日ニ付可相越考居候處先 最御同意奉召候依テ過ル六日歸巴後猶篤トメモランダムノ 協議ヲ遂ケ候事ニ御座候花房公使ニモ寬々面會將來萬事篤 日ヨリ田舎ニ在リ未タ歸巴無之ニ付止ヲ不得政務局長ビヨ 信尊書モ難有落手拜讀賞ニ尊意ノ有ル所明瞭ト相成且大體 リ閣下ノ御傳意難有悉皆拜承メモランダムモ篤ト熟覽且私 居靑木公使ニハ往來ニ立寄面會メモランダム一條ニ付篤ト 拜啓益御清安奉賀候偖ハ小官過便申進候通獨露兩 氏ニ面會篤トメモランダムノ趣意相話委曲承知ニ相成早 相談致シ體候歸路伯林ニ立寄候節ハ丁度小松原到着致居 ー氏へハ最 國

盡力ノ 悟ニ御座候マルシャルニモ別テ勉勵盡力候樣御申越ノ處當 時休暇差許中スパーニ逗留依テ早速メモランダム寫ハ相示 ンダムニテ全ク分明致シ候ニ付小官畢生ノ力ヲ竭シ可申覺 瞭ニ尊意ノ在ル所ヲ了解スルニ苦シミ居候處此度ノメモラ 及置御返電相待居候小官モ是迄ハ何分電報上ニテ極メテ明 且最要點ニ付今便公信ニテ差進候寫ノ通電報ヲ以御尋問ニ 條款ノ事ハ尊意如何程迄ヲ御望ミ有之候哉一點ノ疑團有之 其次第二寄り電信ヲ以テ追々御問合致候哉モ難計候小生ニ 篤ト熟讀研究相成候筈猶不審ノ康ハ尋吳候樣申入置候ニ付 便ニテ漸昨日クラブレー氏ト談話ノ席へ到着故同氏是ヨリ シ置候得共同人近頃何分病氣勝ニ有之殊ニ筆紙ニ盡シ難キ ハ誠ニ明瞭ニ拜承先以卽今御問合致候義ハ無之乍去最惠國 候心得ニ御座候當佛政府へハ我メモランダム七月二十六日 先ツ書翰 方ノ意ハ十分貫徹致シ候乍去其節ノ即答ニテハ未ダ承諾 ハ中々不申聞孰レ近日外務卿歸巴次第面會ヲ乞ヒ懇々申 ij 有之先ツ即今ノ處佛政府トノ談判ハ小官一身ニ引受 心得ニ御座候一兩日中白國ヲ始メ他兼任國政府へ 應接ノ手續有之候ニ付最委敷尊意ノ有ル所相話置當 ラ以メモランダム云々申込候心得ニ付其上 ーテ

> モン氏へ篤ト爲相話候心算ニ有之候 シャルラ近邊ニモ候ニ付ブリ ュッ セ N 府 へ遣 シラ べ

(以下省略)

明治十七年九月十二日 巴府ヨリ

茂 詔 頓首

井上外務卿閣下

(追申省略)

註 1 一一六文書參看

2「電報ヲ以御尋問ニ及」トアル右電信寫見當ラズ

三〇 明治七第月十八日 上須賀 卵宛使ョ

絹輸出稅廢止交渉ニ關スル件

決シテ御訓令ニ相違ノ義佛政府へ申入候様ニハ存シ不申候 官ョリ右一條ニ付先達テ佛外務卿へ申入方何分小官御趣意 第一絹稅廢止ノ事ヲ佛政府主張致シ候時ハ他各國 取遠へ候哉ニ御考ノ趣御申越甚恐縮存候下去小官ニ於テハ 我讓與ノ手續云々兩度御電報ノ趣委曲敬承致シ候然ル處小 過ル十二日內啓拜呈以來絹輸出稅云々佛政府へ中入方且彼 ョリ 七稅

示シ候モノニ御座候 が鳴へ申入候へ則最初六月廿五日落手致シ候モノニデ折角他各國ニ於テハ異議ナク今日組立成就致 が候モノニデ折角他各國ニ於テハ異議ナク今日組立成就致 が 保モノニデ折角他各國ニ於テハ異議ナク今日組立成就 が 明ニ付種ペノ修正説ヲ提出スルノ恐レ有リト小官ヨリ佛外

東京議 事ニ中入候事ニ御座候 正説モ提出無之時ハ勿論佛政府ニ於テ右發議ハ提出セザ **後議ヲ差引能ハザルニ於テハ東京議會開設迄右發議ヲ取除** 佛政府ヨリ 候ハ則七月一日同十日ノ兩貴電信ニ有之如ク他各國ニ於テ 候様希望スルトノ訓令ヲ得タクト小官ヨリ佛外務卿へ申入 能ハザルニ於テハ此度開カントスル東京議會ノ節迄取除 第二者シ佛政府ニ於テ絹 キ候様有之度ト佛政府へ申入候事ニテ他各國ニ於テーノ修 | 會ニテ税則ニ付或ル修正説ヲ提出スル如キ場合ニハ モ右發議ヲ提出シ得ルトノ御訓令ヲ奉シ全ク右 税廢止ノ發議ヲ全ク差引キ 取消 N + ス

ノコンヂションニ絹税廢止ノ事ヲ發議セラレ候事我政府ノー氏へ面會ノ節篤ト申入置有之候其要點ハ税則ヲ承諾スル偖右一條ニ付テハ過日メモランダム拜受ビヨー氏クラブレ

府ヲ發シ翌十五日當地へ到着當政府ニ談話爲相濟候上來ル 之メモランダムノ事モ篤ト當政府へ相話置度過ル 佛外務卿本月中ハ各國大使公使ヲ請ケ不甲ト 變進退取極可中覺悟ニ御座候 可成速ニ面會致シ度即今聞合中ニ御座候其次第ニ寄臨機應 尊察奉希候尤佛外務卿萬一長々不在ニ候得ハ旅行先ニテモ ニテ何分速ニ面會ノ術無之彼是ニテ當地迄旅行候事情宜御 ヲモ與へ不申テハ決答ヲ得難キ事ニ有之且佛外務卿ハ不在 於テモ我メモランダム落手已來未ダ日數無之研究熟覽ノ暇 御不審モ可有之存候得共纔ニ十日間程ノ逗留殊ニ佛政府 ラ巴府ニ止ラズ如何ナル必要アツテ瑞西へ越シタル歟ト 廿三日頃歸巴ノ心第ニ御座候或ハ斯ル肝要ノ御用アリナガ 依テ瑞西國へハ此節一寸ナリトモ顏出シ致シ置候覺悟 ノ事報知有之 十四日巴 三有 1 =

ル 過ル十三日佛白西葡瑞各政府へ書翰ヲ以我メモランダムヲ基礎トシテ商議ヲ開ク事丼ニコンヴェンションニングムヲ基礎トシテ商議ヲ開ク事丼ニコンヴェンションニン候様希望スル旨申入置候

明治十七年九月十八日石件《申上置废草》中上留候也

瑞西ベルヌ府

部

外務卿閣下

先ツ其儘ニテ白眼合ノ姿此節ノ新聞ニハ仲裁云々等相見 **等ヲ公告スル意ハ決テ無之トノ事ニ有之乍去石炭** 上候通り佛政府ハ全ク切迫ノ景況ニ立至ラザ へ戰爭ヲ公報シタリトハ實ニ意外ノ事ニテ其舉動何 分速ニ結局ヲ見難キ事歟ト祭セラレ候清政府ヨリ ル異聞無ク日 候得共佛ハ容易ニ承諾致間敷トノ事ニ有之先ツ差シタ ジ難キ事ニ御座候過ル十一日附ニテ相呈シ候電報 々清佛關係ハ一時 井上外務卿時代 一々經過致候得共此先キ畢竟如何可相成哉何 全ク戦争ニ 對佛交涉 可相成形況御座候處其後 i 限リ 我政府 ハ 中 1 戰 車 題 Ŧ

2 二一八附屬書一、二電信参照 1 「六月廿五日落手致シ候貴電信」ナルモノ見當ラズ

絹輸出稅廢止ニ關スル件

附屬書 十月一日(?)佛外務卿談話書

出稅廢止 生糸税ノ廢止佛國ノ利益ニ關スル重大ノ件ニ付是非 文談話書差出シ候間御熟覽被下度奉存候到底佛政府 決答ニ候間其旨昨日早速別紙寫ノ通リ及電稟候猶又別紙佛 得ルヲ要ス若シ日 昨水曜日ヲ以テ面會條約改正事件懇々談話ニ及候上生糸輸 拜啓當國外務卿 Jules Ferry 氏去ル土曜日歸巴致 是ト別件ニ ノ發議取消シ方再三申込候得共何分承諾難致旨ノ ス 本政府ニ於テ新税目ト併論スル N ハ承知ス べ シ然ルニ於テハ 別 が段ノ約束 ヲ欲セサ シ炭間 共之ヲ ノ意 25

中稟候也開設前ニ之ヲ締結スルヲ要ストノ申分ニ有之候ニ付此段及別設前ニ之ヲ締結スルヲ要ストノ申分ニ有之候ニ付此段及ヲ以テ生糸輸出稅ヲ廢止スル事要用ナリ且該約束ハ會議ノ

明治十七年十月三日

在佛特命全權公使 蜂 須 賀 茂 韶

外務卿井上馨殿

極深縮存候得共何分致シ方無之御返電ヲ相待居候事ニ御を候也

註 1十月二日蜂須賀公使發ノ電信見當ラズ

附屬書

Japonais nous *a promis* de l'abolir ; mais il faudrait arriver à une entente.

l'application des nos concessions générales telles que le cabotage, de l'accord de la conférence de 1882, nous proposons de cette nature nous crée des embarras conside. France insiste sur cette question, cela amènérait qua non de l'acceptation du nouveau tarif. Si la maintient cette proposition comme condition autorités locales et de la police etc.; et/les pays etrangers consentent à leur tour à à accepter le nouveau tarif sans aucune modificarables, parceque tous les autres pays sont disposé l'ensemble les nations étrangères, une proposition Comme nous faisons des concessions générales pour une perturbation à la voie de l'agréement du tarif. M. Hachisuka.—Je ports Puisqu'on accepte le tarif tel qu'il est résulte Excellence de cette question. accessibles, l'extension des règlement d'administration des voulais justement parler sur La France passeports, les sujets sine

M. Jules Ferry.—Si les autres gouvernements ne

十七年十月一日(?)佛外務卿談話書

Procès-verbal de l'entrevue entre S. E. M. Jules Ferry, Ministre des Affaires Etran-

gères de France et S. E. M. Hachisuka Ministre du Japon à Paris.

M. Hachisuka.—Mon gouvernement a envoyé à tous les représentants des puisances étrangères à Tokio, un mémorandum en réponse au memorandum présenté par S. E. M. Plunket, Ministre d'Angleterre à Tokio. Ce mémorandum est destiné à tous les pays; il doit être parvenu à Votre Excellence par les soins de S. E. M. Sienkiewicz, Ministre de France au Japon.

M. Julees Ferry.—Je l'ai reçu et j'en ai pris connaisance; je vois que vous demandez dès maintenant une abolition partielle de la jurisdiction consulaire. Est-ce que les concessions que vous donnez, équivalant à celles que demandez? Pour nous il y a toujours cette question du droit d'exportation sur la soie; il n'y a pas entre nous de division à proprement parler, parceque le gouvernement

demandent pas de modifications au nouveau tarif, il fauten en conclure qu'ils n'y ont pas intérêt. Pour nous la question du droit d'exportation de la soie est une question capitale. Dans l'intérêt des Français (acheteurs) aussi bien que dans celui des Japonais (producteurs), ce serait un intérêt économique d'en abolir les droits d'exportation; s'agit-il des intérêts financiers (fiscaux), je ne crois pas non plus cette abolition comme contraire à ces intérêts; car si la force productive de la soie est augmenté par l'abolition de ses droits d'exportation, l'importation augmentrait dans la même mesure et cela donnerait lieu à l'augmentation des recettes des droits d'importation.

M. Hachisuka.—Il est possible que le gouvernement Japonais pense comme Votre Excellence; mais là n'est pas la question; je prie Votre Ecellence de se mettre dans notre situation; tous les pays acceptent, excepté la France; est-ce-que Votre Excellence ne se trouverait pas dans de grands embarras; je ne parle pas des discussions économiques. Mon gouvernement demande à Votre Excellence de *retirer*

discretion; est-ce qu'elle veut bien y consentir, cette proposition et de laisser la question à notre

Votre demande. M. Jules Ferry.-Non, je ne puis pas accepter

d'exportation sur la soie. De toute façon je dois notre discration la question de l'abolition du droit tarif et de ne pas la rendre conditionnelle. tion c. à. d. de ne pas la lier à l'acceptation du demander à retrait de la proposition française et de laisser à se bornent à faire des démarches pour obtenir M. Hachisuka.—Les instructions que j'ai reçues Votre Excellence de séparer la ques-1e

Japonais veut séparer la question, je la dégagerai; est d'arriver à un résultat. Si le gouvernement M. Jules Ferry.—La forme m'est égale, l'essentiel alors il faudrait une promesse formelle de

et dégager la question de la condition de l'accepta-Japonais me demande de retirer notre proposition; tion du nouveau tarif; mais alors il faut un en-Donc voici ma réponse: ne puis pas l'accepter. Mais je pourrai séparer "Le gouvernement

> dans un certain laps de temps. de la conférence) d'abolir ce gagement formel et préalable (avant les travaux réponse avant la prochain entrevue." référer à votre gouvernement et d'en recevoir droit d'exportation Je vous prie d'en la

aujour-d'hui et lui demandrai la réponse. à mon gouvernement ce dont nous avons M. Hachisuka.—Je m'empresserai de télégraphier

(fin)

明治十七年十月三日 井上外務卿宛蜂須賀駐佛公使ョリ

絹輸出稅廢止ニ關スル件

場合ノ外ハ reserve 有之度トノ御訓令委曲拜承其意ヲ以過 能ハサルニ於テハ英獨同樣 reserve 致シ置會議開設ノ上場 日當外務卿へ中入候處本書ニモ申入候通ノ返答振ニテ他 合ニ應シ發議有之度尤他國ニモ modification ヲ提出スル 有之候通り佛政府ニ於テ萬一全ク生糸稅云々ノ發議ヲ取消 副内啓九月十二日落手致シ候二通ノ貴電信 ハ拘ラス即今此生糸稅廢止ヲ約束致シ度トノ論確然主張セ = モ猶又御中越

別紙談話書此點ヲ十分盡サドル哉ノ恐レ御座候ニ付念ノ爲 期限ヲ定廢止スベシトノ約束ヲ欲スルトノ意ニ御座候或ハ 別段ノ約東ヲ卽今取結ヒ度トノ申聞ニ御座候其意ハ則此先 新税目ヲ承諾難相成トノ發議ハ實ニ我政府ノ困難スル所ナ ル趣繰返シ中入候處其段ハ篤ト了承致吳ラレ生糸稅問題ハ 合故此問題ヲ「コンヂショネル」トシテナラデハ佛ニ於テ **煲二申上置候也** ル事ニ有之乍去今日他國ニハ異議ナク新稅目承諾ノ場

十七年十月三日

務卿閣下

申入置候事二御座候間此段平宜御承知可被下候也 主眼ナル趣其他小松原ヲ以御申越ノ條中至要ノ點ハ夫々 候得共我政府ニ於テ此度ノ改正ハ稅目貿易問題ノミオラ ランダム一條ニ付外務卿へ申入候个條ヲ盡ク相掲ケ無之 猶々談話書ハ生糸税一件ヲ重モンシテ認メ候事故我メモ ス第一法權問題ニ付其幾部分ノ改正ヲ要スル事我政府

1「九月十二日落手致シ倏二通ノ貴電信」ナルモノ見

2「別紙談訊書」ハ前號文書附屬書トシテ收載セル

非上外務卿時代 對佛交涉

明治七年月十七日 井上外務卿宛蜂須賀駐佛公使ョリ

絹輸出稅廢止ニ關スル件

同九日内啓信ニテ申上候通ニ有之其後猶右御返電無之ニ付 之二付本月八日當佛外務卿へ面會ノ節ハ輕ク申入置候段 内啓偖ハ生糸輸出税一條ニ付本月二日呈電致候處御返電無 過ル十五日當外務卿受日ニハ面會不致候 >

迄モ不同意又本邦政府ニテモ決テ承諾無之ヲ望ムトノ事ニ = 偖此問題ニ付テハ貴君ニテ御不同意ナル而巳ナラズ英政府 察致候素ヨリ確然タル事ハ申上難ク候得共漏聞 佛政府ニ於テニク右發議ヲ取消候樣有之度段申入候哉ニ推 當佛外務卿へ同氏面會ノ節右生糸稅一條ニ付英國大不同意 氏夏中ヨリ休暇在英相成居候處一昨々十四日歸巴或ハ近日 有之由漏聞致シ候當巴府駐在英大使ロールド、ライ 廢止ノ要求發議ハ全ク同國一已ノ利益上ヨリ出ル事ニ付飽 テハ此度ノ條約重修ニ於テハ何レノ國ニモセヨー國ノ利益 ト成ル事ニ付修正説ハ提出スヘカラサル筈佛政府ノ生糸稅 於テモ不同意ト相見申候元來ブランケツト氏ノ議論ニ於 ノ儘此段御 ・ヲンス

参考ノ爲メ申上置候

關係アル 通知ス 所多々有之然ルニ佛政府ノ利益ハ全ク僅々ニ止マルト 畢竟約セバ英獨ハ此度ノ我メモランダムヲ承諾スルモ得 税目ト 難キ事ニ付佛政府へ我政府ヨリ與フル讓與ノ點不十分ニテ 其故ハ此條約重修問題ハ當國議院ノ承諾ヲ得サレハ締結 我政府生糸稅廢止ヲ今日約束スルニ於テハ是ヲ當國議院 已ヲ申ト ノ事等ノ如キ英獨同様ノインテレスト無之止ヲ得ザレ ハ議院ノ承諾ヲ難得事ニ有之沿海貿易ノ事内地旅行券制度 リ飽迄モ前議ヲ主張スル様相聞全ク佛政府ニ於テ無理而 ルニ佛政府 ルハ他ノ問題トハ 引離シ別段ノ約東ニテナリトモ是非佛國ノ利益ニ大 題サ、ル事トナスモ我ガ望ナラバ爲シ得ベキト 生糸税廢止ハ我政府ノ承諾ヲ得度トノ意嚮ニ有之 小官面會ノ節當外務卿ョリ談話有之候事ニ有之前 モ考へ難ク候尤新税目 點甲上落少候二付爰二申上候 ノ情質ヲ察ス 全ク特別ト為シ委員內會ニ示シ決 レハ又不得 リョリ 引離シ別段ノ約東ニテ 止 モ ノ有之様相考候 ・ノ岩 ハ新 ル ノ \sim

銀ハ過便差出候本月八日小官ト當外務卿トノ談話書中ニ有又我メモランダムニ付テハ別段佛ニ於テ意見ハ無之トノロ

日 右申上度內啓如此御座候 京會議ニテ談判 ダムノ通り承諾ヲ得候事且我メモランダムヲ基礎ト 之通三付此生糸稅 本佛公使へ電 訓ノ事ハ速ニ ノ委任丼ニコンヴェンション調印ノ事ヲ在 ラ問 題サヘ片付 也 相運可申ト小官ハ相 候得ハ他事ハ我 信 メ シ申 シテ東 æ ラ 候

丁七年十月十七日

巴里ヨリ

茂韶

外務卿閣下

(追申省略)

誈

内啓信ナルモノト共ニ見當ラズ2十月八日蜂須賀公使ト佛外務卿に一談話書及翌九日1十月二日蜂須賀公使後外務卿宛電報見當ラス

|二||四||明治七年月三十日||井上外務卿宛|

絹輸出稅廢止ニ關スル件

度小官ョリ佛外務卿へ申入候事御訓令ヲ誤解セリトノ事ト來示ノ大趣意ハ貴地會議開設迄絹類廢稅ノ後議ヲ拋棄致吳出稅一件ニ付御回答ハ今便ノ機密信ヲ以申上候通ニ有之御内啓偖ハ九月十三日附機密信第廿七號ヲ以御來示ノ絹類輸

事ヲ御希望有之事ニ相見へ約シテ申セバ他ノ政府ニー歩ヲ 獨同様他ノ政府ヨリ要求ヲ提出後ナラデハ提議ヲ爲サヽル 府ハ随意ニ要求ヲ提出セラル、如ク相見へ而シテ佛國モ英 由レハ或ハ英獨ハ他ノ政府ニ先ダチ要求ヲ提出セズ他ノ政 爲サシムベキ事ニ修正爲致度希望ニ有之候」トノ御文義 言爰ニ申上度義ハ此度ノ第廿七號機密信申ニモ御掲載有之 御趣意ニ有之間敷拜察致シ候得共然ルニ於テハ英獨ノ例 二相考候ヨリ前顯ノ如キ談判ニ至リ候事ニ御座候而シテ**ー** スルトモ或ハセザルト 差出可相成事等ハ預知難致時ニ有之隨テ佛外務卿ノ中ス 「佛公使ニ附與セル訓令 政府 **金體讓與ノ如何ヲ知ラズシテハ此絹類一件ノ發議ヲ拋棄** アラ各國 他ノ ヲ要スト申趣意ニ相成候乍去如此見解ハ果シテ貴君 丰 ヨリ要求ヲ提出スルニ於テハ佛國モ亦同様ノ提議ヲ ኑ 相成事哉ト想察貴君ョ 政府ヨリ要求ラ提出セザルニ於テハ提議ヲ爲サ 同 候然ルニ右小官 三望マン敷是則單ニーノ要求ヲモ然サ、 モ決答難致トノ意ハ無理ナラザル ノ旨意ヲ變換シ英獨ノ例ニ由リ他 相成如何 3 ŋ. リ我メモランダムヲ各國 談判致候時 ナ ν = v 政府モ \sim 會 所 ---事 = ヲ

海ノ量ヲ以御聽容所希ニ御座候ニ有之每度甚僣越ナガラー應氣付ノ儘ヲ無腹藏甲上候段江ニの一の一人が子提議セサル時ハ則提議ナキニ歸スルハ勿論

傲ヒ難シト申聞候 申スニハ英獨ハ他ニ即今要求ヲ提出ス 再三申入候事ニ御座候且外務卿へモ申入候得 ョり如此訓令ヲ下シタルモノナ (欄外)但シ商務局長クラブレ ルヘシ 1 氏 \sim 佛 ル如キ問題ナキ ハ此ノ訓令ノ 25 何 日共同卿ノ 分此 例 =

遣候事 題ハ此度ノ我メモランダムヲ基礎ト 事御決答無之内ハ此度ノ我メモランダムヲ基礎ト 知シ豫メ内約ヲ即今ヨリ致置度佛政府ノ趣意ニ有之依テ此 會議御開設前ニ彌何時之ヲ廢スヘシトノ我政府 致シ候通り且其後郵便ニテモ申禀致候通り E テ商議 無關係ノモノトシ候事ハ佛政府ニテ必承諾可致乍去貴地 ンヴェンショ ルニ右申禀ハ旣往ニ屬シ本月二日小官ヨリ電信2 == モ相運ヒ中間敷ト スヘシ 承致シ ンニ ŀ 度相待居候事 ノ佛政府ヨリ在日本佛公使へノ訓令隨 調印 ノ全權ヲ與フル命令等電信ニテ申 心配致シ候間何卒右御決答 = シテ重修スヘキ條約 、此絹類 ノ決心ヲ承 ラ以陳 シ 輸出稅問 テ貴地 Ħ テ =

右條々尊覽ヲ奉願候也

十七年十月三十日

巴里 3

1)

韶 拜

(追申省略) 閣

1 三一八文書ナルニ付参照

2本電綴込簿中見當ラズ

==

三五 明治七年月三十日 井 蜂 須 賀 が務卿宛は駐佛公使ヨリ

絹輸出稅廢止要求ニ關スル件

本年九月十三日機第二十七號ヲ以テ佛國ヨリ絹類輸出稅廢 御報道申上置候事ニテ充分誤解無之御訓令通リニ當國政府 訓令ノ意旨ヲ了解無之トニ有之候得共之レハ小官ヨリ追々 止要求ノ義ニ付御來示ノ趣旨夫々了承致シ候小官ニ於テ御 へ申込候事旣ニ御承知相成候事ト存候得共爲念左ニ說明致 第六十四號 十二月十二日到

御來示中「七月十八日ノ貴信二依レハ貴官ニハ同卿(佛

佛國ヨリ絹類輸出稅廢止ノ議ヲ提出スルトキハ折角擬定 la même chose ト有之右ノ意味タル「他ノ政府ハ皆承知 pourra plus se faire, les autres pays pouvant faire barrassé et craindrait beaucoup que l'accord ne est soutenue, le gouvernement Japonais serait emle tarif sans aucune altération. Si cette proposition les gouvernements d'Europe sont disposés à agréer ニ至ルトノ趣旨ニ相叶候事ニ有之候此點ハ外務卿へ面會前 税額ヲ承諾致居候英獨其他ニ於テモ同様ノ議題ヲ論出スル 候」ト有之即チ御來示ノ通リニテ右演述ハ全ク御訓令通 國外務卿)ニ對シ若シ佛國ニテ右廢稅ノ要求ヲ拋棄セ ル哉モ不被計其時ハ旣ニ出來致居候一致モ爲メニ破却セラ ダ迷惑ナリ何トナレバ他ノ國モ佛國ト同様ノ請求ヲ提出ス シタリ然ルニ佛國ノ要求ヲ維持セラル、時ハ日不政府ハ甚 トキハ他各國ョ 有之候且七月十六日小官ト 外務卿ト 面會報告書中 tous 當外務省商務局長クラヴリー氏ニモ度々重復申込置候事 、ヲ以テナリ」トノ事ニ有之候素ヨリ實地ノ掛合ニ於 一ツ事ヲ再三申述候事ニ有之候得共報告書ニハ其要點ヲ リモ 請求修正ノ說等起リ候哉モ難計申込 ァ IJ

ゲ候事ニ有之候

prendra en considération. トニ有之其意味タル「若シ 譲ヲ提出スル事アル哉モ不被計若シ此ノ場合ニ於テ佛國ヨ 棄セラレ度一旦會議相開キ候上ニテ他ノ全權公使ニ於テ發 拋棄スル事能ハザルトキハ會議ノ開クル迄ハ廢稅ノ議ヲ拋 tion sera soulevée, le gouvernement Japonais la des propositions et si dans cette occasion la quesouverte les autres plenipotentiaires pourront faire moins jusqu'à la conférence; une fois la conférence 御報道ニ及候事ノ全體ヲ能ク御照考被下候ハヾ明瞭相成ル 先ヅ會議ノ開クル迄之レヲ拋棄セラレ度」請求致候故御訓 on pourrait renoncer, mais trouvons un équivalent sous une forme quelconque ベク存候報告書中ニモ掲置候通リ又再三商務局長クラヴリ 命ニ相違致候様御來示ニ候得其此ハ全ク貴官ニ於テ小官ノ 、其要求ヲ提出スルトキハ之レヲ考フヘシ」トニ有之候右 氏トモ掛合候通 ク成り行き候八全ク佛外務卿ノ云フ如ク 「佛政府ニ於テ右議ヲ全ク拋棄スル事能ハザルトキ faire renoncer nous ne la question au pouvons Si nous pas

s'il y a lieu de soulevera la question. 「開議迄ハ拋棄 trouverait pas, le représentant de la France une forme quelconque, et dans le cas qu'on ouverte on tachera de trouver 事ニテ「開會迄ハ拋棄致吳度開會ノ上ハ勝手ニ申出テ宜シ 如何シテモ佛國ノ要求ヲ提出セザルヲ得ズトノ場合ニ至リ 他ノ利益ヲ發見スル事ヲ勉メ若シ之レヲ發見スル事能 **發議ヲ全ク拋棄スル事能ハズ」トノ次第ナリ然ラバ會議迄** 米ダ如何ナル利益ラ得ル事ナル哉不相分故ニ今ヨリ廢止ノ N nous lier dès maintenant. Cela dépendra de l'équi-スベシ而シテ開會ノ上ハ全體ノ護與モ相分リ jusqu'à la conférence, 判ノ末報告書中ニ記載ノ通リ キ」トノ趣旨ヲ申述タル事ニハ聊カ無之候卽チ右事情ノ談 候ハヾ致方無之トノ事情ヨリ開會迄ハ拋棄ト ハ其儘ニ差置 (laisser de côté) 即チ會議相開キ候上ニテ valent et surtout de la confernce. 未必(七月頃)佛政 利益ヲ發見スルトキハ之レヲ廢止スルヲ得ベシ然レド ニ於テ全體ノ讓與ヲ知ラズ故ニ「他ニ絹類稅廢止ニ代 et, une la question sera retirée un équivalent sous tois la conférence 可申其時ハ絹 ノ事ニ相成候 ハズ Æ ハ

一、其趣旨へ絹類稅廢止又ハ之レニ代リ得ル利益ヲ必ス要 ・テ小官ニ於テ御來示ノ如ク訓令ニ相違シタル掛合ヲ爲シ ・テ小官ニ於テ御來示ノ如ク訓令ニ相違シタル掛合ヲ爲シ ・クル等ノ事聊カ無之候爾來在日本佛公使へ差出サレタル我 ・受書モ佛政府ニ達シ相互讓與ノ全體モ判然致候故猶又佛發 ・受書モ佛政府ニ達シ相互讓與ノ全體モ判然致候故猶又佛發 ・受書モ佛政府ニ達シ相互讓與ノ全體モ判然致候故猶又佛發 ・受書・他政府ニ達シ相互讓與ノ全體・判然致候故猶又佛發 ・以テ申進候通り此問題ヲ全ク別物ニ致シテ相談致シ度トノ 以テ申進候通り此問題ヲ全ク別物ニ致シテ相談致シ度トノ 以テ申進候通り此問題ヲ全ク別物ニ致シテ相談致シ度トノ ・の御來示ノ件既往ニ屬シ候姿ナレトモ誤解ノ廉ニ候事故爲 ・の一應如前及御説明置候

蝶中込置候事ニ有之候.一、此他御注意ノ點ハ旣ニ小官ヨリ再三當外務卿ニ向テ喋

約定トスルセザルノ論及ヒ我覺書ノ悉ク承諾有之哉否ノ處 締結後速ニ日本政府自ラ絹税廢止ヲ實行スル事 密トシテ是非示ス事必要ナルベシトノ事ニ有之且此通知ヲ 候處佛外務卿ハ斯ル場合ニ及ハヽ其通知ヲ書面ヲ以致シ得 承諾致シ吳レ可申哉試問致候事ニ御座候而シテ此通知ハ全 右不取敢申上置候也 決御答電ヲ仰ク事ニ相成リ居リ必四五日中ニハ外務卿ヨリ 談話ニテ兎モ角外務卿ト小官トノ間一己ノ資格ヲ以テ雙方 不相至先ツ今日迄談話書貴覽ニ呈シ申候尤過日ヨリ三度ノ 未夕外務卿手許ニテ取調中ニ有之何分當便結局申上候事ニ ヘキ哉トノ事丼ニ佛議院委員會へハ新條約批准ノ節ニハ機 クロ上ニテ佛外務卿迄申入候事ニ止マル小官ノ素意ニ有之 ハ之ヲ佛政府へ今ヨリ通知スル 小官一己ノ説トシテ浩シ日本政府ニ於テコンヴエンショ 返答可有之筈昨十二日外務卿卜 ノ意見ヲ折衷シ假ニ談話書ヲ作リ之ヲ電信ニテ貴官ノ御裁 |内訓ニ有之依テ小官ニ於テハ御内訓ョリ 調印ノ金權ヲ在日本佛公使へ與へ吳可申哉相尋候樣ト ニ於テハ我覺書ノ个條總テ 談話ノ節口約致シ置候先ハ 一層用心ヲ 1 、決意アラ

gères de France.

十七年十一月十三日

一右回答申進候也

明治十七年十月三十一日

駐佛特命全權公使侯爵 蜂 須 賀 茂 韶

外務卿伯爵井上馨殿

註 1及2夫々三一八、三一六文書參照

三二六 明治七年一早三日 蜂須賀駐佛公使ョ

絹輸出税問題ニ關スル件

□ 十七年十一月十二日佛外務卿談話書□ 十七年十一月六日佛外務卿談話書

茂韶

外務卿閣下

信」ナルモノ見當ラズ 1 20 「過ル七日附旱書」及「十月三十日落掌致候貴電

附屬書

十七年十一月五日佛外務卿談話書 Procès-verbal de l'entrevue de S. E. M. Hachisuka, Ministre du Japon à Paris, avec S. E. M. Jules Ferry, Président du Conseil et Ministre des Affaires Etran-

Paris le 5 novembre 1884.

D'après prendre sur les soies. gouvernement des instructions par voie télégraphique erenement Japonais a du mois d'octobre; que je lui ai adressées tout à fait au commencement à propos de la question de l'abolition des X. Hachisuka.—Je viens de recevoir de ā dépêches question Ce sont des reponses à des dépêches c'est dire à V. E. que le mon en mis sérieuse gouvernement environ 30 considération. jours gouvdroits mon

prendre un engagement séparé d'abolir ces droits à avec la France sur cette abolition. volonté; 4. qu'il ne peut pas prendre un engagement et que tôt ou tard il abolira ces droits de sa propre désire que la question soit laissée à sa discrétion d'apporter de la perturbation dans le tarif; 3. qu'il le faire dans la circonstance actuelle de crainte même de l'abolition; 2. qu'il ne peut cependant pas gouvernement Japonais n'est pas opposé au principe D'après ces deux dépêches, je conclus: amènerait une perturbation au tarif déjà agrée. la bonne nature même de la proposition, mais il ne même d'exprimer à V. E. nos remerciements est profitable aux producteurs japonais, et me charge mande française d'abolir ces droits d'exportation par la poste, S. E. M. Ino-ouyé me dit que la ded'après une dépêche confidentielle que j'ai reçus telle date déterminée d'avance. savoir qu'il ne peut pas accepter la proposition de l'accepter car une telle D'un autre côté, modification que le pour

M. Jules Ferry.—D'après votre exposé, je vois que cela n'avance pas beaucoup.

clusion par le seul fait de l'objection français sur obstruées aujourd'hui au moment même de la confaisons France; toutes les démarches surannées que nous côté tout le monde accepte le tarif, excepté la mulent les demandes de même nature; d'un autre précédent fâcheux pour que les autres pays fornotre habitude d'autonomie tions des circonstances actuelles, cela annulerait abolir un droit d'exportation, outre les considéranous prenons un engagement avec la France pour tive et de notre propre volonté; si donc aujourd'hui tion sur tal article et cela de notre propre initiaplusieurs exemples d'avoir aboli tel droit d'exportacela était de notre autonomie; au tarif de l'exportation, cela est resté comme si question. A présent la question du tarif d'importanous devons avoir une autonomie complète sur cette cela nous entendre avec les puissances étrangères; reglée en principe, comme nous le voulons sans pour tion est le résultat des conventions; mais quant M. Hachisuka.--La question du tarif doit être pour la révision des traités, se et nous avons même cela créerait un

les droits d'exportation des soies. Je suis donc convaincu que le Gouvernement Japonais est absolument opposé à prendre un engagement avec la France sur ce sujet; mais je crois aussi que le Gouvernement Japonais abolira effectivement ces droits après la conclusion de la Convention. Je prie V. E. de vouloir bien discerner la manière de voir de notre gouvernement quant à la question elle-même et les raisons qui le forcent à refuser votre demande.

M. Jules Ferry.—Je comprends parfaitement ce que V. E. me dit; mais est-ce que le Gouvernement Japonais ferait cette abolition à une date déterminée?

M. Hachisuka.—Je crois qu'il le ferait aussitot après la conclusion de la convention mais de sa propre volonté; il ne peut pas accepter de le faire venant de l'initiative étrangère.

M. Jules Ferry.—Je comprends parfaitement; pour moi la question de forme m'est égale; l'essentiel est d'arriver à un résultat; si le Gouvernement Japonais est disposé à abolir ces droits, pourquoi

s'opposerait-t-il à prendre un engagement?

dant quelque temps mais il ne trouve pas de connotre discrétion et que cette abolition soit effectuée désire que la question soit complètement laissée à clusion tout en s'opposant à notre demande.) gagement, il y a loin. tion par nous même à la faire tat reviendrait au même; mais de faire cette abolifait cette abolition de sa propre initiative, le résulment pris avec la France; si mon gouvernement de sa propre volonte et non par suite d'un engageque j'ai déjà dit, à savoir: essentiel; je ne puis que répéter à M. Hachisuka.—C'est justement là qu'est le point (M. Jules Ferry refléchit pen-Mon gouvernement par suite d'un en-

M. Hachisuka.—Je viens d'exposer à V. E. la nature de mes instructions et les effects que j'en déduis; maintenant vu la circonstance, je prierais V. E. de vouloir bien me permetter de lui dire mon opinion purement personnelle.

Je vois que V. E. désire savoir si l'on fera cette abolition donc si mon gouvernement m'autorise à

déclarer verbalement à V. E. qu'il le fera aussitôt que possible après la conclusion de la convention, V. E. serait-elle disporée à accepter *toutes* les choses mentionnées dans notre mémorandum, l'accepter comme bases de negotiations, et à envoyer des pleins pouvoirs de signer la convention à M. Sienkiewicz?

M. Jules Ferry.—L'essentiel est de pouvoir dire aux Chambres que nous avons un *engagement* du Gouvernement Japonais; est-ce que V. E. peut dans ce cas me remetter une note confirmant votre déclaration verbale?

M. Hachisuka.—Cela pourrait peut-être se faire; mais je préviendrais d'avance V. E. que ce ne serait pas un engagement; ce serait une obligation morale; ce serait pour assurer V. E. que l'ablolition es fera aussitôt après la conclusion de la Convention puisqu'elle désirerait le savoir.

M. Jules Ferry.—Est-ce que ce serait tout simplement pour me donner une assurance sans résultat?

M. Hachisuka.—Si je remets à V. E. une note lassurant que le Gouvernement Japonais fera l'aboli-

tion aussitôt après la conclusion de la Convention, cela se *fera* effectivement et le résultat serait le même que s'il y avait un *engagement*. Mais je veux dire à V. E. que cette note ne sera pas d'un caractère *d'engagement*; ce sera une nots qui aura un resultat *effectif*.

M. Jules Ferry.—V. E. cherche une forme pour une note qui aura le résultat d'un engagement, laquelle ne soit pas un engagement, cela me semble fort difficile.

M. Hachisuka.—Maintenant je prierais V. E. de vouloir bien résumer votre désir, pour que je puisse télégraphier clairement et sans erreur à mon gouvernement la substance de notre entretien.

M. Jules Ferry.—Je ne pourrai pas le faire bien; ça serait plutôt V. E. qui vondrait bien le faire.

M. Hachisuka.—Le sens du télégramme à envoyer à S. E. M. Ino-ouyé serait que "le gouvernement français est disposé à faire retirer la proposition présentée par M. Sienkiewicz demandant la suppression des droits d'exportation sur les soies, si mon gouvernement m'autories à faire une déclaration

verbale assurant V. E. que l'abolition de ces droits se fera aussitôt après la conclusion de la Convention, déclaration qui sera confirmée par une note."

Dans le cas que ceci se farait, est-ce que ce serait possible de nous entendre.

M. Jules Ferry.—Je ne puis pas encore dire que c'est possible; mais je ne crois pas que c'est impossible. Pour être clair et sans erreur, V. E. voudrait-elle bien rédiger le télégramme et me le montrer pour nous entendre; demain par exemple?

M. 'Hachisuka.—Alors je rédigerais le télégramme et je viendrais m'entendre avec V. E. Dans le cas que nous arriverons ainsi à une entente, V. E. serait-elle bien disposée à faire retirer la proposition française, à accepter notre mémorandum comme bases de négotiations et à envoyer les pleins pouvoirs de signer la convention à M. Sienkiewicz?

M. Jules Ferry.—Oui, oui, certainement oui!

(fin)

附選書二

井上外務卿時代 對佛交涉 三二六十七年十一月六日佛外務卿談話書

Procès-verbal de l'entrevue de S. E. M. Hachisuka, Ministre du Japon à Paris, avec S. E. M. Jules Ferry, Président du Conseil et Ministre des Affaires Etrangères de France.

Paris le 6 novembre, 1884.

M. Hachisuka.—Voici le projet du télégramme que j'ai rédigé pour être adressé à S. E. M. Inouyé:

Projet.

"J'ai eu une entrevue avec le Ministre des Affaires Etrangères; je lui ai exposé vos instructions; mais il maintient sa demande. Après échange confidentiel de vues, il a été décidé que je vous enverrai le télégramme suivant: Le Gouvernemet Japonais m'autoriserait à déclarer verbalement et confidentiellement au Ministre des Affaires Etrangères de France que l'abolition des droits d'exportation sur les soie sera effectuée par notre propre volonté bientôta a près la conclusion de la convention, et cette déclaration sera confirmée par une note éc-

rite de moi de façon que le Ministre des Affaires Hachisuka." gramme et l'approuve. Ministre télégraphe, au Ministre de France au Japon. et pleins pouvoirs de signer la Convention, memorandum et enverra les instrutcions nécessaires ceptera toutes les propositions indiquées dans notre senté par le Etrangères retirera complétement la demande préceptez cet arrangement, le Ministre des Affaires après la conclusion de la Convention. sur les soies, par résultat l'abolition effective des droits d'exportation elle-meme ne serait pas un engagement; mais son ratification du nouveau traité. lement à la Etrangères des puisse commission des Chambres lors de la Affaires Ministre de notre propre volonté, bientôt le communiquer confidentiel-Répondez immediatement Etrangères France au Japon, ac-Cette déclaration a vu ce télé-Si vous acpar Le

M. Jules Ferry.—(après lecture) Dans cette rédaction, il y a le passage:

"Cette déclaration elle-même ne serait pas un engagement." Je ne comprends pas pourquoi V. E.

veut adopter cette formule; cette formule serait contradictoire car cette déclaration aurait un résultat effectif; elle *engagerait* le Japon à abolir effectivement ses droits d'exportation sur les soies. Ce serait toujours un engagement sous une forme ou sous une autre. Je ne pourrai donc pas accepter cette formule.

pas faire une exception spéciale pour la France. faire; car tout ce que nous négocions, c'est pour spécial avec la France, nous ne pourrons pas le tous les pays d'Europe en général; nous ne pouvons demanderait la savoir. Nous la ferons savoir à la France parce résolution d'abolir ces droits de sa propre volonté gouvernement serait tout simplement de faire savoir gramme. un engagement, je ne pourrai pas envoyer ce télé-M. Hachisuka.—Dans le cas que cela deviendrait V. E. que le Gouvernement Japonais a La déclaration que je proposerai à mon Si c'est un engagement qu'Elle pris la

M. Jules Ferry.—Nous ne demandons pas une exception spéciale pour la France; si le Japon abolit les droits d'exportation sur les soies, tous les pays

en profiteront. Nous n'avons jamais demandé de faire cet engagement uniquement dans l'intérêt de la France. Il y a encore un autre point qui dit:

"le Ministre des Affaires Etrangères acceptera toutes les propositions indiquées dans le memorandum." Je crois que nous pouvons accepter les principaux points mais pas toutes les propositions indiquées dans le mémorandum. V. E. voudrait-elle bien me laisser ce projet; j'examinerai ces deux points et je vous en donnerai réponse.

M. Hachisuka.—Parfaitement. Je répèterai encore à V. E. que ce projet n'est qu'un arrangement que nous proposerons pour aboutir à une entente; ce n'est nullement le Gouvernement Japonais qui le propose; nous ne savons donc pas si mon gouvernement l'accepterait ou non.

(fin)

附屬書三

十七年十二月十二月佛外務卿談話書 Procès verbal de l'entrevue de S. E. M. Hachisuka, Ministre du Japon à Paris, avec S. E. M.

Jules Ferry, Président du Conseil et Ministre des Affaires Etrangères de France,

Paris le 12 Novembre 1884.

M. Hachisuka.—Est-ce que V. E. est en mesure de me donner réponse au sujet du projet du télégramme?

M. Jules Ferry.—Il y a cette question de savoir si nous accepterons ou non *tous* les points cités dans votre mémorandum; nous sommes en train de les examiner; donc nous ne pouvons pas encore en parler à V. E.

M. Hachisuka.—Parfaitement. Mais en dehors de la question signalée par V. E., est-ce que V. E. aurait trouvé un accord?

M. Jules Ferry.—Je trouve que la formule disant: "Cette déclaration elle-même ne serait pas un engagement" est contradictoire, mais je crois que nous pourrons accepter une déclaration qui nous ferait savoir l'intention du Gouvernement Japonais d'abolir spontanément les droits d'exportation sur

dans de certains ports, elle nous parait acceptable la juridiction japonaise sur des questions minimes Gouvernement Japonaise soies dans un délai court, déclaration qui lierait à l'éxécuter. Quant à

prochain si Hachisuka.—Alors je reviendrai le mercredi d'ici là je n'aurai pas votre réponse

ment avant le mercredi prochain. Jules Ferry.—Je préviendrai .≺ E. próbable

(fin)

三七 明治士牛二月五日 井上外務卿宛蜂須賀駐佛公使ョリ

絹輸出稅廢止ラ關スル件

附屬書 十七年十二月三日佛外務卿談話書 十七年十二月四日簽蜂須賀公使來電

渡置候 内啓绪ハ絹稅一件ニ付テハ當佛外務卿佛清事件ニ付キ多務 ノ爲メ追々延引相成候處一昨三日面會ノ節兼テ小官ヨリ相

貴官へ相呈スベキ電信草稿ニ對シ外務卿ノ考案ヲ加へ修正 小官へ相示候ニ付 basis of negotiation トシテ我覺書承 諾ノ趣加へ吳度旨中述同卿承諾右相加へ候上別紙寫ノ通電

恐レ是非右ノ手續ヲ履ミ絹稅ノ廢止ノ事ニ付佛國ノ利害ア 申候得共佛政府ハ殊ニ議院ノ委員會ニテ異論ヲ生ズル事ヲ ル事夫々取計可申トノ事ニ御座候何分十分ノ好結果トハ難 度ノ施行ヲ「コンフエレンス」ニ於テ賛成スルノ權ヲ與フ ザル事且我覺書中三四ノ新港ニ於テ外國人ニ適用スベキ制 印ノ全權ヲ與フル事絹稅廢止ノ請求ハ此上主張致スベカラ 事ニ有之候尤右夫々貴君ニテ御承諾ニ於テハ速ニ在日本佛 公使へ訓令ヲ發シ我覺書ヲ基礎トシテ商議ノ事新條約ニ調 政府絹稅廢止ノ企有之段議會々員一同へ御告示有之度トノ 間敷趣ニ候へ共此我政府一己ニテ廢スベキ趣且廢止ハ條約 ニ有之候加之近日御開キ可相成東京コンフエレンスニテ我 新條約批准ノ節佛讓院委員會ニ告示スル事必要ナリトノ事 二内告シ且覺書ニテ小官ヨリ右内告ヲ證シ而シテ之ヲ内密 上條約重修ノ「コンヂション」トシテ佛政府ヨリ請求ハ致 重修決約ノ後速ニ必我政府施行スベキ事ヲ小官ヨリ外務卿 テ我政府一已ノ考ヲ以絹稅ヲ廢スル趣意ハ篤ト了得致シ此 信昨四日朝發露國ヲ經テ呈進ニ及候其要點タル外務卿ニ 事ヲ内密委員會ニ示スニ非レハ批准ノ實行ハレ難クト ニ有之此上小官ニ於テ致方無之不得止別紙ノ通呈電致シ

相譯シ候モノニ御座候 御承知可被下候昨四日相呈シ候電信則英文ハ右佛文草稿ヲ 佛文小官ト外務卿トノ談話書且右書中電報佛文草稿ニテ宜 餘程六ツカ敷カルベク相考猶御賢考ノ趣モ可有之候得共何 候事ニ御座候何分此上ニモ我ヨリ此事ニ付相望候トモ最早 カ歩ミ合ノ御處分第一ト相考御決答相待申候委細ハ別紙

右甲稟二及度內啓此如御座候 也

十七年十二月五日

巴府ョ

茂 韶 拜

外務卿閣 -F

(追甲省略)

附屬書一

十七年十二月四日發蜂須賀公使來電

Copy.

that they have intention to abolish ulteriorly ex-Japanese government will declare at the conference After exchange of views confidentially it has been Had an interview with Minister for Foreign Affairs. that I send From Hachisuka to Inouye you the following telegram;

make, If you accept this arrangement Minister for F. A. should foreign trade, that of our propositions of which the object is to will be authorized to support in the convention; moreover the same time will send full powers to sign the memorandum as the basis for negotiation and at he will send him also instructions to accept our tion, of a clause relative to export duties on silk, no longer to insist on the insertion, in the convenwill send instructions to French Minister in Japan Chambers at the time of ratification of new treaty. municate it confidentially to committe of French convention will be confirmed by written note from will have same duration as the duration of the commercial convention. Minister for Foreign Affairs that this suppression authorize me to declare confidentially to French so that Minister for Foreign Affairs can comduties in three bе effected directly after conclusion of on experience or four ports to be silk, Japanese government will French This of new regime engagement Minister in Japan conference to

established as to the situation of foreigners. Minister for F. A. has seen this telegram and approved it. Reply as soon as possible.

Dec. 4, 1884.

附屬書二

十七年十二月三日佛外務卿談話書

Pro-cès-verbal de l'entrevue de S. E. M. Hachisuka, Ministre du Japon à Paris, avec S. E. M. Jules Ferry, Président du Conseil et Ministre des Affaires Etrangères de France.

Paris le 3 Décembre 1884

M. Jules Ferry.—Voici le projet du télégramme que j'ai rédigé d'après le vôtre et qui est destiné à être envoyé par V. E. à S. E. M. Ino-ouyé, Ministre des Affaires Etrangères à Tokio:

"J'ai eu une entrevue avec le Ministre des Affaires Etrangères, et je lui ai exposé vos instructions, mais il maintient sa demande. Après échange confidentiel de vues, il a été décides que je vous

enverrais le télégramme suivant:

traité. le Ministre des Affaires Etrangères puisse le comconfirmé par une note écrite de moi, de façon que aurait la même durée que la Convention, serait serait effectuée aussitôt après 'la conclusion de la Affaires Etrangères de France que cette suppression rait à déclarer confidentiellement au Ministre des droit d'exportation sur les soies, férence qu'il a l'intention d'abolir ultériensement le Chambres, muniquer confidentiellement aux commissions des Convention Commerciale. Le Gouvernement Japonais déclarerait à lors de la ratification du nouveau Cet engagement, qui et il m'autorisela con-

Si vous acceptez cet arrangement, le Ministre des Affaires Etrangères adressera des instructions au Ministre de France à Tokio pour ne pas insister sur l'insertion, dans la convention, d'une clause relative au droit sur les Soies; il lui enverra, en même temps, pleins pouvoirs pour signer la convention commerciale. De plus, M. Sienkiewicz serait autorisé à appuyer dans la conférence celle des

propositions du mémorandum dont l'objet serait de faire, dans trois on quartre ports à ouvrir, à cet effet, au commerce étranger, l'expérience du nouveau régime à établir quant à la situation des étrangers.

Le Ministre des Affaires Etrangères à vu ce télégramme et l'approve.

Repondez immediatement."

M. Hachisuka.—Dans ce projet je vois que V. E. n'a pas parlé de ce que le gouvernement français accepterait notre mémorandum comme bases de négotiations. Nous y tenous beaucoup; car sans cette acceptation on ne pourrait pas ouvrir la conférence.

M. Jules Ferry.—Cela vas sans dire car je dis que j'enverrai les pleins pouvoirs à M. Sienkiewicz, je crois que c'est absolument inutile; cela serait un pléonasme; mais rien n'empêche que V. E. l'ajoute; toutefois je lui ferai observer que accepter votre mémorandum comme bases de négociation n'impliquerait pas l'accepter en entier; cela voudrait dire que l'on l'accepterait comme bases de discussions, sauf des modifications ultérieures qui

pourrait résulter de la conférence.

M. Hachisuka.—Certainement. (Il ajoute dan le projet le passage suivant:

"Il acceptera notre mémorandum comme bases de négotiations et lui (à M. Sienkiewicz) enverra les pleins pouvoirs pour signer &c. &c.")

M. Jules Ferry.—Oui, très bien.

(fin)

三二八 明治七年三月三十四 井上外務卿宛 申 外衛衛 東京 東須賀駐佛公使ョリ

絹輸出稅廢止ニ關スル件

附屬書 十二月二十五日相呈シ申候 世界不致に旨相答置申候願小官ヨリ相呈シ候電報ニ有之アレンニ付夫ハ幸ノ事ニ存必候作去小官ハ未ダ何事モ右ニ付承知 一十四日附呈シ候電報ニ掲載有之通リ 一十四日開発シ候電報ニ掲載有之通リ 「マンントー御異議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御異議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御異議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御異議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御異議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御異議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御具議ナクシヤンキウイツ氏へ御決答相成候事 でスントニ御具に関する。 でスントニの決定。 でスントニのに、 でるないに、 で

communication

that silk duty

question has been

in Japan

he has received from French Minister

French Minister for Foreign Affairs stated to me

中將樺山少將其他ト共ニ御出發ノ趣貴電信拜受依テ即日佛 貴官特命全權大使ニ認ゼラレ本月二十一日朝鮮へ向ケ高島(ない) 候得共委曲ハ何分不分明ノ趣相答置申候然ル處其後 **務卿へ出會ノ節如何ナル報知有リシ哉トノ尋ニ付朝鮮ニ於** 朝鮮事件ニ付テハ過ル十八日當府伊國大使館夜會ニテ佛外 日面會ノ節右小官ヨリ 外務卿公然トナク小官直翰ヲ以其旨通知致置候處昨二十四 本公使館付護衛兵ト支那兵ト小戦争有之シ由ノ電報相達シ テ内亂起リ閔氏始五六人政府ノ人暗殺セラレタル由並ニ日 速ニ通知致シ候事至極滿悅ノ體ニテ

右條々申上置候也

挨拶有之候

巴里ョ

韶

茂

閣

下

(追書省略)

註 1前揭三二七附屬書一 2本號附屬書參看

+ 七年十二月二十五日發蜂須賀公使來電 From Hachisuka to Inouye.

申候御多忙中ヲ不顧カ如ク相運ヒ候得共不得止事情宜御洞 察ノ程奉希候 ヲ生シ可申相恐候ニ付則別紙ノ通一昨二十一日拙電相呈 談判端ヲ改メズンバ談決如何ト心配致シ隨テ追々遷延ノ患 候)萬一フヱレー氏内閣變換等ノ事ニ相成候時ハ又絹稅ノ 的彌達スル哉否ハ何トモ不被計一論題ト相成可 申 哉 ト 存 京地方占有シ終リ其上費用ヲ要セズトノ考ト存候得共此目 兵費ハ即今ノ内閣ノ考ニテハ之ヲ要セズ其時迄ニハ總テ東 院ニテ如何可相決哉何共前知難致事ニ有之(欄外註、此出 シ

先ツ差當リ他ニ至急申稟ノ件 モ無之此段計申上留候 也

十八年一月二十三日 巴里ョリ

拜

務 下

密二 猶々近時當佛外務卿フェレー氏ト小官トノ間交誼追々 相赴キ萬事都合宜候ニ付此段ハ御安心奉希候也 親

1夫々三二七附屬書一及三二八附屬書來電參照

附屬書

+ 八年一月二十一日發蜂須賀公使來電 From Hachisuka to Inouye

井上外務卿時代 對佛交涉 三三〇

> silk; is no sign up to the present. here may take place at any moment although there me as soon as possible because ministerial changes ultimo in reference I am waiting reply I recommend you to decide it and telegraph to to my telegrams of 4 and 25 the question of duties on

21 January, 1885.

三〇 明治大生育二十日 **井上外務卿宛** 蜂須賀駐佛公使ョリ

絹輸出稅廢止ニ關スル件

附屬書一 十八年二月二十二日到外務卿往電 十八年二月二十六日發外務卿宛來電

書ニ掲載ノ通談話致シ候依テ昨二十六日猶又別紙乙號寫ノ 電信ニ付テハ深滿足ノ様子言辭ニ相顯レ申候 通拙電信相呈シ御返電相待居申候外務卿ニ於テハ此度ノ貴 依テ翌二十三日小官直翰ニ添へ貴電信寫外務卿フェレー氏 拜啓絹稅一條ニ付過ル二十二日別紙甲號寫ノ通貴電信拜受 へ相送り置而シテ二十五日同卿請日ニ付面會別紙佛文談話 一昨二十五日夜伊藤參議特派全權大使ニ命セラ 十八年二月二十五日佛國外務卿宛談話書 ν 西鄉參議

一〇五九

accordance with my telegram of 4 instant. settled between you and French Minister in rangements mentioned in my telegram. by telegram whether you have accepted Dec. 25, Answer all ar-Japan

1884.

三九 明治大年一月二十三日 井上外務卿宛蜂須賀駐佛公使ョ

絹輸出税廢止ニ關スル件

附屬書 一月二十一日發蜂須賀公使來電

(前略)

共即今佛政府ノ發議中スクリウタン、ド、 儘永續ノ見込有之候得ハ左ソミ御急キニ 機會ヲ外サズ御決定ノ事必要ト相考殊ニ當佛内閣モ今日ノ 絹輸出税一條ニ付テハ舊臘四日二十五日兩度拙電相呈候處 且當六月下院改選迄ニハ本年半季ノ東京出兵費ノ事等當議 其後御留守ニテ未ダ御返電無之事奉存候得共如此事件 モ及間敷哉ニ候得 IJ ストノ事ア 1、 其 IJ

明治十八年二月二十七日 巴府ニテ

韶

外務卿閣下

(追甲省略)

附屬書

甲號 十八年二月二十二日到外務卿往電

From Inouye to Hachisuka.

I had an interview with reference to silk question and have agreed on following arrangement: at the end of next conference Japan will make declaration

> proceed with negotiation on the basis of our memothat, in view of this arrangement, I desire that he evidence of friendship and good will towards Rerepresentative in considering this act of Japan as trust French government will concur with their his full satisfaction with this arrangement and I is to continue. abolished during period for which new convention powers to negotiate, conclude and sign convention. will lose no time in expressing his readiness to to Minister for Foreign Affairs and request him French Minister that said export duties will remain conference write confidential communication to the randum and to send to the French Minister come into effect. to take effect from date when convention is to abolish from her free will export duties on silk You are instructed to show this telegram The French Minister has expressed I will also before opening 22 Feb., of

附屬書二

乙號 十八年二月二十六日發外務卿宛來電

附屬書三

negotiate, conclude and sign Convention.

26 Feb.,

ル、フエリー閣下ト應接ノ筆記巴里駐劄日不國公使蜂須賀氏佛國内閣長兼外務卿ジュ十八年二月二十五日佛國外務卿談話書

シユル、フェリー氏

生糸輸出稅廢止ノ件新規取定ノ義

二項有之候第一、會議中井上、シェンキーウヰツノ兩氏ハ Ŋ 井上氏ハ該會議ノ終末ニ發議相成ルヘキ筈ニ有之候ヘハナ 如 **ヰツ氏へ全權ヲ送與スル前ニ閣下ニ御注意セサルヲ不得事** 客年來貴我相互熟議ノ結果ニ有之候然レトモシエンキーウ ジュル、フェリー氏 拙者ハ此結果ニ付甚タ滿足致候是ハ 工 付井上伯ノ電報ニ關スル貴翰正ニ領收致候 蜂須賀氏 可笑キ事ト被存候何トナレハ佛國カ該要求ヲ爲シタル事 何ノ振合ヲ取ラレ候哉ヲ承知致度事ニ有之候何トナレ ンキーウヰツ氏へ早速全權ヲ御送付相成候義ト確信致候 世人ノ既ニ知ル所ニ有之候 我公使ハ該件ニ關シテロヲ開カサル事ニ候哉然ル 右ノ電報有之候上ハ閣下ョリ在東京佛國公使 ヘハナリ或ハ井上氏ノ爲ニ棄 時ハ甚 ハ

as the basis of negotiation means simply to accept desire to know whether accepting our memorandum observation which may be superfluous consists of cussion of tariff question in the conference. declaration at the same time when you begin disclaim. It will be best that you should make ference say nothing about this subject till the end of con-It would be very odd if French Minister in Japan abolish silk duties only at the end of conference. course of conference, if you make a declaration to two observations, Minister for Foreign Affairs will all the points in the memorandum which is imposwith new arrangement in your last telegram, but Affairs about silk question. He is quite satisfied as the basis of discussion or to accept totally had an interview with Minister for French Minister in Japan will take in the consists of desire to know what attitude you he has the If you reply by telegraph to approve these since every body knows France made the French Minister in Japan following two observations. full powers to Foreign Second а

蜂須賀氏 御注意ノ趣旨ハ了悉致候電報ヲ以テ我政府へ通給手スルノ時ニ於テセラル、方可然ト存候ルへシ故ニ井上伯ノ發議ハ會議ノ初端若クハ稅目ノ討議ニルへシ故ニ井上伯ノ發議ハ會議ノ初端若クハ稅目ノ討議ニ

党書中ニハ注意ヲ要スヘキ條項夥多可有之様相見へ候ヘハ討議ノ基礎トシテ之ヲ承認スルノ意ニ有之候何トナレハ該戦アル各點ヲ渾テ承認スルノ意味ニ無之唯論議ノ起程卽チ載アル各點ヲ渾テ承認スルノ意味ニ無之唯論議ノ起程卽チジユル、フエリー氏 最好、尙又余ノ注意第二項ハ貴方ノジユル、フエリー氏 最好、尙又余ノ注意第二項ハ貴方ノ

千八百八十五年二月二十五日 巴里ニ於テジユル、フェリー氏 素ヨリ然リ右全權ハ送付可致候(畢)

右原文

Procès-verbal de l'entrevue de M. Hachisuka, Ministre du Japon à Paris, avec S. E. M. Jules Ferry, Président du Conseil et Ministre des Affaires Etrangères de France.

Paris le 25 Février 1885

M. Jules Ferry.—J'ai parfaitement reçu votre lettre relative au télégramme du Comte Ino-ouyé, à propos du nouvel arrangement sur la question de l'abolition des droits d'exportation sur les soies.

M. Hachisuka.—Par suite de ce télégramme, je ne doute pas que V. E. ne soit disposée à envoyer immediatement les pleins pouvoirs à M. Sienkiewicz, Ministre de France à Tokio.

M. Jules Ferry.—Je suis très satisfait de ce résultat; c'est le résultat de notre travail mutuel depuis l'année dernière, mais avant d'envoyer les pleins pouvoirs à M. Sienkiewicz, je trouve devoir faire à V. E. deux observations. La Ire observation est de savoir quelle attitude doivent prendre M.

moment même où l'on toucherait à la discussion Je crois qu'il yaut mieux que la déclaration M. Ino-ouyè? l'abolition de ces droits pour se voir refuser cette réclamation. fermé sur cette question? Est-ce que notre représentant tiendrait la bouche no doit avoir lieu qu' à conférence, puisque la déclaration de M. Ino-ouyé Ino-ouyé et M. car tout le monde sait que la France a fait commencement de Cela semblerait jouer de la comédie Sienkiewicz dans le cours de la M. Sienkiewicz demandrait-il la fin de la conférence. Cela serait alors la conférence, ou au très par ait

M. Hachisuka.—Je comprends parfaitement cette observation; je la ferai savoir à mon gouvernement par télégraphe.

M. Jules Ferry.—Très bien; maintenant ma seconde observation consiste à savoir que accepter votre mémorandum comme bases de négotiations ne signifie pas accepter en bloc tous les points mentionés dans ce mémorandum, mais veut dire seulement l'accepter comme points de départ ou plutôt

comme bases de discussions, car, dans ce mémorandum, il me semble qu'il y a beaucoup de points sur lesquels il y a des observations à faire.

M. Hachisuka.—Je crois que le mot *négotiation* implique *la discussion*. Je signalerai aussi cette observation à M. Ino-ouyé.

Si V. E. obtient la réponse du Comte Ino-ouyé sur ces deux observations, est-ce qu'Elle serait disposée à envoyer de suite à M. Sienkiewicz les pouvoirs de négocier, conclure et signer la Convention.

M. Jules Ferry.—Parfaitement, je les enverrai.(fin)

三三 明治十八年五月八日 蜂須賀駐佛公使ョリ

絹輸出稅廢止ノ件

II 十八年五月二日到外務卿往電 一十八年五月二日到外務卿往電

(絹輸出稅廢止問題ニ鶋スル件)

拜啓偖ハ絹稅一條ニ付御往復ヲ重ネ候後過ル二日貴電報接

最早佛政府異議ノケ條ハ總テ消滅候ニ付全權ヲ在日本佛公 尤二日接手ノ貴電報寫之ニ相添甲候外務省商務局長クラブ 憎面會ヲ不得依テ同タ小官自筆書翰別紙寫ノ通リ申入置候 手依テ過ル六日水曜日外務卿請日ニ付外務省へ相越候處生 (以下略) 使へ送り候事多分不日相行ハレ候事ト頻ニ希望致シ候 レー氏へハ其前面會疾ト當方ノ意相通シ置甲候今日ニテハ

十八年五月八日

巴里ョリ

茂 韶

務 卿閣下

1附屬書二往電ナルニ付参看

附屬書

十八年五月六日附佛國外務卿宛往翰

Paris le 6 mai 1885

M. le Ministre

portation sur les soies. inclus relativement à la question des droits d'ex-Ministre des Affaires Etrangères, le télégramme civiens de recevoir du Comte Ino-ouyé, notre

tions conformément au désir de votre gouvernement Comme cet arrangement a reglé toutes les objec-

> télégraphique. Sienkiewicz, et d'en avertir ce dernier par voie randum, conclure et pouvoirs de négocier sur les bases de notre mémoje prierais V. E. de vouloir bien envoyer les pleins signer la Convention,

serai très reconnaisant à V. E. de vouloir bien me possible. donner votre réponse le plus tôt qu'il vous serait parlé avec M. Clavery aujourd'hui;

Veuillez.

M. Hachisuka

M. de Fereycinet

Ministre des Affaires Etrangères

附屬書二

(絹輸出税廢止問題ニ關スル件) 十八年五月二日到外務卿往

Received the 2nd May 1885

Hachisuka

From Gaimukio. Between French Minister and

standing comes into effect and that they will neither be of same convention. In consequence of this underdirectly nor indirectly reestablished during duration abolished at the same time when new convention Foreign Affairs at interview of 25 February last. convention as promised to you by late Minister for French Minister full powers to conclude and sign Foreign Affairs to forward as Conference stating that duties in question will be Minister for Foreign other hand you will write confidential note on silk will be the Conference I will announce that export duties myself it has been agreed to that upon opening of you are instructed to ask Minister for ultimately suppressed. Affairs before opening soon as possible On the $^{\mathrm{of}}$ tо

Hanabusa.

明治大宝月十五日 井上外務卿宛蜂須賀駐佛公使ョリ

在本邦佛國公使ヘノ全權委任狀ノ件

附屬書 十八年五月九日附佛外務省商務局長來翰 十八年五月九日邊蜂須賀公使來電

并上外務卿時代 對佛交涉 田田川

考二御座候也 使へ全權委任狀送出可相成候得共猶爛ノ處承合次第呈電ノ 乙號寫ノ通電報相呈シ申候來ル二十二日ニハ必在日本佛公 局長クラブレー氏ョリ別紙甲號寫ノ通書翰到來候ニ付別紙 **拜啓偖ハ絹類稅一件ニ付過ル八日呈書後翌九日外務省商務**

十八年五月十五日

巴 里

茂 韶 拜

閣下

書可差出候義二付御訓令奉待候也 猶々東京決議會御開設前小官ョリ佛政府へ公然トナク覺

附屬書し

甲號 十八年五月九日附佛外務卿商務局長來翰

Paris le 9 mai 1885

Monsieur le Marquis,

de S. l'envoi des pleins pouvoirs, a été expédié hier soir. Ces pleins pouvoirs seront transmis par la prochaine que le valise, c'est-a-dire le 22 mai m'empresse de vous faire savoir, de la part Ĺή télégramme anonçant à M. M. le Ministre des Affaires Etrangères, Sienkiewicz

Hachisuka.

Veuillez.....

Clavery

Directeur des Affaires Commerciales

M. le Marquis Hachisuka &c. &c. &c.

乙號 (佛國在本邦公使へノ金權委任方ニ關スル件) 十八年五月九日發蜂須賀公使來電

Telegram sent 9 May 1885

Minister for Foreign Affairs, Tokio.

of conference in order that I may write before Convention will be sent by French mail leaving 22 on the basis of our Memorandum and to sign the at Tokio announcing that full powers to negotiate has telegraphed last opening of conference confidential note to Minister for Foreign Affairs according to the text contained in your telegram 2 instant. Minister for Foreign Affairs has informed me he Will you telegraph me the date of opening evening to French Minister

> 明治十九年五月三日 井上外務大臣宛佛國公使ヨリ

絹輸出稅廢止宣言ノ件

外務大臣井上伯閣下

シェンキエウヰツ

會議開始相成候ニ付本月二十二日ノ發會ニ閣下御明言可相 之候處此儀ニ付我政府ヨリ問合有之候間右ハ五月一日ヨリ 絹糸税廢止ノ儀ハ會議開始ノ際御明言可相成等ニ御約束有

右ノ趣旨蜂須賀侯ヨリモ我政府へ御申通相成候様御取計被 下候ハ、幸甚ニ存候敬具

成筈ニ有之候旨電信ヲ以テ回報可致積ニ御座候

千八百八十六年五月三日

欄外註

本件ノ 回答ハ大臣御面談ニテ事濟タ

(右原文)

Mon cher Comte,

Le ω

Mai 1886.

Interrogé par mon Gouvernement au sujet de la

Ξ 十九年五月十日井上外務大臣往電十九年五月六日佛外務大臣返翰。

六月廿五日到

機密 復相成居ル事ト存候ニ付當國外務大臣へ可申入樣ト 別紙乙號ノ通回答有之候然ルニ一昨日丙號ノ電報接手小官 別紙甲號ノ通甲送リ同時ニロ上ニテモ其趣旨通知相成候所 可致旨電報ヲ以テ蜂須賀公使へ訓令相成候ニ付同公使ヨリ リ諸事御回答可相成存候 モ相見得候へ共其マ、蜂須賀公使へ轉送致置候間同公使ョ ニ於テハ何分了解難致多分在西班牙蜂須賀公使ヨリ直接往 生糸輸出税廢止ノ儀ニ付當國外務大臣へ機密信ヲ以テ通知 第二十四號

右甲進候也

Sinkiewicz

ma très haute considération.

Excellence si Elle voulait bien prier M. le Marquis

Hatchisouka de s'exprimer dans le même sens.

Veuillez agréer, Mon cher Comte, l'assurance de

l'ouverture de la séance du 22

de ce mois que

conférence,

engagée à droits sur

faire au début des délibérations de la

je repondrai par le télégraphe que la

les soies que

Votre

Excellence ultérieur

s'est des

déclaration

concernant l'abolition

conférence

s'étant constituée le

]er

Mai c'est

ינם

Votre Excellence fera la déclaration dont il s'agit.

Je serais, d'ailleurs, très reconnaissant

à Votre

明治十九年五月十四日

在佛國

Ministre d'Etat, Ministre des Affaires Etrangères

三四

明治式等月十四日

井原

上外務大臣宛

絹輸出稅廢止宣言ノ件

附屬書一

十九年四月二十八日蜂須賀公使ョリ佛外務

Monsieur le Comte Ino-ouyé

Son Excellence

臨時代理公使 原

散(印)

外務大臣伯爵井上馨殿

「機密信ヲ以テ通知可致旨」ノ電報見當ラズ

附屬書一

甲號 明治十九年四月二十八日蜂須賀公使ョリ佛國外務大臣宛往

井上外務大臣時代 對佛交涉 三回

大臣宛往翰

佛國外務大臣

在巴里日不特命全權公使

フレーシネー閣下

蜂須賀茂韶手記

糸絹布ニ通シテ用ユヘキ我政府ノ意ニ有之候旨内密ニ閣下 間接ニ論ナク該税ヲ不取立而テ右絹糸ナル語ハ等ク蠶繭生 約實施ノ上ハ絹糸輸出稅ヲ廢シ該條約ノ行ハル、間ハ直接 以書翰致啓上候陳者我帝國政府ニ於テ目下談判中ナル新條 ニ可致御通知旨井上伯ヨリ通報到來致候

右開會前ニ前顯決定ノ次第ヲ閣下ニ可及御通知旨拙者へ下 候二付テハ客蔵閣下ト拙者トノ間ニ取極メタル趣意ニ隨ヒ 新條約決議ノ會ハ五月一日東京二於テ開カル、都合二有之 命相成候敬具

千八百八十六年四月二十八日

(右原文)

Son Excellence Monsieur de Freycient Paris le 28 Avril 1886

Ministre des Affaires Etrangères

Je viens de recevoir du Comte Inouye un télé-Monsieur le Ministre

> la soie grége, et la soie fabriquée. mon Gouvernement entend les cocons, la soie brute, nouvelles Conventions, et que par le mot "soies" ment tion, que ces droits ne seront pas rétablis, directeles Conventions qui sont actuellement en négociasoies au moment de la mise en vigueur des nouvel-Impérial ellement gramme qui me donne l'ordre d'informer confidentiou abolira Votre indirectement, Excellence les droits pendant que le d'exportation sur les la durée

suis chargé, par conséquent, conformément aux de la Conférence. connaissance de Votre Excellence avant la réunion Excellence et moi, arrangements Conventions doit se réunis à Tokio le 1 Mai; je La Conférence pour l'achèvement des nouvelles pris de l'année porter cette décision à dernière entre Votre

&c.

signé Hachisuka

附屬書二

乙號 十九年五月六日附佛國外務大臣返翰

H 木特命全權公使侯爵

在巴里

蜂須賀茂韶閣下

フレーシネー手記

公使ニ及通知候ニ付御通知ノ次第ハ委細領承致候旨貴政府 越ノ趣ハ四月三十日附電報ラ以テ在東京我共和國特命全權 以テ御中越ノ趣致承知候右御通知相成候段致鳴謝候即御申 候儀貴政府ヨリ閣下へ許可有之候旨客月二十八日附貴信ヲ 税ヲ不被取立而テ右絹糸ナル語ハ等ク蠶繭生糸絹布ニ通シ テ可被用貴政府ノ御意ニ有之候旨内密ニ拙者ニ御通知相成 糸輸出税ヲ廢シ該條約ノ行ハル、間ハ直接間接ニ論ナク該 謹啓陳者貴政府ニ於テ現今談判中ナル新條約實施ノ上ハ 御通知相成度奉希望候

井上外務大臣宛電報相成候通り「新條約」ノ文字ハ貿易上 本件二付襲日御協議二及ヒ千八百八十四年十二月閣下ョ 意候敬具 事項ニ關スル條款ニモ適用スル事勿論ニ有之候此段得貴 ·ŋ

千八百八十六年五月六日

(右原文)

e Mai 1886

Monsieur le Ministre Hachisuka Paris 6

Ministre du Japon à Paris

ventions, et que par le indirectement, pendant la durée des nouvelles Conla soie fabriquée. ment Impérial entend les cocons, la soie grége, et ventions qui sont actuellement en négotiation, que moment de la mise en vigueur des nouvelles Conabolira les droits d'exportation confidentiellement que le Gouvernement Japonais vous avez bien voulu me faire connître que vous étiez autorisé par votre Gouvernement à m'informer Par une lettre droits ne seront pas rétablis, directement ou en date mot "soies" le Gouvernedu 28 du mois dernier sur les soies au

j'ai pris acte de la la République à Tokio, le 30 Avril par voie téléj'ai d'ailleurs donné connaissance au Ministre de vouloir bien faire savoir à votre Gouvernement que graphique, je vous prierai, Monsieur le Marquis, de En vous remerciant de cette communication, dont déclaration qu'elle contient

de l'accord qui s'est établi antérieurement sur ce Il est, d'ailleurs, bien entendu qu'en conformité

sujet, et qui a fait l'objet du télégramme que vous avez adressé à Mr. Inouyé au mois de décembre 1884, le terme de "nouvelles Conventions" s'applique aux stipulations relatives au régime commercial.

රුදුර

signé Freycinet

附屬書三

號 十九年五月十日附井上外務大臣往電

From Inouye to Hachisuka

stated in my last telegram. when the new convention goes into effect &c. that silk duty will be abolished at the same time tion that Japanese Gouvernement is free to diminish settled the question of tariff, I will make a declara-Affairs in my name that, after the Conference has impossible, promise French Minister for Foreign ment on my part at this conference for reasons object in last telegram is to do away with announceconference as per your telegram of 8 instant. My per my telegram of April 26, but not after You may tell French Minister for Foreign Affairs abolish any export duty. If, however, Try to accomplish this is the as

this as soon as possible.

10 May 1886,

|二||五 明治大張月二十日 赤上外務大臣宛

絹稅廢止宣言ノ件

一十九年五月十七日發原代理公使來電附屬書一十九年五月十四日附原代理公使宛往電

||| 十九年五月十九日佛外務省通商局長ョリノ|| 十九年五月十九日佛外務省通商局長ョリノ

四 十九年五月十九日發原代理公使來電

機密 第二十五號

七月三日到

ルナ七日當國外務省通商局長クラヴリー氏ニ面會イタン訓御回答可申進旨去十四日發賣電接手致候然ルニ去十四日附使出先キニ於テ接手ノ都合ニ取計候ト見候小官ニ於テハ何使出先キニ於テ接手ノ都合ニ取計候ト見候小官ニ於テハ何機密第二十四號ヲ以テ申進候通露京經由ノ電報ハ蜂須賀公使へ轉電致候同公使ョリ往復電報幷同公使ヨリ當國外務大臣へ出電致候同公使ョリ往復電報幷同公使ヨリ當國外務大臣へ出生糸輸出稅廢止ノ義ニ付別紙甲號ノ通十九日迄ニ遲クトモ生糸輸出稅廢止ノ義ニ付別紙甲號ノ通十九日迄ニ遲クトモ

明治十九年五月廿一日

在佛國

臨時代理公使 原

敬(印)

外務大臣伯爵井上馨殿

附屬書

甲號 十九年五月十四日附原代理公使宛往電

From Inouye to Hara.

井上外務大臣時代 對佛交涉 三三五

Before the meeting of the Conterence on 22 Japanese Government desire to settle the subject of my telegram of 6 instant. Consult with French Minister for Foreign Affairs at once and reply by 19 at the latest.

May 14, 1886.

註 1五月六日外務大臣發ノ電報見當ラズ

附屬書二

乙號 十九年五月十七日發原代理公使來電

I shall receive on 19 May in the morning definite answer of French Minister for Foreign Affairs about declaration of abolition of export duty on silk. He has serious objections to the total suppression of a declaration. I hope to telegraph on 19 May that an arrangement is made of a kind to satisfy you.

May 17, 1886.

附屬書三

丙號 十九年五月十九日佛國外務省通商局長ョリノ覺書

J'ai fait connaître au Ministre des Affaires Etrangères que le Gouvernement Japonais attacherait

droits d'exportation de toute nature. que le Japon sera libre de diminuer ou d'abolir les au moment du réglement de la question de tarif, riez pouvoir tout au moins vous borner à déclarer, sortie sur les soies. Conférence son un grand intérêt à être dispensé de déclarer à la intention d'abolir les droits de J'ai ajouté que vous désire-

de la France par le Japon et constaté dans les que nous proposons actuellement. Il est bien entendu Sienkiwicz pouvoir s'y prêter, la déclaration générale substitue, la déclaration convenue en décembre 1884, ou, ajourne, s'il y a lieu, jusqu'à la dernière séance, après entente avec le Ministre de France au Japon, République consent à ce que le Cabinet de Tokio, est nécessaire, mais que le Gouvernement de la les 28 Avril et 6 Mai derniers, demeure intact. Mr. de Freycinet m'a répondu qu'une déclaration dans tous les cas, l'engagement pris vis à vis que j'ai échangées avec si les circonstances paraissent à Mr. Mr. de Freycinet

termes qui précédent viennent d'être adressées Des instructions télégraphiques concues dans les par

> 附屬書四 Mr. de Freycinet à son Représentant à Tokio

丁號 十九年五月十九日發原代理公使來電

From Hara to Inouye

of meeting your views, French Minister for Foreign to suppress the declaration altogether. But, desirous place itself in a false position, if it now consented ed this fact to the Powers and would therefore abandonment of a declaration at the Conference, Affairs consents to one of the following solutions: make a declaration, the French Government informbecause, when you accepted in spring last year to it is not possible for him to consent to an entire French Minister for Foreign Affairs states that

reserves expressly for the French Minister in Japan of 27 April last year; or you would make a general 22 and 26 February last year and in your telegram 10 instant. declaration as proposed in your telegrams of 7 and as stated in telegrams from Hachisuka to you of Conference, after all is finished, specific declaration Either you would postpone till the last sitting of But French Minister for Foreign Affairs

for Foreign Affairs to French Minister in Japan. alogous telegram is sent to-day by French Minister an understanding with him before deciding. Ansolutions. right of approving your choice between these two It will be necessary for you to come to

May 19, 1886

三六 明治三生月二十日 井上外務大臣宛原駐佛代理公使ョリ

佛語ヲ法廷用語ニ採用方ノ件

附屬書 二十年一月十九日發原代理公使來電 (佛語ヲ法延用語ニ採用方ノ件)

三月五日到

外務大臣云 今日御招キ致シタルハ餘ノ義ニアラス條約改 即チ同日外務省ニ赴キ面會致候所條約改正案中英語ヲ法廷 交官面會ノ例日)拙官ニ面會致度旨屬官ヲ以テ申越候ニ付 去十八日當國外務大臣フロランス氏ヨリ明十九日午後 ノ官語トナスヘキ件ニ付槪略左ノ通談話有之候

英語ヲ法廷ノ官語トスルノ件アリ此義ニ付テハ我公使ハ | 會議ニ關シ我公使サンキウイツ氏ヨリ得タル報告閱スル

> 拙官云 此義ニ付テハ今日マテ訓令ハ勿論未夕會議錄ヲモ 分ノ回答ヲ求ムヘク候 接手致サス候ニ付遺憾ナカラ其理由ヲ說明致ス事能ハス然 解シ難キ事ニ付貴下ヨリ説明ヲ得タキ次第ニ候 ナシ居ル事ナレハ英語ノミヲ法廷ニ採用セラル、事ハ何分 シナカラ御談話ノ趣ハ直チニ電信ヲ以テ井上伯ニ中送リ何 國ト共ニ多少ノ利益ヲ有シ又日本國ニハ殊ニ親密ノ交際ヲ 一應ハ異議ヲ提出致シタル由ナルガ我佛國ハ東洋ニ於テ他

外務大臣云 然ラハ右様ニ願タシ

居り又佛國ハ是マテ日本ニ對シテハ最モ親密ノ交際ヲナシ 拙官云 御談話ノ要點ヲ今一應承ハル事ヲ得ハ幸ニ存候 採用セラル、事」ニ有之候 用セラレタルハ遺憾ニ思ハレ候勿論佛國政府ノ希望ハトア 程ノ次第ナレハ英公使ノ發議ニヨリテ英語ノミヲ法廷ニ採 此度ノ改正新案ニモ同僚ト共ニ我公使ヨリ同意ヲ表シタル 外務大臣云 。御承知ノ通佛語ハ歐洲ニ於テ最モ廣ク用ラレ レハ「英語ト共ニ佛語モ採用セラレ卽チ英佛兩國ヲ法廷ニ

拙官云 キニ付尚水其上ニテ可申述候 委細了承致候數日ノ後必ラス井上伯ノ返電ヲ得

language should be adopted conjointly with English.

Reply by telegraph.

佛ヨリ採用セラレ居リ候處此度英語ヲ採用セラル、事ニ相 右ニテ終リ雑話ノ後歸館致候要スルニ法律其他ノ事是マテ 成侯テハ多少佛國ノ利益及勢力ニ關スル事ト認メ此發議ア リタル様相見得候

何分ノ御訓令ヲ得ヘク存候ヘ共不取敢此段申進候敬見 前陳ノ次第ハ即日電信ヲ以テ別紙寫ノ通申進候ニ付不遠內

明治二十年一月廿一日

在佛國

臨時代

外務大臣伯爵井上馨殿

追而前陳ノ談話ハー應ノ問答ニ付別ニ ノハ無之候 プ 1 ト」様ノモ

(佛語ヲ法延用語ニ採用方ノ件) 二十年一月十九日發原代理公使來電

From Hara to Inouye.

of English as official language of law court under verbally to-day what is the reason of the adoption French Minister for proposed arrangements. Foreign Affairs asked me He claims French

> 三三七 明治三年月二八日 井上外務大臣宛原駐佛代理公使ョリ January 19, 1887.

佛語ヲ法廷用語ニ採用方ノ件

附屬書 二十年一月二十二日附原代理公使宛往電 (法延用語ニ英語採用ニ關スル件)

機密 局長ハ未夕本件ノ會議錄ヲ接手致サス只サンキウイツ氏ョ 致候所同氏ニ於テハ篤ト取調ノ上尚ホ御談話可致トノ事ニ 務大臣ニ面會致御返電ノ佛譯文ヲ示シ候所右電文ノミニテ 米國便ヨリ接手致シ事情稍々了解被致候ニ付一昨廿六日外 御返電ヲ得尚ホ會議錄第九ヨリ第十一ニ至ルマテ去廿四日 法延ニ英語採用ノ義ニ付前便機密第四號ヲ以テ外務大臣フ 付卽日通商局長クラヴリイ氏ニ面會致前意ヲ辯明致候所同 **ロランス氏ト談話ノ概要申進置候處去二十二日別紙寫ノ通** ハ充分ニ了解難致趣談話ニ付會議錄記載ノ主意ヲ摘示辯明 入組ミタル書翰ヲ得タルマテト中事ニ付携帶ノ會議錄ヲ 第七號 三月十六日到

== 面會ノ時日ヲ定メ委細ノ返答有之筈ニ取極メ候同會議錄 ョリテ多分英語採用ノ難巳事情了解可相成哉ト推測致居 シ且ツ同氏ノ請求ニ依テー時貸與致置キ候末其內同氏

右申進候敬具

明治二十年一月廿八日

在佛國

臨時代理公使 原

敬(印)

外務大臣伯爵井上馨殿

1前掲三三六文書ナルニ付参看

(法廷用語に英語採用ニ關スル件) 二十年一月二十二日附原代理公使宛往電

From Inouye to Hara.

if they were obliged to acknowledge more than one it would cause great inconvenience to the tribunal reason that English language is spoken by more foreign than three fourth of foreigners in Japan and that question has language as official been settled already for the

January 22, 1887.

三人 明治三生月十八日 井肚外務 が大臣宛ヨリ

佛語ヲ法廷用語ニ採用方ノ件

機密 起スマテニ付見合スヘシ乍去佛政府ハ會議結了ノ後ヲ待テ 申進置候通辯明ノ末通商局長クラヴリー氏へ會議錄貸與イ 法廷ニ英語採用ノ義ニ付本年機密第四號丼ニ第七號ヲ以テ 異議ヲ申越候事ハ有之間敷被存候へ共改正條約批准ニ際シ 前陳異論ノ件々ヲ提出シテ修正ヲ加フヘキ見込云々ニ有之 改正會議ニ再ヒ異議ヲ提出スル事ハ徒ラニ會議ノ混雜ヲ惹 話ニハ右ニ關シテ佛政府ハ異論ノ件々ヲ佛公使ニ訓令シテ タシ彼方ノ報知相待居候所同局長限リマルシヤル氏へノ談 テハ多少異論可有之存候 タル趣マルシャル氏ヨリ申出候就テハ差向キ佛國政府ヨリ 第九號 三月三十日到

明治二十年二月十八日

·右申進候敬具

一〇七六

臨時代理公使 原

敬

外務大臣伯爵井上馨殿

三三九 明治三等三十九 **非上外務大臣宛** 原駐佛代理公使ョリ

外國籍判事採用ノ件

附屬書 二十年七月六日發原代理公使來電 (外國籍判事採用方ノ件)

第三十八號

九月十二日到

、キ哉ノ景況略ホ相見得唯サンキウイツ氏ノ申出ニヨリ檢事 當國外務省通商局長へ内談致彼ニ於テ我意見ノ通承諾スへ 四五號貴信去六月十一日接到披見致候右訓令ノ趣旨ニ基キ 條約改正後外國籍判事採用ノ件ニ付五月四日附機密送第四 然ルニ其後在伯林公使館ヨリ追々廻送相成候電報寫披見致 ラモ各大國ニ分割スヘキ事ト了解致居候由ニテ此點ニ付尚 訓令ノ敷ニ幾分ノ變更ヲ生シタル様相見得候ニ付最初御訓 **候所各國へ分割ノ人員ハ米國ノ部ニ多少ノ變化有之最初御** 令ノ數ヲ以テ引續キ當國政府へ談判難致被考候依テ本月**六** ンキウイツ氏へ談話致スヘシト通商局長ノ返答有之候

日別紙寫ノ通電報ヲ以テ更ニ訓令ヲ仰キ候此段事情申進候

明治二十年七月廿九日

在佛國

臨時代理公使 原

外務大臣伯爵井上馨殿

註 1一四八文書ナルニ付参看

二十年七月六日發原代理公使來憶

(外國籍判事採用方ノ件)

From Hara to Count Inouye Paris, 6 July 1887.

have without further instructions from you. modified. pose that the number granted to United States may success. to your instructions, and had good prospects of Government on the basis of 10, 15 and 10, according Have been negotiating about judges with French been changed. But news from Berlin leads me to sup-I do not venture to continue negotiations If it is true basis becomes

交

三四〇 明治十三年六月十日 青木駐獨公 井上外務卿

條約改正談判ニツイテ内意通達ノ件

委員派出迄請求ノ考祭ニ有之候得共各政府ノ意見追々ニ聞 按モ箇條變換ノ手段ニ付略各國政府モ同意ノ場合ニテ全權 候御出立頃迄ニハ各政府ノ意見モ夫々粗承リ込候上ニテ草 彼成候事ト奉存候(中略)別封ノ内書ハ夫々へモ差遣シ申 別後船中御差支無之頃日ハ最早桑港へ御着併於倫頓府披封 失シ可中懸念ヲ生シ候故此度ハ斷然草按ノ主義一通リ辯解 込夫々随テ書翰ト電報ニテ應答致候テハ終ニ收末スル處ヲ 改正事件ハ協議ニ成立セシ事柄故其手段ノ方却テ速ニ相運 換等ハ實地ニ付協議ノ上決定致度愚存ニ御座候勿論此度ノ 分ヲ顯出セシ時老兄ノ御見込策他ト相圖リ純乎トシテアド ヒ可中候尤老兄ト中合置候獨政府自然此草按ヲ一見シ不充 シ其旨意相貫候上速ニ全權委員派出ヲ請求シ箇條ノ存廢交 ニストレチーブノ法ヲ(別限ノ有無ニ不係)吾政府握掌

大阪京都等其代リ開場候事ハ困リ中候爲如何カ彼ノ人力車 之候間此度同氏モ非常ノ功ヲ奏シ此一事モ決濟スル時ハ實 度ハ平常公使ト御勘考無之質ニ老兄ノ質効ヲ奏スルハ今日 知致シ吳候ハハ三都ヲ開キ候事ハ充分盡力可仕候尤行政規 ミクレーム又ハホリスロー中ノ違徒罪此度二ケ條ノ決末承 テ事ヲ成スヲ第一トシ銘々其功ヲ顯ハサンコトヲ深切ニ不(マトン) (被2)何卒森鮫島兩公使等異論ヲ不生様何モハーモニョースヲ以 何卒森鮫島兩公使等異論ヲ不生様何モハーモニョ 付各全權委員ヲ差出シ其最初ニ調印ノ都合ニ爲致度候間此 何分ニモ獨政府ヲシテ最初ノスリ臺ニ致シ候様速ニ方向ヲ 則ハ立法計ニ無之之ヲ裁判スル權迄ヲ籠メタル事ニ御座候 スル事件相談相付候へハ別テ妙策ニテ充分滿足仕候尤東京 奉存候謹言 成候樣此際ハ森鮫島兩公使ヘモ御談話被下度候御自愛専一 ニ老兄ト同氏ノ爲邦家ニスル大効ト可謂事業ニ候(中略) ニ有之候又シーボルト氏モ隨分人ノ未夕同人迄不許處モ有

十三年六月十日